

# ますらをたちの旅

長州ファイブ物語

一坂 太郎



萩ものがたり

# まさらをたちの旅

長州ファイブ物語

一坂太郎 Ichisaka Taro



ロンドンにおける長州藩秘密留学生。  
左より井上聞多・遠藤謹助・野村弥吉・  
山尾庸造・伊藤春輔

太田 達也

ましろちやわの巻

目 次

ましろちやわの巻	1
プロローグ	1
第一章	5
第二章	37
第三章	75
第四章	113
第五章	149
エピローグ	179

本居宣長著  
・吉田秋月・伊藤和氣・佐野花舟  
・鶴嶽・高嶺

ヨーローブ

横尾聲

津田聲

森山聲

第三聲

津一聲

アロローブ

## 目 次

「一百年以上わたって日本と通商した鹿児島の屋敷曾が、南洋大通航により開拓を始めたのは、既に第一アリヤの来航」からである。日本とおもな時代の開拓行為は、

嘉永六年（一八五三）六月三日、アメリカのアンソニー・J・ペリー提督率いる四隻の艦船が江戸湾に姿を現わし、薩摩へ突ける事で、開拓するよう求める。

## ますらをたちの旅

長州ファイブ物語

### 一坂太郎

（上に断片にて、略記する。）

（式年四）三月三日、再びしたベリーとの間に日本和服貿易を締結した。（二）日本は、開拓の事、要求を認めたのである。

（同前）「日本の開拓け放さざむが！」

（同前）「この度の開拓要請を、日本で開拓の力をしながる開めていたのは、吉田寅次郎といつて吉田殿、名いよがれだ。その吉田といふ。」

（同前）「吉田寅次郎が、吉田はひづの先生と開める。門人にしてたばかの金子

幕府とアメリカ開港  
ますひあたきの前　一葉大咀

## プロローグ

二百年以上にわたって日本を統治し続けた徳川幕府の屋台骨が、音をたてるよう崩壊を始めるのは、世に言う「ペリー来航」からである。幕末と呼ばれる時代の幕開けだ。

嘉永六年（一八五三）六月三日、アメリカのマシュー・C・ペリー提督率いる四隻の黒船が江戸湾に姿を現わし、鎖国を続ける幕府に開国するよう求めた。

鋼鉄張りの巨大な黒船は黒煙を吐き、空砲をぶつ放し、江戸湾を勝手に測量して威嚇する。こうしたペリーのやり方は、後に「砲艦外交」と呼ばれるほど強引だった。

幕府はペリーの要求を受け入れ、アメリカ大統領の親書を受け取る。そして翌安政元年（一八五四）三月三日、再来したペリーとの間に日米和親条約を締結した。ここに日本は、開国への第一歩を踏み出すのである。

「幕府の腰抜け武士どもが…」

一連の黒船騒動を、江戸で歯ぎしりをしながら眺めていたのは、吉田寅次郎という二十四歳の若い武士だった。号を松陰といふ。細く吊り上がった目をきらつかせ、松陰はひとつ決意を固める。門人にしたばかりの金子

重之助を伴い、伊豆半島の南端に位置する下田という港町に向かつた。

そして三月二十七日深夜、下田港に停泊中だったペリーの黒船に近づき、自分たちをアメリカに連れて行つてくれるよう頼みこんだ。もちろん幕府は海外渡航を禁じているから、密航しか道は無い。

横暴きわまりないアメリカの態度に、松陰は激しく憤どおつていた。こんな国とは、いずれ戦争になるに違ひない。ならば一足先に自分がアメリカに渡り、かの地の様子を調べておこうと、考えたのだ。

「国禁を犯しても世界中をめぐり、勉学に励みたいのです、お願ひします」

甲板の上で松陰はアメリカの通訳官を相手に、懸命に頼みこんだ。

しかしアメリカ側は、松陰の無謀な申し出を拒絶する。国交を結ぼうとしている最中だ。密航者を連れて帰つたとなると、後々面倒が起つるのは明らかだつたからだ。

こうして密航に失敗した松陰と金子は、幕府に捕らえられた。

二人は半年ほど江戸伝馬町の牢につながれた後、重罪人用の藤丸駕籠とうまるかこに乗せられ、故郷に送り返されることが決まる。

松陰と金子の故郷は本州最西端に位置する長州藩、現在の山口県である。

日本海に面した萩に城が築かれていたので、萩藩とも呼ばれていた。藩主は毛利氏で、石高は三十六万九千石だ。

戦国の昔、毛利氏は広島を本拠に中国地方の大半である百二十万石を領していた。

ところが慶長五年（一六〇〇）九月、関ヶ原合戦で徳川家康に敗れ、周防・長門の二方国に封じ込められてしまう。以来、長州藩では徳川幕府に対し、表面では従順を装いながらも、腹の底では怨念とも言える深い恨みを抱き続いている。

帰つて来た二人を、藩は城下の獄に投じた。土分の松陰は野山獄、庶民の金子は岩倉獄に繫がれる。

間もなく、金子が獄中で病死した。それを知つた松陰は獄中で泣き叫ぶが、どうすることも出来ない。

一年ほどたつた安政二年十一月、松陰は獄から出され、実家である萩・松本村の杉家で幽閉生活を送ることになる。

杉家の次男として生まれた松陰は、幼いころ山鹿流兵学者の吉田家を継いだ。しかし吉田家当主が亡くなつたため、実家である杉家に戻つて育てられた。

やがて松陰のもとへ、近所に住む下級武士の子弟たちが集まつて来て、教えを乞うようにな

る。松陰の主宰する「松下村塾」の始まりである。

「志を立ててもつて万事の源となす」

松陰は、そのように塾生たちに説いた。

「お前さんは遠方へ修行に出来やあ、必ず世に出るから早く旅に出た方がええネ」  
手相見のばあさんから、そう言われたのは、去年秋の八幡さまの縁日だ。占いなど、あまり信じる方ではないけれど、山尾庸造は両手の表裏をしみじみとながめながら、ついにその時が来たとおもつた。

十三歳の庸造は萩城下で学問修行するため、明日故郷を出る。それが庸造のずっと以前からの夢だった。

日本海に面した萩は、長州藩毛利家の城下町だ。この藩に住む若者たちにとり、誰もが一度は憧れる華やかな都である。

年齢のわりに落ち着いている庸造は、めったに喜怒哀楽を表に出すことはないが、それでも今日は朝から自然と笑みがこぼれる。

庸造は一応武士の格好はしているが、藩主毛利家に直接仕えている家臣ではない。藩の重臣（寄組）繁沢石見の家来であり、繁沢家を通じて毛利家とつながっている。こうした身分の者は

## 第一章

(1)

「お前さんは遠方へ修行に出来やあ、必ず世に出るから早く旅に出た方がええネ」

手相見のばあさんから、そう言われたのは、去年秋の八幡さまの縁日だ。占いなど、あまり信じる方ではないけれど、山尾庸造は両手の表裏をしみじみとながめながら、ついにその時が来たとおもつた。

十三歳の庸造は萩城下で学問修行するため、明日故郷を出る。それが庸造のずっと以前からの夢だった。

日本海に面した萩は、長州藩毛利家の城下町だ。この藩に住む若者たちにとり、誰もが一度

毛利側からは陪臣ばいしんとか又家来またけら、又者と呼ばれ、一段も二段も低く見られるのが常だつた。例え  
ば藩主直属の武士は白タビ、陪臣は浅黄色のタビ、というように何かにつけて差別が加えられ  
た。

庸造が山尾家の三男として天保八年（一八三七）に生まれたのは、繁沢家の領地である秋穂  
二島村（現在の山口市）だ。瀬戸内海に突き出た、手のひらを広げたような形をした秋穂半島  
の西側、付け根部分にある。山が多い長州藩領には珍しく、あたり一面平野が広がり、藩の  
台所を支える塩田もある比較的豊かな土地だ。

少年のころの庸造は、瀬戸内海の潮風に吹かれながら三里半離れた小郡の寺子屋に通つた。  
やがて小郡宰判勘場（代官所）に手子（書記）として勤めはじめる。毎日、集めた年貢を整理、  
管理し、帳簿に記録する仕事だ。

庸造は上役から教えられたとおり、きちょうめんに、淡淡と仕事をこなした。やがてその正確な仕事ぶりから庸造は、勘場の中で信頼を集めようになる。

主人の繁沢石見は早くから、利発な少年だった庸造に注目していた。もつと質の高い教育を受  
けさせれば、秋穂を背負つて立つくらいの立派な人材になると見こんでいた。

萩に住む繁沢は、二島村を訪れるることはめつたにない。だからこそ、自分の代理として、誠

実でしつかりした者に、この地を治めてもらわねばならない。万が一異変でも起これば、領主として知らぬ存ぜぬでは、済まされないのである。

庸造に白羽の矢を立て、期待したのも、そのためである。

そこで繁沢は庸造を萩に呼び寄せ、自分の屋敷に奉公させながら、学問や剣術を修行させようと考えた。萩の城下には多くの優れた学者が住んで私塾を開いていたし、藩校明倫館を核とする教育熱心な土地がらでもあつたからだ。

関ヶ原の敗戦国である長州藩は、何度も滅亡の危機を迎えた。しかし、その度に藩主も藩士も叡知を出し合い、乗り切ってきた。だから結局は国を支えるのは人材であるとの考えが、底流に流れているのである。

(2)

庸造が萩に出て来て七年の歳月が流れていた。

庸造は二十歳になっていた。

この七年間、萩城堀内（三ノ丸）に屋敷を構える繁沢家に奉公しながら、萩城下のあらゆる寺子屋や私塾に出入りし、学べるものはすべて学んだつもりだった。

どこに行つても庸造の秀才ぶりは、群を抜いていた。

少年たちの間で尊敬され、羨望されることも多かつた。

妬むのは大抵、萩に生まれ育つた、あまり出来の良くない藩士の子弟たちであつた。秋穂からやつて来た陪臣の伴が、自分たちよりも遙かに学問が出来るのが気に入らなかつたのだ。

「よそ者のくせに生意氣だ」

「又家来という分をわきまえない、非常識な男ですなあ」

庸造は根拠のない非難を受け、苛めを受けた。

ある時などは、城下を歩いていると、

「お前の性根をたき直してやる」

と、突然町道場に連れ込まれ、数人がかりで竹刀をもつて打ちのめされたこともある。庸造は剣術だけは苦手だったから、やられつ放しであった。

それでも庸造は歯を食いしばり、耐え忍んだ。こんな下らぬ連中と同じ土俵の上に立ちたくはなかつた。

無能な者は、相手から馬鹿と思われるのが最も嫌いだ。だから風のようにさらりと受け流す庸造の態度に、よけい腹を立てた。それもこれも庸造に、繁沢という庇護者がいるからだと、

兩者の関係を壊すような、悪意に満ちた噂を流したりした。

ある時、繁沢は同僚から、庸造について尋ねられたことがある。

「おぬしはなぜ、それ程までに庸造とやらを引き立てるのか。家中では、おぬしの落とし種ではないかと噂する者もおるぞ」

「下らぬな」

「では、なぜじや」

「おぬしは給領地を持たぬから、気が樂じやな。わしは殿から秋穂の一島村を預かつちよる身じや」

「あの、瀬戸内に面した一島村か」

「そうじや。お家にとつても、大切な土地じや。それにこの時節、いつ外敵に襲われるかも知れぬ丸裸の土地もある。山尾はそこの給庄屋で、庸造は将来、一島村を治める何らかの仕事に就くはずなのだ」

同僚は、一寸からかつたつもりが、繁沢が本気になつて説明を始めたので、少々驚いた様子であった。

「庸造をすぐれた人材に育てるのは、すなわちわしの影法師を育てるようなものなのじや」

「なるほど。しかし、ちと肩入れし過ぎではないか」

「人材を育成しているのだ。これは古くからのわが藩が大切にして来た方針のひとつでもある。

他意はない」

「ただ、他意はなくとも、おぬしが庸造に期待すればするだけ、妬む者が増えるといふ悪循環が生じておる。このままでは庸造が気の毒な氣もするが…」

それは繁沢にも分つていた。

繁沢が、庸造をそろそろ新天地へ翔かせてみようとおもつたのは、この時である。

(3)

長州が全国に誇る藩校である明倫館は、萩城下江向に広大な敷地を占めていた。肥後の開明派の学者である横井小楠（よこい しょうなん）が「西日本一」と絶賛したとおり、学問と武術の習練を行なうために必要な、ありとあらゆる設備が整った最高学府であった。

明倫館の中は、小学生と大学生に分かれている。

八歳から十四歳までの藩士の子弟は、小学生として通学がなれば義務づけられており、初等教育を受けた。

十五歳以上は大学生と呼ばれたが、すでに元服を済ませ、藩の仕事に就いている者も多いため、さほど出席は強要されない。

だが、陪臣である庸造には明倫館への入学資格がなかった。それが庸造には、何よりも口惜しかつた。

その日も、明倫館内には学生たちの素読の声や、剣術稽古の掛け声やらが賑やかに響いていた。旧暦の五月だから、じつと座つていただけでも汗ばむ季節だ。それ以上に、若い熱気がムンムンと立ち込めていた。

庸造はいつものとおり主人の用事を済ませ、そんな明倫館の屏の外をとぼとぼと歩いていた。(自分はこの屏の内側では、生涯学べないので)

そんなふうに考えると、なんだか胸が締めつけられる思いがする。

庸造は足早で明倫館の脇をすり抜け、堀内の繁沢家に帰つた。

すると、主人の繁沢石見が自分を呼んでいるという。何事だろうかと思いつつ、庸造は繁沢の待つ居間の襖を開け、平伏した。

「庸造か、まあ楽にせい」

繁沢は笑顔で、気さくに迎えてくれた。庸造はこの、つねに上品で丁寧な物腰の主人を敬愛

している。

「庸造は繁沢から、

「お前、江戸へ出てみないか」

と、唐突に尋ねられた。

江戸藩邸での下働きなら、いくらでも世話ををしてやれる。まず、江戸へ出て人に会い、広い世界を知ることが、いまの庸造のためになるのではないかと、繁沢は勧めてくれた。

それに、藩主一族につらなる繁沢は身分が高いゆえに、若いころから窮屈な思いばかりしてきた、自分より身分の低い藩士の子弟たちが江戸へ遊学する後ろ姿を、いつも眺めて羨ましくおもつていたとも、洩らした。

「庸造、お前に私が果たせなかつた夢を、果たしてもらいたいというのが本音かもしれない」

江戸行きという思いがけない話に、庸造はひっくり返りそうになつた。

「はい、有難くお受け致します」

断る理由が庸造には何もなかつた。鬱屈した思いから一気に解き放たれると、天にも昇る心地だつた。

「広い世の中を見てまいれ」

「はい」

「それから、ゆくゆくは一島を頼むぞ」

繁沢はそう念を押して、やさしく微笑んだ。

(4)

江戸行きの旅支度をととのえていた庸造のもとに、ひとりの訪問者があつた。

「これは、高杉の若様

庭先に突然あらわれた若い武士の姿を見るや、庸造は深々とお辞儀をした。

城下の菊屋横町に住む、高杉家の一人息子晋作である。七年前、庸造が萩に出て来て以来の、

数少ない心許せる相手であつた。

「江戸に行くらしいのう」

晋作は近寄って来て、嬉しそうに庸造の顔をのぞき込んだ。我がことのように、晋作が喜んでくれているのが分かる。それが庸造には嬉しかつた。

藩政の実務を担当する八組士（大組士・馬廻り役）である高杉家は、繁沢石見を組頭とする繁沢組に属していた。

つまり、晋作にすれば庸造は、自分の上司の家の奉公人なのである。

晋作の住居は、繁沢家から歩いて十分もかかるない距離にある。庸造も主人の用で高杉家を訪れるうち、自分とは違う、激しい気性の晋作にひかれた。

一方晋作も一ツ年長で、せつせと学問に精出す庸造をすつかり気に入り、

### 〔庸造、庸造〕

と、何かにつけて連れて歩いた。

高杉家は八組士の中でも、いわゆる名門の部類に属すると言つていい。

戦国の昔、毛利家が安芸広島を本拠として勢力を拡大していた当時からの家来である。関ヶ原合戦後に主家に従い萩に移り住んだ。しかも、何人もの藩主側近を輩出した家柄だ。事実、晋作の父小忠太も藩主小姓や小納戸役といった、重要な職を歴任している。

だから晋作も、将来は自分が藩を背負って立つてやるのだと、いつも気負いながら生活している。

意志が強そうな大きな口を強く結び、肩を怒らせて城下を歩く晋作を見るたび、庸造は頬も

しいものを感じていた。

同じ八組士でも、庸造への嫉妬に狂い、三角州の中で名を売ることしか頭にない連中と晋作

とでは、人間の種類が違うのだと、庸造はいつも思う。三角州のことは、三角州を外から眺めた人間にしか分からぬらしい。

「江戸は面白いぞ。視界がぶち広がるようじや。僕もまた、学問修行に行きたいと思うよ」

晋作は腕組みをし、遠くを見つめるようにして言った。

実は二年前の安政元年一月、十六歳の晋作は、父の仕事に従い江戸に行つたことがある。ちょうどペリーが再来し、開国するか否かで上も下もが大騒ぎをしているさ中だ。

晋作は、ペリー率いる黒船艦隊を実際に見て衝撃を受ける。

やがて、アメリカの高压的な態度に屈した幕府は、和親条約を締結した。

（こりやあ、なんとかせにやあいけん）

晋作は、いつ戦争が始まるとも知れぬと、難解な兵学書を借りて来ては読みふけった。あるいは、これまで以上に剣術の稽古にも打ち込んだ。十六歳の少年に出来ることと言えば、そのくらいであった。以来、晋作の頭の片隅にはいつも黒船の影がある。

ただ、晋作の場合、昨今の「攘夷だ、攘夷だ」と、流行病のように外国排撃を唱える連中とは違っていた。

巨大な黒船を操り、大海を渡り、日本にやつて来たアメリカという国に対し、晋作は尊敬の

念を抱いている。凄いものは凄いと素直に認められるのは、やはり晋作の育ちの良さだろう。

「それに比べ、幕府ちゅうのは案外腰抜けじやのう、びっくりしたわい。あれで武門の棟梁か。氣迫で負けちよるよ」

と、晋作は言う。しかし、

「世の中、まんざら捨てたもんじやないと思つたぞ」

とも言う。

失敗したとはいえ、黒船に潜り込み、世界を見ようとした男がいたからだ。しかもその男が、自分と同じ長州人というものが、晋作をよけい上機嫌にさせたようだつた。

「その、とんでもない大志を抱いた男は吉田松陰寅次郎という。以前は明倫館で丘学師範をやつとつた。いまは野山獄から出て、松本村の実家、杉という家で謹慎しとるらしい。僕は近いうち、吉田氏に会いに行つてみようと考えている」

「吉田様の話なら、私も聞いたことがあります。世の秩序に逆らう乱民だという者もいます」

「庸造はどう思う?」  
「日本を救おうという志、やはり尊いと思います。私などは単純なのかもしませんが、素直に感銘いたしました」

「うむ。僕もそう思つのじやが、父上はやはり吉田氏は乱民だと言うとつた。しかし、僕は自分の目で確かめたいのじや。吉田氏が将来、歴史の中で志士と評される男なのか。それとも乱民として忘れ去られていく男なのかを」

晋作の目がきらきらと輝いていた。何が本物で、何が偽物なのかを懸命になつて追究しようとする澄んだ美しい目だと、庸造はおもつた。

(5)

江戸は政治・文化の、そして大坂と並ぶ経済の中心地である。

二千二百七十余町、全市の六割は武家地で、寺社地と町地が各二割を占め、百万人以上の人口を有する日本最大の城下町だ。

同じころのロンドンは八十六万、パリは五十五万ほどの人口だから、江戸は十七世紀前後から十九世紀にかけて、世界最大の人口を誇る大都会となることになる。

江戸に到着した庸造はひとまず、桜田門外にあつた長州藩上屋敷に草鞋を脱いだ。そして数日後、庸造は生涯忘れられない恩人に出会うことになる。

長州藩士の桂小五郎（木戸孝允）<sup>たかよし</sup>だ。

桂は神道無念流練兵館の塾頭を務めるなど剣士として、すでに江戸で名が通っていた。

桂もまた、不思議なくらい親切な男だった。

庸造の世話を、親身になつて焼いてくれた。何事にも懸命に取り組もうとする庸造には、そうした人が世話を焼きとなるような、何か徳のようなものが備わっていたらしい。

桂は諸国から江戸に集まつてくるさまざまな人物を、庸造のためになるからと、紹介してくれた。

庸造にとり桂は理想の男だ。

頭は切れるし、腕は立つし、おまけに役者顔負けの色男である。

桂は庸造を銭湯に連れて行くのを日課としていた。銭湯で庸造は桂の背中を流すのだ。そして帰り道に庸造は、桂から蕎麦そばを馳走してもらう。酒をほとんど飲まない庸造にとって、江戸での蕎麦は唯一の楽しみだった。

うまそうに蕎麦をする庸造を、桂は少し笑みを浮かべながら眺めていた。三人兄弟の末っ子として育つた桂は、四つ年下の弟が出来た気分を楽しんでいた。

桂もまた、江戸で黒船騒動を体験した一人である。以来、剣ばかりでは役に立たぬと、江川太郎左衛門の塾に通い西洋砲術を学んでいた。

「敵視するにせよ、まずは奴らの国を知らねばならぬ。奴らはある蒸気船で大海を乗り切り、日本までやつて来たのだぞ。すごいとは思わぬか」

黒船の話になると、桂は興奮氣味になり、晋作と同じようなことを言つた。

アメリカの圧力に屈して開国した日本は、いつ属国や植民地にされるかも知れぬ、危機的状況に立たされている。どこからともなく、得体の知れぬ暗い影が日本に近づいているのは確かだつた。

二百年以上鎖国を続けたこの国に足りないものは、なにか。

それは、正確な海外情報だと、庸造はおもうようになつてている。降伏するにせよ、戦うにせよ、情報が無くては対策も立てられない。

そのためには誰かが吉田松陰のように捨て身になり、行動を起こさねばならないのではないのか。

第一、第三の松陰を時代が必要としているのである。

(6)

「安政の大獄」に連座した吉田松陰が江戸伝馬町の獄で処刑されたのは、安政六年（一八五

九) 十月二十七日のことだ。享年三十。

その知らせを江戸で聞いた時、庸造の胸は痛んだ。

松陰は前年、幕府がアメリカをはじめオランダ・ロシア・イギリス・フランスとの間に締結した修好通商条約に激しく反対していた。外国人嫌いの天皇の意を無視した勅許無しの調印が行われたからだ。しかも外国人の治外法権を認め、関税自主権を放棄するなど、日本にとっては不利な不平等条約であった。

松陰が処刑されて以来、「覺悟だ」「決意だ」と、萩でも江戸でも長州の若者たちは、集まれば口角泡を飛ばして開国の問題を語りあつてゐる。生命を塵芥のごとく捨て去る美学に、誰もが酔いしれていた。それが一種の流行だった。

人間とは弱い生き物なのだ。いつの時代も、不安な世になればなるほど、過激で純粹なイデオロギーが勇ましく、そして頼もしく見えてくる。

しかし、誰ひとり松陰のように実行に移す者はいない。流行の病にとりつかれ、机上の空論を振り回すばかりだ。

長州人により、理屈をこねたり、議論を戦わせたりするのは、食事をするのと同じくらい、日常の一部なのだ。

それは、三百数十年におよぶ幕藩体制の下で、毛利家が関ヶ原の敗戦国としての負い目を抱き続けたことと無縁ではない。

徳川という勝者の政権が続く限り、歴史の上で毛利家は敗役だ。しかし、敗者には敗者の言い分がある。それを、論理立てて説明し、記録する修史事業が、この藩では早くから熱心に行われていた。

そのあげく、堂々とした議論を開拓出来る者、自分の意見を持ち主張出来る者こそが、最も尊敬されるという藩風が、いつの間にか生まれた。

庸造は一度松陰に会い、教えを受けておくべきだったと、悔やんだ。そうすれば松陰から、何か力のようなものを貰えたような気がする。

松陰は密航に失敗し、下田の獄舎に繋がれた時、

「世の人はよしあし事もいはばいへ賤が誠は神ぞ知るらん」と、詠じた。

つづいて江戸の伝馬町獄に護送される途中、赤穂浪士墓所・高輪泉岳寺の門前を通過したさい、

「かくすればかくなるものとしりながらやむにやまれぬ大和魂」

とも、詠じた。

長州の若者たちはいつの頃からか、これらの松陰の和歌に節をつけて歌う。

庸造もその一人だ。歌つていると松陰の魂が自分に乗り移つて来た気分になり、胸が熱くなつた。

松陰は日本の危機を眼前にして、行動を起こさずにはいられなかつたのだ。失敗すれば厳しい処罰が待つてゐるのは、十分承知していたはずである。

なぜ、そこまで松陰は捨て身になれたのか。

それは、志を持っていたからだろう。尊王攘夷で日本を救いたいという純粋無垢な志。志を貫くためには、狂うことも辞さないという強固な姿勢。松陰とは、ただその一筋に生き、そして死んだ人であつた。

書生大いに論すべし、知るべし、窮すべし、そんな雰囲気の中に身を置きながら、庸造は自分も志のために死んでみるぞと、気分を高揚させていた。

## (7)

松陰刑死から半年後の万延元年（一八六〇）三月三日、開国を推進し、安政の大獄を断行し

た幕府大老井伊直弼が桜田門外で暗殺された。

刺客は、攘夷を唱える水戸浪士十七名と薩摩浪士二名。

白昼堂々、幕閣の最高権力者が江戸城の前で殺されたのだ。それは、幕府威信の衰えを象徴するような事件だつた。

以来、世の攘夷論者たちは堰を切つたように動き始めている。彼らは開国に反対する朝廷を巻き込み、それを盾にして幕府を攻撃しようとした企んでいた。

長州藩でも血の氣の多い連中は、江戸の攘夷論者の私塾などに出入りし、盛んに気炎を上げてゐるようだ。

そんな時、庸造は藩邸に出入りする商人の口から、耳寄りな話を聞き出す。

幕府の船龜田丸（四十六トン、スクナー型帆船）がロシアに赴くというのだ。ロシア沿岸を観察し、交易をし、さらには航海学の実習も行うという。

これなら、合法的な海外渡航だ。なんとしても行きたかった。

それは、庸造自身のためだけではない。ロシアに渡り、海外情報を持ち帰れば、必ずや日本になることだろ。（志を立てるとは、こういうことだらう）

庸造は、桂を藩邸の部屋を訪ね、相談をもちかけた。

庸造は、顔を紅潮させて、

「決死の覚悟で、航海学を学んでまいります。いつでも生命を捧げる覚悟はできています」

と叫ぶように訴えた。自分の情熱を伝えたい一心からである。

ところが桂は、たしなめるように言つた。

「庸造、覚悟は結構だが、簡単に生命を投げ出すのを美德とする昨今の風潮は、僕は気に入らぬ」

江戸にいる若い藩士たちの一部は、陰で桂のことを、

「逃げの小五郎」

と、呼んでいる。

神道無念流免許皆伝の剣客でありながら、桂は真剣を抜いたことが無い。

桂を打ちのめして名を上げようと挑発する者を前にしても、さつさと尻尾を卷いて逃げてしまふ。それで、誇りを汚されたとはおもわない。生命は見栄のために捨てるものではない。志を遂げるまでは、死ねないのだ。

「わかりました。以後氣をつけます」

と言つてみたものの、庸造は心の底からこみ上げてくる、熱い気持ちを抑えることができなかつた。

「まあ、頭を冷やして来るのもよかろう」

桂は仕方ないな、という表情をしながら、庸造のために尽力すると約束してくれた。

実は長州藩の中には、今後は幕府の開国政策を支援しようとする動きがある。

そんな時だからこそ、藩としても海外情報は喉から手が出るほど欲しい。大方には異存がなかつた。

ただ、庸造の身分の低さを問題にする者もいたが、桂が強く推薦したので、なんとかなつた。幕府は海外渡航を厳しく禁じている。長州藩の一陪臣が亀田丸に乗り込むのは、容易なことではない。

それでも桂は八方手を尽くし、箱館はこだて（函館）奉行所の役人で亀田丸船長の北岡健三郎に頼み込んだ。北岡は、桂の剣の師・斎藤弥九郎の実弟にあたる。

わがことのように懸命に頼む桂に、北岡は言った。

「その男を、長州藩の者として連れて行くのは不可能だ。しかし小使いとして船に潜り込ませるなら、出来るかも知れない」

亀田丸は、船内の雑用をする小使いを三人連れて行くことになっている。庸造はその一人と

いう身分で、乗り込める事になった。

「僕のぶんまで、しつかり異国を見て来てくれ。期待しちよるぞ」

桂は庸造を激励した。そして旅費を貸し与え、江戸から送り出した。

(8)

二十五歳の庸造を乗せた亀田丸は文久元年（一八六一）四月十日、箱館港を出航した。それから宗谷沖を通り、樺太西岸を北上。五月六日には、黒龍河（アムール河）河口のデカストリーベ内アレクサンドロスキーに入った。

この間、船中で庸造はなんとかロシア語を習得しようと必死になっていた。日露会話という簡単な辞書を片手に、ロシア領事書記カリオニをつかまえては質問を浴びせかけた。

はじめカリオニは、

「妙な小使いだ。うるさい奴だ」

と、怪訝な、そして面倒臭そうな顔をしていた。

しかしだんだん、カリオニにも庸造の熱意が伝わっていった。二百年以上も眠り続け、世界の中で取り残されたアジアの小さな島国の若者が、なんとか祖国を救おうと懸命になっている。

その情熱に気づいた。

カリオニは次第に、庸造と打ち解けていった。日常用語から物品・価格・貨幣などの文字や発音といった、ロシア語の基礎を手取り足取り教えてやつた。

庸造は、またたく間にそれらを理解し、吸収していく。庸造の学力には、カリオニも驚きを隠せないほどであった。

「ヨーローのような若者がいる日本という国が我々と肩を並べる日は、さほど遠くはないかも知れない」

さらに亀田丸は、アレクサンドロスキーから黒龍河を溯った。そしてニコライエフスクに着くと錨を下ろし、一行は上陸して街へ出た。

亀田丸には、箱館商人の紅屋清兵衛の番頭が乗っていた。絹糸など日本から持つて来た商品を陳列所に並べ、販売するためだ。  
番頭から頼まれた庸造は、ロシア語でそれぞれの商品名や価格を品札に書いてやつた。さらに、ロシア人たちとの応接も手伝つた。船中でカリオニから教わつた知識が、早くも役に立つたのだ。

その結果、日本の商品は予定よりも早く三週間で完売してしまつた。幕府側にも、ロシア側

にも、庸造の存在が強烈に印象づけられた。

ある日、日本に持ち帰る品々を買い込むのだという番頭に従い、庸造はニコライエフスクの市街に出た。

ロシア人たちが、道行く日本の一人連れを、好奇の目をもって眺めていた。

中には東洋の得体の知れぬ国からの訪問者を、単純に敵視する視線もある。理解しようとしたらず、ひたすら排除しようとする心理が透けて見えるようで、庸造は悲しくなってきた。透き通るほど真っ白な肌の娘が、侮蔑するような目でにらんでいるのに気づいた時、庸造は思わず目をそらせた。

その時である。

船舶修理工場の中で、巨大な機械がものすごい轟音を立てて動いているのが庸造の目にとまつた。

それは、初めて見る光景だった。雷に打たれたかのように、庸造はしばしその場で呆然となり、立ち尽くした。

何を作っているのか、庸造にはよく分からぬ。しかし、日本における人力だけに頼った地道な作業と比べると、その落差の甚だしさは歴然としていた。

「この機械の力こそが、いまの日本に押し寄せる外圧の正体ではないか」

庸造は直感した。だが、すでに旅は終わりに近づいており、その正体を解き明かす時間は、庸造には残されていなかった。

四ヶ月におよぶ旅を終えた亀田丸が、箱館に帰着したのは八月九日のことである。

(9)

庸造と一緒にロシアを旅した幕府の学者に、武田斐三郎(あやさぶろう)（成章）がいた。

伊予大洲藩士だった武田は、適塾の緒方洪庵から蘭学を、佐久間象山から洋式兵学を学び、象山の推薦により幕府に登用された。アメリカやロシアとの条約締結に一役買い、さらに蝦夷地警備のため、箱館で弁天崎砲台、亀田の五稜郭などの建設を指導していた。この年三十五歳、新進気鋭の砲術・築城法・航海術の大家である。

武田は航海中から勉学熱心な庸造に注目していた。

「君、山尾庸造君とかいったね。洋式兵学に興味があるかね」

箱館に着くなり庸造は、幕府の大学者である武田から優しく声をかけられた。緊張のあまり声が出ず、庸造はあわてて頷いた。

「なら、箱館の私の塾を覗いてゆくといい」

学ぶことに對しては、人一倍貪欲な庸造だ。断る理由が無い。

武田の好意に甘え、庸造は短い間ではあるが、箱館に滞在することが決まつた。

蝦夷の南西部に位置する箱館は享徳三年（一四五四）、河野政通が箱型の館を築いたことから、その地名がある。江戸時代、蝦夷を直轄地とする幕府は、ここに箱館奉行を置いていた。

商業港として發達を始めた箱館は、安政元年（一八五四）締結の日米和親条約により、世界に向けて開港されている。

レンガ造りの洋館が並ぶ新しい町並みを、庸造は武田に連れられて歩いた。秋の深まりは本州よりもかなり早く、風が冷たかつた。

町のいたる所で、西洋人の姿が見られた。

「あれは、なんでしょうか。ばち当たりな……」

庸造は水夫らしき男が、木魚をかかえて歩いている姿を見て、質問した。

「あれは最近、箱館の西洋人の間で流行っているのだ。奴らはどうも、変わった樂器として面白がつてゐるらしい。国が変われば、考え方も変わる。お互いを認めれば争いも起こらない」

武田は苦笑しながら教えてくれた。

四年前に開かれた武田の塾は「諸術調所」と名付けられており、全國から多くの若者が集まつて來ていた。

そこで教授されるのは、アメリカ人ボウデッチが著した航海書を基とした航海測量や、帆船運転の簡単な知識である。

もつとも、武田の信条は、

「航海術は実地に赴いてじっくり学ばねばならぬ」

であり、箱館丸という幕船を使っての実習に重きを置いた。

その運営方法が、ユニークだった。

箱館丸に蝦夷地の海産物を積み込み、日本海測量を名目に大坂に運んで売却し、利を稼ぐ。これで塾の経費をまかなつた。塾生のひとりで、のちにわが国の郵便創業に関わり、「郵便の父」と称される前島密（ひそか）（越後出身）の発案によるものだ。

（10）

塾に着くと、武田は思い出したように、

「わが塾にも長州萩から來ている者がいる。名は野村弥吉、知つておるか」

と庸造に尋ねた。野村姓なら萩には多いが、庸造は知らぬ名である。

大部屋では数名の塾生が自習の最中だったが、その中のひとりを武田は呼んで庸造に紹介した。

「野村弥吉です」

「へこりとお辞儀をしたその若者は、顔にまだ幼さを残していた。しかし、すつと通った鼻筋と切れ長の目は、いかにも気が強そうな印象を受ける。才気が顔にじみ出ていた。今年十九歳だという。」

弥吉は早熟だった。

十五歳の時、藩命により長崎に遊学し、オランダ士官から兵学の指導を受けた。その翌年には江戸へ出、幕府の蕃書調所（洋学研究所）で洋書を学んだ。しかし、そこでの学問が物足りなくなり、武田の名声を慕つて箱館に渡つて来たのである。

聞けば弥吉は、萩城下土原に屋敷を構える八組士井上勝行の三男で、野村家に養子に行つたのだという。

仕事の関係上、長崎での生活が長かつた実父の勝行は早くから蘭学に傾倒し、西洋兵学の必要を藩の要路に説いていた。まだ、ペリー来航以前の話で、先見の明があつたと言わねばならない

ない。

ところが周囲は勝行のことを、「蘭癖」「異人かぶれ」と呼び、変人扱いした。勝行はそれでも頑固に信念を曲げなかつた。そして息子の弥吉に資質があると期待し、早くから蘭学をたัก込んだ。

弥吉は、そんな環境に育つている。

筋金入りの西洋通の青年になつて当然であり、敬愛する父の無念を晴らそうと懸命だった。それが弥吉の性格を、少しばかりひねくれたものにしたのかも知れない。

負けず嫌いの弥吉は、誰彼構わず議論を吹っかける癖があつた。特に酒を飲んだ時には、その癖が強く出た。塾生の中には、

「あれは野村ではない。飲むと乱れる、ノムランだ」と、陰口をたたく者もいた。

長州人の理屈好き、議論好きは諸国でも有名だったが、塾生たちの間では弥吉を煙たがる者も多かった。弥吉はいつも、さびし気に、そして何かに抵抗するかのように、ひとり勉学に励んでいた。噂では、野村家の養父があまり理解の無い人で、近く弥吉は帰国させられるらしい。

ある時、弥吉が読んでいる本を覗き見た庸造は、驚いた。

(これはエゲレスの言葉ではないか)

弥吉が最も熱心に学んでいる外国语は、オランダ語ではなく、英語なのだ。

江戸時代の日本で、西洋の言葉といえばオランダ語である。

日本で西洋を知ろうとする者はまず、オランダ語の習得から始めるのが常だつた。これは鎖国政策下でも、オランダとだけは長崎・出島で交流が行われていたからだ。西洋の中でオランダが最も文明の進んだ、最も強い国だと信じじらされている。

「山尾さん、それは昔の常識じゃ。いま、世界を動かしているのはエゲレスじゃけえ。これからは英語を学ばねば世界に通用せんですよ、世界に」

弥吉はうすら笑いを浮かべ、そう言つた。鼻につく態度ではあるが、精一杯突つ張つて挑発しているのが、庸造には理解出来る。

『そう言えば条約を結ぶさいも、アメリカ側の示す英語を一旦蘭語に訳し、さらに日本語に訳したもので誤りが多く、苦労したと聞くな。確かにこれからは、英語の時代なのかも知れんな。いや、いい話が聞けた』

庸造があつさりと認めたため、弥吉は少々拍子抜けしたようだつた。

やがて庸造は、江戸へ戻つた。

もう庸造は、その他大勢いる陪臣の一人ではない。ロシアに渡航した長州藩きつての海外事情通であり、貴重な人材であるはずだつた。庸造の中にもその自覚が芽生え、それが強い自信になつてゐる。

誰もが逞しく成長した庸造に、目を見張つた。

## 第二章

### (1)

庸造がロシアへと旅立つたころのこと。

長州藩は藩士長井雅楽の起草による「航海遠略策」を藩是として採用し、開国以来、亀裂が入った公（朝廷）・武（幕府）間を周旋しようと、乗り出していた。「航海遠略策」とは、幕府の行つた開国を既成事実として認めた上で、公武が力を合わせ、皇威を世界に押し出そうという考えだ。

一躍時代の寵兒となつた長井は、朝廷や幕府の関係者を訪ねては自説を述べ、支持を集めている。

ところが、「航海遠略策」をめぐり、藩内で猛反発が起つる。画策の中心は、吉田松陰が遣した門下生たちだ。

「幕府が行つた主体性の無い開国は、やがて国を滅ぼすだけであり、断固認めるべきではない。諸外国との間に結んだ通商条約を破棄し、まずは攘夷を断行して抵抗すべきである。攘夷は畏れ多くも帝のご意向であらせられますぞ」

松陰が「防長年少中第一流」と絶賛した久坂玄瑞は、弁舌さわやかに藩首脳部や朝廷関係者に、攘夷を説いてまわった。まだ二十三という若さだが、長州人の扱い方を心得ていた。時には説き伏せ、時には威嚇して、長井の説の盲点をあげつらった。

そしてついに、文久二年七月、長州藩論は一転して「破約攘夷」となった。幕府が諸外国と締結した条約を一旦破棄させ、攘夷によって抵抗の意を示すという方針だ。

長井雅楽は失脚し、やがて朝廷を誘つたという罪で切腹させられる。

天皇の悲願である攘夷実行を盾に迫れば、幕府が困惑するのは明らかだ。

死して三年、松陰の「志」は、長州藩全体の「志」になろうとしていた。

ところが今度は、開国から攘夷へと一八〇度の方向転換をとげた長州藩が、その変わり身の早さを、世間からあざ笑われることになる。

〔長州は信用ができぬ〕

そんな噂が広まつた。

我慢ならないのは、松陰の教えを受けた若者たちだ。彼らはなんとかして長州藩の信頼を取り戻そうと躍起になつた。

長州藩の信頼回復に、特に熱心だったのは高杉晋作だ。

晋作は、松陰の主宰する松下村塾で頭角を現わした。久坂と並び松門の竜虎、または双壁と呼ばれている。この年二十五歳。幕船千歳丸に藩を代表して乗り込み、二カ月ほど清朝中国の上海を観察し、七月に帰国したばかりであつた。

十八年前の西暦一八四二年八月、中国はアヘン戦争でイギリスに敗れ、南京条約を締結された。

この条約で中国は、上海・広州・福州・廈門・寧波の五港を開く。五港にはイギリスの領事館が置かれ、貿易の主導権も奪われてしまつた。以後アメリカ・フランスが中国との間に通商条約を締結し、イギリスに続く。

こうして中国は、なれば欧米列強の植民地と化してゆくのである。

そんな慘めな中国の現状を上海の地で見た晋作は、強い危機感を抱き帰国した。

〔列強に対して弱腰の幕府に日本を任せていたは、やがて上海の覆轍を踏む〕

覆轍を踏むとは、前人の誤りを繰り返すとの意味である。

力の強い国は弱い国を容赦なく屈服させ、服従させるというのが現実だ。だから日本も、西洋に対抗できるだけの強い軍事力を備えるべきだと、晋作は考える。

幕府は頼りにならぬので、まず、長州藩がその手本を日本じゅうに示さねばならない。

ところが、攘夷の旗じるしを掲げたものの、長州藩の首脳部はいつこうに実行に移そうとはしない。京都に腰を据え、朝廷に出入りして、

「周旋、周旋」

と、公卿たちに金をばら蒔き、密談ばかり重ねている。天皇が認めたという、攘夷実行の大義名分がまず欲しいのだ。大義名分が無ければ、たとえ行動を起こしても、それは暴挙に過ぎず、壊滅の道を進むというのが首脳部たちの考え方である。

ところが晋作は、常識人きどりの首脳部たちが気に入らない。本気で富国強兵、攘夷を断行するなら、まずは行動を起こすべきであろうと考えている。

江戸に出て来た晋作は、苛立ちの中で日々を過ごしている。その胸中を、

「まだ酒を入れていい匂うたんのよう、座り心地が悪い」と、面白い例えで、桂小五郎に手紙で訴えたりした。

(2)

そんな矢先、生麦村（現在の神奈川県横浜市）で薩摩藩が、国父（藩主の父）島津久光の行列を横切つたイギリス人を斬り捨てるとい事件が勃発する。

いわゆる「生麦事件」だ。

攘夷は必ずしも薩摩藩の方針ではないのだが、外国人たちは震え上がり、単純な攘夷論者たちは拍手喝采した。

「薩摩の人気に比べて、この長州のだらしなさは何じゃつ！」

晋作は酒楼で酒をあおりながら、大声を張り上げ、相変わらず怒り狂っている。

以前から長州藩は、同じ外様大名で西南の雄藩のひとつである薩摩藩に対し、強いライバル意識を抱き続けていた。両藩とも幕府の独裁政治には批判的なが、このライバル意識とうやつが邪魔して、つねに手を結べない。

「こうなれば、長州も面子にかけて攘夷を実行する」

薩摩藩に対する対抗意識が火に油を注ぎ、晋作は江戸でひそかに攘夷の同志を募り始めた。

するとたちまち久坂玄瑞・志道聞多・赤井武人・長嶺内蔵太・寺嶋忠三郎・有吉熊次郎・品

川弥二郎・白井小助・松島剛藏の十名が集まつた。

彼らは連日連夜、品川宿の相模屋、通称土蔵相模に入りびたり、酒をたらふく飲み、芸者を集めて大騒ぎをした。

さて、何をやるか。

考えていたところに志道聞多が、

「某国の公使が十一月二十三日に、武州金沢にピクニックに出かける」との情報を、仕入れて来た。さすがは、地獄耳で知られた聞多だ。その地獄耳ゆえ、藩主から聞多の名を拝領したというほどの男なのだ。

その日は太陽暦の日曜日である。当時の日本では一と六の付く日が公休日だが、公使たちは自国の習慣で生活しているから一日仕事を休み、遊びに出かけるのだ。

「よし、そいつらを斬つちやれ」

「白昼堂々、ひとつ派手にやつちやろうか」

まるで芋でも掘りに行くように、呆気なく外国公使暗殺が決まった。

当時、日本に滞在していた外国人たちが最も恐れたのは、「異人斬り」と呼ばれる、こうした攘夷テロだった。

ともかくこれだけの数の長州藩の若者が、外国公使を血祭りに挙げたとなれば、一大国際問題に発展するのは明らかである。

されば幕府も長州藩も、もう後戻りはできない。

攘夷を行うと天皇に約束しながら、躊躇して実行に移さない連中を、めらめらと激しく燃え

上がる炎の中に突き落としてやるのだ。

十一月十三日の昼過ぎ、聞多は晋作・大和国之助・長嶺内蔵太と共に品川の相模屋を発ち、集合場所に決めた神奈川宿の下田屋へと向かった。

品川からだと、東海道を西へ五里（約二十キロメートル）の道のりである。

彼らは肩をいからせ、土ぼこりをたてながら、木枯らし吹く街道を速足で歩く。途中、薩摩藩がイギリス人を斬った生麦村を通った時は、かつかと血が騒いだ。

古くから海陸交通の要衝である神奈川は、東海道の宿場として栄えていた。日米修好通商条約では開港場のひとつに定められ、外国領事館などが建てられた。しかし幕府が開港場を近くの横浜に変更したため、外国商館はそちらに集まり、神奈川はこの年閉港されている。

神奈川宿に差しかかると、晋作は前からとほどほど歩いてくる一人の若い男を見て、  
「おいっ、庸造、山尾庸造ではないか  
と、なつかしそうに声をかけた。

(3)

声をかけられた庸造は、細い小さな目をぱちくりさせて振り返った。そして立ち止まり、晋

作に気づくと深々と頭を下げてお辞儀をした。横浜で藩の所用を済ませた庸造は、これから江戸の上屋敷に戻る途中である。

「庸造、いいところで会った。ちょっと来てくれ」

昔と変わらない口調で、晋作から強引に誘われるまま、庸造は下田屋という旅館に入った。連れて行かれたのは、二階一番奥の薄暗く、カビ臭い部屋である。

すでにそこには長州藩の若者数人が、待機していた。みな目は血走り、恐ろしい形相でいる。ピリピリとした殺気が部屋一杯に漂っていた。

中には庸造の知っている顔もいる。何事かとももつていると、晋作が声をひそめて言つた。

「僕たちは明朝、武州金沢に赴き、異人を斬るつもりじゃ」

庸造は驚いた。

晋作も上海で西洋の脅威を感じ、その現実を目の当たりにしたはずではないのか。

その晋作が、単純で排他的な攘夷論者と同じことをやろうというのは、あまりにも愚かだ。納得がいかない。

庸造はうつむいて、黙っていた。

すると晋作は、他の同志をも扇動するような調子で、突然演説を始めた。

「僕は上海で見た。アヘン戦争でイギリスに敗れたため、抵抗せぬまま侵食されてゆく清国<sup>きんこく</sup>の惨めな姿を」

晋作は演説を続けた。

「いま、幕府もわが藩も口では攘夷を唱えているが、実行に移そうとはしない。誰かが抵抗の意を示さなければ、日本も上海の轍<sup>辙</sup>を踏むのは明らかじや。勝ち負けではない。この国を救おうという志だ。誰かが志をもつて先陣を切らねばならん。僕らの屍<sup>し</sup>を乗り越えて、長州が、そして日本じゅうが横暴な西洋に対して立ち上がり攘夷を行えば、それはそれで価値ある死ではないのかつ」

熱く語る晋作を前にすると、庸造もだんだん気分が高まつてくる。全身の血が毛穴から吹き出しそうな錯覚におちいった。

長州人は、こうした「正義」を主張する熱弁に酔い、乗せられやすいという弱点がある。この点、庸造も例に洩れない。

「わかった、僕も君たちと共に起とう」

庸造もいつの間にか晋作の演説に酔いしれ、誓つていた。

周りの者たちも、目を腫らして泣いている。鼻水をすすっている者もいる。各人は頭の中で、「正義」のために命を捧げる自分の姿を想像し、陶酔しているのだ。

「おう、長州男児の肝つ玉を見せてやろう」

熱血漢の志道聞多が、全員の心を煽り立てるように叫んだ。

「長州男児の肝つ玉か、ええぞ」

「よしつ！ やつちやるぞ」

異人どもめ、みちよれ

誰ひとり一滴の酒も飲んでいないのに、このありさまである。長州には、こうした自己陶酔型が多い。もし、他藩人がこの場に同席していたら、異様な光景に呆れただろう。

#### (4)

だが、結論を先に言えば晋作らの異人斬り計画は未遂に終わる。

失敗の原因を作ったのは土佐藩だ。

事前に久坂玄瑞は、土佐藩の同志である武市半平太(たけちはんぺいた)（瑞山）(ずいざん)に計画を打ち明け、参加を求めた。

しかし、多血性とされる土佐人でさえも、この計画は無謀であると感じた。心配した武市は、土佐藩の前藩主山内容堂に計画を打ち明けた。

「容易ならざる事件である」

容堂は長州藩世子(せいし)（藩主の世継ぎ）毛利定広に手紙で知らせ、鎮撫を依頼する。と同時に、ひそかに幕府にも通報した。容堂は当時幕府の閥僚でもあったのだ。

驚いた定広は、家臣の山県半蔵と寺内外記を神奈川宿に急行させた。十一月十三日朝のことである。

一方、容堂の通報を受けた幕府も制止に動き始め、下田屋の周囲を一、三十人の兵士で取り囲む。もし、晋作たちが動きだしたら、一網打尽にする手筈だ。

それでも晋作らは下田屋から飛び出し、幕兵相手に斬り死にしてやると息巻いている。こうなれば、意地なのだ。

みな刀を抜いて、固唾(かたず)を飲んで、外の様子をうかがっていた。

まさに、暴発寸前であった。

そこへ、世子の使者で馬にまたがった山県と寺内が、

「待て、待て」

と、大声を張り上げて割り込んで来た。

「世子公はお前たちが外国人を襲撃すると聞いて大いに驚かれ、鎮撫のために単騎、大森まで出張された。そしてわれら一人に、お前たち一同を連れて帰れとお命じになつた。お前たちはおとなしく命を奉じ、大森まで来るよう」

使者は、そんな口上をすらすらと述べた。

晋作らは内心ほっと胸を撫で下ろした。意地のため、死ななくて済んだからだ。

「君命ならば、致し方ないな」

晋作はそつ言つて、抜き身をざらつかせている久坂らに同意を求めた。

世子が中止を求めるのだ。ここで挫折しても恥ではない。みな黙つて、うなづいた。

ただひとり、志道聞多だけが興奮醒めやらず、

「君前で一同、腹を切ろうじゃないか。長州男児の肝つ玉はどうした」

とわめいたが、すでに冷静を取り戻している晋作に、

「いまだひとつ仕事も出来ぬうちに、死を急ぐのは長州男児の本懲ではないぞ」と戒められて、おとなしくなつた。

あとは世子が待つ大森まで行き、処罰を待つのみである。

山県と寺内に引率されて、十余人の長州男児の一団が重い足を引きずりながら、ぞろぞろと東海道を大森に向かって歩きだした。

前日、肩をいからせ、「二度と戻らぬ」と格好いいことを言いながら、歩いた道だ。なぜ、あんなに熱くなっていたのだろうか。同志たちは互いの顔を見るのもなんだか照れ臭く、肩を落としていた。

後に晋作は自省の念を込めてか、こう言つている。

「長州人は熱しやすく、冷めやすい。始め脱兎のごとく、のち処女のごとしである。願うところは始め処女、のち脱兎でありたい」

まだ、男を知らぬ処女のように大人しく敵陣に近づく。そして、油断している隙に激しく攻撃を加え、脱兎のように逃げ去る。孫子の兵法のひとつだが、つねに長州人はその逆なのである。

大森まで帰つて来た晋作らを、藩主世子毛利定広は蒲田の梅屋敷で迎えてくれた。梅屋敷は梅林があつて茶屋もある、錦絵にも描かれた江戸の娯楽施設だ。

うなだれた一行は、山県と寺内に導かれて部屋に入った。そこには、世子がひとりで座っていた。

世子の長い顔は、のっぺりとしていた。それに糸のような目、驚鼻わし。大名というより、平安貴族のような高貴な雰囲気がある。

世子の面前で、晋作らは横一列に並び平伏した。

世子は、晋作と同い年の二十四歳。この二人の間は、単なる主従を越えた固い信頼関係で結ばれている。

晋作の父小忠太は世子の教育掛だった。このため晋作も、幼いころから世子の遊び相手をつめた。しかも前年の三月、晋作は世子小姓役として藩に初出仕している。

つまり晋作は次代藩主の幼いころからのご学友であり、なおかつ側近中の側近なのだ。将来の出世は約束されたも同然だった。

他の者たちは、いわば晋作の取り巻きだから、たとえ藩士としての地位が低くとも、非公式ながら世子には何度か会っている。

しかし、庸造は昨日からこのグループに加わったばかりなので、世子の顔をこんなに間近で拝むのは初めてだつた。世が世なら一生こうした機会は無かつたはずだと、庸造は平伏しながら

ら感動していた。

さらに庸造がびっくりしたのは、おつとりとした世子の口から出た、次のような説諭の言葉である。

「私の才は乏しいが、任は重い。お前たちが左右から補佐してくれなければ、それを果たすことができぬ。お前たちが私を捨てて去れば、一体誰を頼ればよいのだ。どうか、このような危険な行動は思いどおり、私を助けて欲しい」

厳しい叱責を受けるのではないかと覚悟していただけに、一同は驚いた。さすがは人材育成に努めてきた、長州藩の若殿だ。

庸造も涙をぽろぼろとこぼしていた。案の定、あちらこちらから、すすり泣く声が聞こえてくる。

ところが、晋作だけは違つた。一滴の涙も流さず、堂々と世子の前で今回の挙におよんだ経緯を説明し、みずからの攘夷がいかに「正義」であるかを主張した。

晋作の熱弁に、世子は満足げに頷いていた。

結局、なんのための説諭かよく分からぬまま、この席はお開きとなつた。

世子が退座すると、酒肴が運ばれてきた。一同は足を崩し、とたんに肩の力を抜く。一気に

緊張が解かれた。

さあ、宴会の始まりである。

庸造はさすがに面食らった。いつもこんな調子なのかと、呆れた。

酔いがまわると、あちらこちらで激論が交わされた。「異人に屈するな」「断固攘夷だ」「幕府の弱腰外交はけしからん」などなど、大言壯語しているが、要は酒の勢いを借りたどうでもよい話である。

(6)

大体酒が飲めず、宴会も好きではない庸造はひとり考え込んでいた。

実は庸造は、最近少しふて腐れている。

藩論が開国から攘夷に一転したせいで、せっかく身についた海外知識が、役に立たなくなつたのだ。桂などは「心配するな、時を待て」と慰めてくれるが、この調子では先行きが分からぬ。

そして今日のことでの庸造は、つくづく長州藩が嫌になつた。

こんな連中とは早く手を切らないと、命がいくらあっても足りない。国のため、藩のために

命を捨てるのはやぶさかではない。しかしそれは、自分が信じた道の上ならである。彼らと一緒に、勢いに任せて死ぬのは御免こうむりたい。

ロシア渡航前、桂から戒められたことが思い出される。やはり勢いに任せて行動するものではない。「逃げの庸造」と罵られても結構だから、とにかくここから早く逃げ出したかった。  
(特にあの、いつも大声を張り上げている志道聞多つちゅう奴はなんじや)

昨日から庸造の目について仕方がないのが、なにかにつけ、

〔長州男児の肝つ玉〕

を振りかざす、志道聞多という大柄な男だ。このたびの異人斬り計画も、もとは彼が持ち込んだ話が発端らしい。

聞多は一行の中では庸造や晋作よりも年長の一十八歳、身分は晋作と同じ八組士。湯田高田(現在の山口市)に屋敷を構える藩士井上家の次男として生まれだが、十七の時、兄と共に萩城下に出て来て明倫館で学んだ。そのうち城下江向に住む藩士志道慎平の次女とくつついて、志道家に婿養子として入つた。

たしかに聞多は見た目は粗暴で、繊細さのかけらも感じられない。そんな男が、藩主や世子の小姓役まで務めたというのが、庸造には合点がゆかなかつた。近ごろ、英学修行の名目で江

戸に出て来たが、藩から貰つた学費の大半を品川の妓楼などで遊興に費してしまつたらしい。庸造がそんな話を知つてゐるのは、昨日から聞多自身が、大声で何度も話してゐたからである。そうした不祥事の数々を自慢した氣であり、悪びれた様子は微塵もない。金錢感覚が狂つているようだつた。

やがて、数人の土佐藩士が梅屋敷にやつて來た。心配した山内容堂が寄越した者たちだ。みな、律義を絵に描いたような、小役人風ばかりである。

案の定、土佐藩士たちもこの場にはうんざりしたようで、儀礼的に一、三杯飲むと帰ると言い出した。

「ならば見送りを」

すっかり酔つた晋作がよろよろと立ち上がり、他の者もそれに続いて玄関に向かつた。

相変わらず聞多は廊下を歩きながら、上機嫌で土佐藩士の肩に太い腕を廻し、酒臭い息を吐きながら何やら高説をのたまわつてゐた。からまれた土佐藩士は、たまつたものではない。露骨に迷惑そつた顔をして、足を早めていた。

一同が、玄関前で形式的な挨拶を交わしていたところ、蹄<sup>ひづめ</sup>の音が近づいて來た。

ふと目をやつた庸造は、またも仰天してしまつた。酩酊寸前まで飲み続けたらしい、長州藩

の重臣周布政之助が現れたからだ。

だらしなく馬にまたがる周布の顔色は、酔つてゐるのに蒼白かつた。それでも馬上で背筋を伸ばし、大きな目玉をぎょろつかせながら土佐藩士を見すえて、こう言い放つた。

「勅命を奉じて幕政に参与した容堂公は、攘夷を実行しようとしない。なぜだ。尊王攘夷など内心馬鹿にしているからだろう」

ざまあ見ろ、言つてやつたぞ、へらへらと笑う周布はそんな態度をあからさまにした。

周布は日ごろから土佐っぽが大嫌いだ。連中は目立ちたがり家で、酒癖が悪く、議論でやり込められると、すぐ刀を抜いて凄む。無頼の輩と変わらぬではないか、というのが周布の土佐人観だ。それに今回も土佐が出しゃばつたせいで、長州が恥をかかされたのだから気に入らない。

だが、いくらなんでも面前で主君を馬鹿にされた土佐藩士の顔は瞬間に紅潮した。

「斬る！」

さつと刀を抜いた。

周布は相変わらず馬上から薄ら笑いを浮かべ、闘犬のように唸<sup>うな</sup>る土佐藩士たちを見下ろしている。

そこへ晋作が刀を抜いて飛び出し、土佐藩士たちの前に立ちはだかつた。

一瞬緊張がみなぎった。

「周布の失礼は僕が許さん。貴君たちの手をわざらわせるまでもない。成敗いたす」

叫ぶやいなや、晋作は周布目がけて斬りつけた。斬りつけるように見せかけて、実は馬の尻を斬つた。

驚いた馬は悲鳴をあげ、周布を乗せたまま走り去つた。

矢のような速さで遠ざかる馬を眺めながら、晋作は刀を鞘に収めた。土佐藩士たちは、ただ呆然として見てゐるしかなかつた。

これが「梅屋敷事件」である。

幸い晋作の機転により、流血事件には発展しなかつた。酔つても、心のどこかで醒めている。冷静に判断する力だけは、どんな場合でも残している。

晋作とは、そんな男であつた。

## (7)

江戸における長州藩邸は江戸城の桜田門前に上屋敷あざぶが、麻布に下屋敷があつた。そこで合わ

せて二千人あまりの藩士や使用人が、生活をしてゐる。

上屋敷西北隅にある櫓の一階には異人斬りに失敗し、謹慎を命ぜられた高杉晋作・久坂玄瑞・志道聞多・赤松武人・長嶺内蔵太・寺嶋忠三郎・有吉熊次郎・品川弥二郎・白井小助・松島剛藏・山尾庸造の十一名が押し込められていた。

謹慎とはいゝものの、形式的なものだ。実は藩は彼らに、ひそかに小遣いまで与えている。藩士へは月二両、庸造のような陪臣へは月一両というから結構な額だ。

この藩は相変わらず、人材と認めた若者たちには甘い。だからこそ若者たちがのびのびと藩の内外を、「国事だ、国事だ」と叫びながら走りまわつてゐられる。

もちろん彼らは、反省などしていない。たちまち次の行動に火がついた。

まず、「百折不屈、夷狄を掃除」すると、攘夷貫徹の志を誓い、血盟書を作つた。目的を述べた前文は久坂が書き、真つ先に晋作が、つづいて久坂以下十一名がそれぞれ署名、血判をした。庸造は一刻も早くこの仲間から抜け出さねばと思ひながら、いまだ何かに引きずられるようと一緒にいる。眼前に血盟書が回つてくると、勢いに任せて十番目に署名をし、血判をしてしまつた。とても、ひとりだけ断れる雰囲気ではない。

彼らはうす暗い部屋の中で、連日額を寄せて相談し合つた。まるで悪童たちが、次なる悪戯

の相談をしているかのようだ。

彼らは自分たちを「御楯組」と称した。國家の楯になるという意気込みだ。この名称は、集團の結束をさらに強固なものにしたようだつた。

ある日、新しい仲間が御楯組に加わつた。

名を伊藤春輔<sup>いとうしゅんすけ</sup>という。藩の密偵として彦根や京都で幕府方の様子を探つた後、江戸へ足を踏み入れた。たまたま、旧知の晋作を訪ねて来たのが運の尽きだ。晋作の、

「春輔か、ちょっと手伝つてゆけ」

のひと言で、そのまま引きずり込まれたのである。

春輔は瀬戸内に近い、東荷村（現在の山口県光市）の農家に生まれた。少年のころ萩に移り住み、父母とともに松本村の下級武士だった伊藤家を継ぐ。近くに松陰が主宰する松下村塾があり、何度か顔を出すうち、晋作や久坂といった先輩たちと親しくなつた。

根が陽気で、まめな性格だったから、松陰からも、

「将来は周旋家になりそうな」

と評され、重宝がられた。

周旋家というのは、人と人との間を走り回つて物事をまとめる者といった意味だろう。

春輔は、つねに冗談を言つて周囲を笑わせる。しかも苦労人らしく、自分を道化にするから、敵を作ることがない。

春輔が加わつてからは、この御楯組の雰囲気が妙に明るくなつたと庸造はおもう。

六七年上で、厚かましく強引な志道聞多のような男でも、春輔は上手にあしらう。いつの間にか、聞多が「春輔」、春輔が「聞多」と呼び合う仲になつてゐる。春輔の人柄もあるだろうが、小事にあまり頓着しない聞多の性格のせいかも知れない。

さて、次に御楯組が標的にしたのは、北品川御殿山に間もなく完成するイギリス公使館である。

開国以来、日本に滞在する外国人を悩ませ続けたのは、頻発する攘夷テロだった。

とくに文久元年五月と翌二年五月の二度にわたり、高輪東洋寺イギリス公使館が襲撃された事件は、嚴重な警戒下で起つただけに關係者たちを震え上がらせた。

各国の公使たちは幕府に抗議するとともに、安全に生活できる敷地の提供を求める。そして列強の強い希望により選ばれたのが、北品川の御殿山だった。

江戸っ子にすれば御殿山は、上野と並ぶ桜の名所である。しかも江戸湾を見下ろす軍事的にも重要地点だ。

官民共に反発は激しかつたが、幕府は強引に事業を進めた。まず、イギリス公使館の建設が進み、それがすでに仕上げの段階に入つていた。これを焼き払つてしまえば、庶民は喝采を叫ぶに違ひない。

「その上で、長州の仕業であると公表し、全員が切腹するのだ。そうすれば、長州の人気は高まる上、幕府もわが藩も、攘夷を断行せざるをえなくなる」

晋作の演説に、またもや一同は陶酔しているようだつた。

#### (8)

十二月十一日深夜、攘夷熱にうなされた御橋組の若者たちは、御殿山に建設中のイギリス公使館を焼き払うべく、相模屋の一室にひそかに集まつていた。

今夜はやけに冷え込む。

彼らはしばらく酒を酌み交わしながら、何やらひそひそと話し合つていた。やがてそのうちの三人が、焼き弾だまという火薬が入つた爆弾のようなものを二個ずつ懐にねじ込み、外に飛び出した。

間もなく他の者たちも、ひとり、またひとりと夜の間に消えた。中には酒を飲み過ぎて、足

もとがふらついている者もいた。

やがて一行は約束どおり、海に面した御殿山の高台に集合した。

ところがイギリス公使館の周囲には、丸太で組まれた人間の背丈の倍ほどもある柵がぐるりと巡らされている。とても乗り越えられそうな高さではない。

「これだけ揃つていて誰一人、柵があることに気づかなかつたのか。残念だ」

久坂玄瑞が、ため息をもらした。

ところが、春輔がにやにやしながら近づいて来て、

「こんなこともあろうかと思いましてね」

と、懷の中から小さなノコギリを取り出した。そして柵をゴリゴリと切り始めた。

皆はこの春輔の行為を、呆気にとられて眺めていた。あの晋作までが、妙に感心した表情になつっていた。

ひごろから軽口ばかりたたく、お調子者の春輔はどこに消えたのだろうと、誰もがおもつた。

この日の夕方、晋作や久坂たちは相模屋で酒をあおつていた。その間、春輔はひとりで近くの夜店の屋台を見て歩いた。売っていたノコギリが目にとまつた瞬間、春輔は何かの役に立つそつだとおもい、それを買い求めたのだつた。

春輔がノコギリで柵を一本切り取つたおかげで、一同は簡単に柵内にしのび込むことができた。ところが異変に気づいた黒い影がひとつ、提灯をかかげながら小走りで近づいて来る気配がした。

「おまえたち、何をやっているのだ」

一同が固唾を飲んでいると、晋作が長い刀をさと抜いて闇の中を走りだし、目にも見えないほどの早さで、

「攘夷をやつとる！」

と叫んで提灯の方向に斬りつけた。さすが、柳生新陰流の居合の達人と称された晋作だ。

「うっ」

という悲鳴がし、提灯を投げ出した役人はその場に倒れた。峰打ちである。

完成間近のイギリス公使館は、ベランダ付き二階建ての、ぜいたくの限りを尽くした洋館だ。工事には見事な材木が使われ、それぞれの部屋は宮殿のような広さを持つていた。設計はイギリスが行い、建築費用の四万ドルは幕府が支払うという約束になつていて。

あらかじめ決められていた火付け役は、焼き弾を持って出た志道聞多・福原乙之進・堀真五郎の三人だ。

「やつた！」

一同は歎声をあげながら、蜘蛛の子を散らすように逃げ去つた。  
冬の夜空を焦がしながら、公使館は焼け落ちてゆく。  
火付け役の三人は公使館に入ると、あたりの木切れや板をかき集めて焼き弾の上に積み上げ、導火線に点火した。

乾燥した空氣のせいで、火はたちまちのうちに燃え上がる。やがて焼き弾が、ものすごい轟音をあげて爆発した。

晋作は久坂とともに品川宿の海月楼という妓楼に上がり、一階からその光景ながめていた。

つい先ほどまで寝静まっていた品川宿は、騒ぎ立てるやじ馬や、あわただしく走り回る消防士たちでごった返つていた。

晋作は久坂とともに品川宿の海月楼という妓楼に上がり、一階からその光景ながめていた。寒空の下で、障子を開け放しにして、火事見物をしながらよく飲んだ。彼らの表情は、悪戯を成功させた悪童のように嬉しそうだった。

だが、酔いがまわつてくると、久坂は次第に不安になつて來た。

「しかし高杉君よ、長州の者が放火したという事実を公言するのは、やはりまずいのではないか」

「いまさら何を言うぢやるか」

「いや、殿のことを思い出すと、やはり…」

「大丈夫だ、心配するな。水面下で噂として広まるよう、すでに根回しはしてある。それで、わが藩の信頼が取り戻せたらよいのだ。あとは知らぬふりだ。証拠が無ければ、いくら幕府でも我々を捕まえられるものではない」

「相変わらず、ちやつかりしとるのう」

狂氣で突っ走るかに見えて、やはり晋作は腹の底では醒めていたのだ。

(9)

まつ先に焼き打ちの現場から逃げ去った庸造は、御殿山をひたすら駆け降りた。無我夢中だった。そして気づいたらひとり、品川宿をとほとほと歩いていた。

海月楼の前を通ると、階上から聞き覚えのある声がかすかにする。晋作と久坂が真夜中にもかかわらず、上機嫌で酒を飲んでいるようだつた。

庸造はふと、足を止めた。

その時、庸造は背後から声をかけられた。この声は、志道聞多だ。  
(いやな奴に会つてしまつた)

とおもつた。

しかし、無視もできない。表情には出さず、振り返つてお辞儀をした。

「先ほどはお世話になりました」

「変なことを言うやつじや。ちょっと、つき合え」

この男が連れてゆくのは、どうせ安い女郎屋くらいだろう。途中で口実を設けて帰ろうとおもいながら、庸造は聞多に従つて歩き始めた。

聞多は相模屋の裏に回りこむと、勝手口をこじ明けて中に入った。勝手知つたる他人のわが家だ。そして、焼き打ち前に大騒ぎをしていた広間にいると、その真ん中にどつと座つた。

暗闇の中で、しばらく沈黙が続く。

「高杉さんたちの所へは行かなくていいのですか」

堪えられなくなつた庸造が尋ねると、

「よい、よい。公使館の堀に落ちてずぶ濡れになつたから、女の所に行つたとでも、明日言つておく」

聞多はそう言うと、手慣れたしぐさで行灯あんどうに火を灯した。

庸造が初めて見る聞多の真剣な横顔が、暗闇の中に浮かび上がった。

「実は、君を見込んでの大切な話じゃ」

聞多は庸造の方を向き、言つた。庸造もまた、聞多の目を凝視した。

「軽舉妄動に付き合つてやるのは、この辺で終わりじゃ。これからは、どう日本の形を造るかを考えてゆかねばならぬ」

そんな言葉が聞多の口から出るとは、想像もしていなかつただけに、庸造は驚いた。実はこの男も、腹の底は醒めているらしい。

庸造は聞多の話を聞き入つた。

「いま、世界は海軍の時代だ。あのちっぽけなエグレスが世界を率いていられるのも、強大な海軍を持つちよるからである」

戦国時代、毛利は瀬戸内の水軍を傘下に加えることで、その勢力を急速に拡大した。だから

長州藩は、海軍の重要性を他のどの藩よりも認識しているはずであつた。

ところが、幕末、長州藩は蒸気船導入になかなか踏み切らなかつた。京都周旋に金がかかりすぎるというのが、第一の理由だ。幕府や薩摩・肥後藩などに、次々と先を越されるのを、長

州藩の心ある者たちは指をくわえて見てゐるしかなかつた。

それでもようやく三ヶ月前、長州藩は横浜のイギリス商人より、中古の蒸気船一隻を購入した。四百四十八トンのランスフイールト号で、長州海軍に属してからは干支にちなみ壬戌丸と命名された。

軍備拡張を唱える連中は、一隻では少ない、二隻、三隻と増やせと言う。だが、聞多は蒸気船など、金がある時に買えばいいとおもつてゐる。実は、もっと大切なものがあると、気づいたのだ。

聞多は先日、江戸湾で行われた壬戌丸の試運転に参加した。その時の様子が、あまりにも不さま、というより滑稽だった。

船長の山田亦介が、「蒸気停止、おもかじ」と大声を張り上げても、臨時の乗組員には蒸気の切り方がよく分からぬ。

前方を横切るイギリス船との距離がみるみるうちに縮んでゆき、危うく衝突しそうになつた。その時はなんとか蒸気が止まり、危機を乗り切つた。ところが今度は、誰も錨を上げることに気付かなかつたため、品川から横浜まで錨を引きずつて航海したのが、後になり分かつた。

「やはり異人から、蒸気船の運転術を学ぶべきではないか」

聞多は提案した。ところが、

「攘夷のために購入した蒸気船を動かすのに、異人の手を借りるとは何事か？」

と、逆に全員が怒り出す始末だ。話にならない。しかしその後も、動かし方は一向に分からず、やはり危なつかしい。

結局、背に腹は代えられぬと、六人のイギリス人を一日一両でしばらく雇い、教えてもらうことになった。

「あの時ほど、情けない思いをしたことではない。やはりわが日本は、異人あいじんどもに侮あなどられても仕方がないのかも知れぬ」

聞多は壬戌丸の試運転を思い出し、深いため息をついていた。

「ついては山尾君。いま、この藩には何が必要と考あらわえるか」

「井上さんのお話を聞いてみると、軍艦の数を増やすよりもまず、それを操あやつれる人材を育成することの方が急務かとおもわれます」

「そうだ！」

聞多は、手を打つて喜んだ。聞多は腹の中に秘めていた重大事を、庸造に打ち明ける決意をした。

「そこで僕は、国禁を犯してエジプトを渡り、海軍を学ぼうと考えた。生きた器械になるんじや。君はロシアへの渡航経験があると聞いておる。だから、その時は君も一緒に来てくれ」  
つい先刻まで毛嫌いしていた聞多という男が、実は自分と同じ考えの持ち主であると知り、庸造は無性に嬉しくなった。

それに「生きた器械」とは、言えて妙ではないか。

「死して忠義の鬼となる」などと叫ぶ、死にとり憑かれた連中の口からは、絶対に発せられる言葉ではない。久々に聞く「生きた」という言葉の感触を、庸造は口の中で何度も噛み締めていた。

しかも聞多は、この一ヶ月ほどの間に庸造を觀察し、自分の志を打ち明けるのに相応しい人物であると判断していたのだ。

それに気づかなかつた庸造は、おのれの不覚を恥じていた。

「しかし井上さん、どのように密航するつもりでしようか。生命はひとつです。死を恐れるわけではございませんが、やはり生きた器械になり、帰国せねば意味がないとおもいます」

庸造は尋ねたが、聞多はそれ以上語ろうとはしなかつた。生きた器械の意味を解しただけでも、庸造は同志とするに値すると悟つたようで、満足していた。

「僕に考えがある。あとは後日じや。藩のお偉方にも、話の分かる人はおる。今日は疲れたから眠る」

と、聞多は押し入れから出した布団に潜り込んだ。間もなく大きなびきをかきながら、泥のように深い眠りに落ちていった。

(10)

文久三年が明けた。江戸麻布の下屋敷で、庸造はのんびりとした新年を迎えていた。

巷ちまたでは、将軍が一百一十九年ぶりに上洛するとの話題でもちきりだ。

天皇からの「攘夷とういを実行せよ」との厳しい催促に、将軍自ら返答するのがその目的である。このため政局の中心は、江戸から京都へと移ろうとしていた。

前年十一月十二日、庸造と共にイギリス公使館を焼き払った同志の半分以上も、すでに江戸を去り、京都に上っている。

長州藩では、将軍に攘夷実行を誓約させる好機が訪れたと、躍起になっていた。

そんな時、まだ江戸に残っている晋作から、庸造は突然呼び出された。

「これから小塙原に松陰先生の骨を掘りにゆくので、手伝ってくれ。若林村に改葬するのだ」

松陰に傾倒するあまりからか晋作の鼻息は慌かつた。

この改葬は、単なる遺骨の移転ではないのだ。

国事犯であつた松陰の罪が消され、その志であつた攘夷の時代が到来したことを世間に知らせるための、デモンストレーションとしての意味が大きい。

いま長州藩は、攘夷とういというスローガンで、藩内を一本化せねばならない時節が到来している。そのため、藩内の人心をまとめるための、一本の柱が必要なのだと久坂玄瑞は一計を案じた。

宗教でも政治でもそうだが、集団になつた人間というのは、シンボルを持つことで安心する。

冷徹な久坂は、それを知つてゐる。知つてゐるからこそ、攘夷の殉難者第一号ともいふべき松陰の「忠義の魂」を祭り上げ、これを藩の精神的シンボルに据えようと藩主に建言した。

死者の利用は容易たやすいい。

「航海遠略策」を掲げた開国派が挫折したのは、それを起草した長井雅楽という生身の人間を、シンボルとして祭り上げたからだ。生きてゐる人間ならば、そのうち、ほころびも目につく。しかし死者は祭り上げてしまえば、いくらでも操る者の思惑で動かすことが出来る。

だが、安政の大獄で処刑された松陰の遺骸は、盜賊や火付け・人殺しと一緒に、小塙原の刑

場に埋葬されたままだ。

いくらなんでも、罪人を藩のシンボルとするわけにはいかない。

そこで久坂などが中心となり、朝廷に働きかけた結果、文久二年八月二日になって、「安政の大獄以来の国事犯の罪を赦<sup>ゆる</sup>し、礼葬、復權を認めるように」

という主旨の勅諭が幕府に下る。

これを受けた幕府は、渋々ながら十二月二十八日、大赦令を出した。朝廷から圧力をかけられた。だから、出さざるをえなかつたと言つた方がいい。

こうして、松陰から罪人というレッテルが剥<sup>は</sup>がされた。

もう、どこに改葬しようがお構いなしである。

しかも文久三年一月には、松陰に連座し失脚していた父の罪が許され、四月には松陰の著作が明倫館で教科書として使われるようになった。

藩内は一躍、松陰を神格化する空氣で一杯になつた。

計画どおり、一月五日の早朝、晋作は庸造のほかに伊藤春輔・赤禰武人・白井小助・堀真五郎を従え、南子住の小塚原へと赴き、松陰の遺骸を掘り出した。

死から三年以上経つた松陰の遺骸は、すでに骨になつていた。

庸造たちは刑場の隅に建つ粗末な小屋の軒先にその骨を運んで並べ、井戸水を汲んできて洗つた。それから丁重に白木の棺桶に骨を納め、

「殉國義士松陰吉田寅次郎先生之神靈」

と仰々しく書いた札を添えた。

この棺を庸造や春輔たちが担ぎ、上野・神田と練り歩いた。

まだ松の内で、江戸の町は正月気分が抜けていない。すれ違う人々は怪訝そうに眺めたり、あるいは、

「あの吉田松陰というのは、先年死罪になつた長州のお侍だ」

と、物知り顔で周囲に説明する者もいた。

こうして、あちらこちらと歩きまわり、郊外の若林村（現在の東京都世田谷区）に着いたころには、もう陽はどっぷりと暮れていた。すでに掘られてあつた墓穴に、棺を埋葬する。晋作たちは目を閉じ、静かに手を合わせた。

あらたに松陰の靈が眠ることになった若林一帯の一万八千三百坪あまりは、毛利家の火除け地（火災などの非常時に確保してある土地）である。松平大膳大夫（毛利家当主の正式名）にちなみ、大夫山と通称された。

一面田園が広がる若林の風景は、萩の松本村に、どことなく似ていた。松本村は松陰が生まれ育ち、そして松下村塾を主宰した地だ。

「いい所が見つかった。これなら先生も満足していただけるに違いない」

晋作はあたりを見まわしながら、満足気につぶやいた。

庸造は手を合わせながら、（どうか、これから私の志を見守つてつかあさい）と、心の中で松陰の神靈に向かい、語りかけていた。

### 第三章

(1)

久坂玄瑞はイギリス公使館を焼き払った後、山県半蔵とともに、雪深い信州に赴いた。松代城下で蟄居生活を送る、佐久間象山に面会するためである。

世を忍ばねばならない身である象山は、夜になつて高義亭と名付けた小さな家の二階に、二人の長州藩士を招き入れた。

(これが象山か…)

久坂は思わず息を呑んだ。  
象山は、誰もが恐れるような異相だった。面長で大きな眼をぎょろつかせ、易者のような髭を鼻の下と頬に蓄えている。

最初、佐藤一斎門下の儒学者として名を馳せた象山は、その後、独学でもつて二カ月でオランダ語の文法を習得し、蘭学にも通じたという当代一流の大学者である。以前は江戸で私塾を主宰していた。

開国の問題が起ころるや、象山は、

〔東洋の道徳、西洋の芸術〕

が、新しい日本の形なのだと説く。これが、混迷の時代に直面して進路を見失った若者たちから、絶大な支持をえた。

東洋の儒学の精神をもって政治を行い、その一方で西洋から進んだ科学技術（芸術）を積極的に採り入れ、日本を繁栄させよというのだ。

そこで象山は、西洋に若い優秀な人材を留学させ、「西洋の芸術」を持ち帰らせるよう幕府に進言するが、聞き入れられない。

そんな象山の影響を強く受けたのが、門下生の吉田松陰である。松陰は象山から激励され、その気になつてアメリカ密航を企てたが、失敗して獄に投ぜられた。

その罪は師である象山にも及ぶ。国もとである松代に送り返され、蟄居させられてしまつたのだ。

以来、八年になる。

象山は五十五歳になつて、松代藩ではなぜかこの大学者を、冷遇し続けている。象山の態度が尊大で、つねに他人を見下す癖があつたから、藩内ではその排斥に走り回る連中がいるのだと噂されていた。

そこで長州藩では、象山を攘夷の軍事顧問として招きたいと考える。攘夷を行つには砲台を築き、巨砲を鋳造せねばならない。その指導を任せようというのだ。

久坂と山県は、招聘のため藩主世子が派遣した非公式の使者だつた。

だが象山は、相変わらず自信たっぷりの態度で、

「松代藩に自分は欠くべからざる者だから、他藩へ行くことは出来ぬ」という説には大いに其場

と、長州藩の誘いを突っぱねた。

しかも象山は、攘夷に反対だつた。この点、科学者の頭脳を持つていたと言える。

「海外万國の大勢を觀察するに、たがいに有無を交易し、富強を謀つてゐるのが実情だ。わが国のみが孤立し、攘夷を実行しようなどとは、もつてのほかである。諸外国と対峙して富強を競おうとするなら、まず、海軍を盛んにし、武備を充實することだ」

象山の意見を聞きながら、久坂は自分たち長州藩の攘夷論とは相容れぬものを感じていた。

「しかし、先生」

久坂は何か反論しようとしたが、象山に睨まれて思わず顔を伏せ、黙つてしまつた。その大きな目は、

(この青二才めが、やかましい)

と言つてゐるようだつた。

いえ、勝ち負けではありませぬ、外圧によつて歪められた日本の形を、いま一度攘夷という狂気によつて正さねばならぬのです、時代を動かすのは狂氣ですと、久坂は語ろうとしたのだ。ところが、よく通る声で持論を堂々と披瀝する象山の迫力に圧倒されてしまい、それが出来なかつた。久坂の額に、脂汗が滲んだ。

象山との面談を終えた久坂と山県が、松代城下を去るころは日が昇り始めていた。誰もいない峰にさしかかつた時、久坂はいま来た方角を振り返り、

「象山先生の大馬鹿野郎っ！」

と叫んだ。山県は子供じみた久坂の行為を、ただ笑つて見ていた。

こうして久坂と山県は、將軍上洛で揺れる京都に向かつた。京都到着は文久三年一月九日のことである。

## (2)

次の日の夕方、志道聞多は久坂と山県の旅宿である三条池田屋を訪ねた。聞多は世子の小姓役に任せられ、前年暮から京都に入つてゐる。

「象山は攘夷を必要無しとする。この点が、大いに不満であるし、わが藩に招いたところで役には立つまい」と吐き捨てるように言つた。聞多は久坂の話に、相槌を打つてゐた。

だが、聞多は心の中で、象山の海軍を盛んにし、武備を充実させるという説には大いに共鳴していた。

(西洋の藝術は、僕がきっと持ち帰つてみせる。さもなければ日本は滅びる)

あの壬戌丸試運転の惨めなさまが、またもや聞多の脳裏によみがえつた。

それから聞多は世子の命を受け、親書を携えて、なかなか京都に上つて来ない晋作を迎えて江戸へ下つた。

実は、イギリス公使館を焼き払つても、やじ馬が騒いだくらいで、晋作らが考へたほどの効果は無かつた。

テロ再発を恐れるイギリスは二度と御殿山を使用したいと言い出さなかつた。そのため、幕府は内心喜んでいるといふ。

頭にきた晋作は、

「江戸でもうひと騒動起こす」

と機会を狙っていたのだが、いい加減空しくなってきたようであった。そこへ聞多が世子の親書を持参したので、重い腰を上げ、政局の中心となりつつある京都へと向かった。

この時、聞多は江戸の上屋敷に、庸造を訪ねた。  
わずか一月ほどの間に、一度も江戸・京都間を往復する聞多の顔は脂ぎり、ますます精気がみなぎっている。

「山尾君、君も京に上つて来るようだ」

聞多は言った。

「攘夷論者が蟻集する京に足を踏み入れるのは、気が重いな」

庸造が本音を漏らすと、聞多は、

「陸路ではない。これは、生きた器械になるための試験みたいなものじゃ」とも言つた。

長州藩はこの度、来る攘夷に備えて横浜のイギリス商人からランリック号という木造船船（二七七トン）を、一ドルで購入している。かつて清国へ、アヘンを運び込むために使われた船だ。例により、干支にちなみ「癸亥丸」と名付けられた。

「この癸亥丸に四十人ばかり乗せて、品川から兵庫（現在の兵庫県神戸市）までを試運転する。君もそれに参加してもらいたい」

航海なら、ロシア行きで多少の経験があるから、庸造は多少の自信があるはずだった。さらに庸造は船長の名を聞いて、思わず歓声をあげた。

「野村弥吉！」

あの箱館の武田塾で学んでいた弥吉は、いま、江戸で外国人相手の交渉で活躍している。小銃の買い付けや、癸亥丸購入にも立ち会つた。英語が話せるため、藩から重宝がられているのだ。

「野村君にも、生きた器械になつてもらうつもりだ。すでに、その筋の了承はもらつておる」

「それは喜ぶじやろう。野村君には箱館で会つたことがある。それにしても…」

「何じや」

「攘夷、攘夷とうるさい中で、僕たちをエグレスに送り込もうとしている藩の黒幕とは一体誰なのです」

「…」

「生命を賭けての旅。それが分からねば、気味が悪い。頼む、教えて下さい」

しばらく考え込んでいた間多だが、

「では明かそつ。周布殿だ」

と、さらりと言つた。

「えつ」

梅屋敷での事件を目の当たりにしているだけに、庸造は一瞬さよとんとした表情になつた。

(3)

曆の上で春とはいゝ、江戸湾に吹く風は冷たかった。野村弥吉を船長とする癸亥丸が品川を発つたのは、二月二十八日のことである。

癸亥丸には、かつて長州藩が相模湾警備を命じられたさい揃えた武器の数々が積み込まれた。いよいよ、攘夷断行の準備である。

庸造は測量方という役を与えられた。他に医師赤川玄機、重役福原清介・児玉少輔など四十人が乗り込んだ。

重大な任務に就いた弥吉は、大いに張り切つてゐた。航海術は武田塾でみつちり実習してい

るから、難なく船は錨を上げて進み、江戸湾を出た。

その後も順調に航海は続いたが、伊豆下田沖に差しかかったころ嵐に見舞われた。小さな木造帆船は木の葉のように波に呑まれ、大いに揺れた。

船室に積み上げられていた行李の山が崩れ、中身が床にばら蒔かれた。人々もまた転倒し、そこかしこでもがき苦しみながら、のたうちまわり、胃袋の中のものを吐き続けた。

(日ごろ偉そうにしている武士たちも、不様なものだな)

冷ややかに眺める庸造も、船酔いはつらいが、多少慣れている分だけ他の者たちより気持ちに余裕がある。

こうして、遠州灘を乗り切つた癸亥丸は、各地の港に立ち寄り、風待ちをしながら航海を続けた。ようやく兵庫に到着したのは、四月半ばである。江戸を発つてから、実に一ヶ月半もの時間が流れていた。

瀬戸内に面した兵庫の港は、平清盛が整備した大輪田泊おおわだのとまりで、古くは日明貿易の拠点として栄えた。江戸時代はじめは尼崎藩領あまざきはんりょうだが、明和六年（一七六九）から、幕府領となつていて、国内貿易の拠点であり、山陽道の要衝でもあつた。

すでに幕府は諸外国との間に、兵庫を国際貿易港として開く約束を結んでいる。ところが、開国に反対する天皇がいる京都に近いため、なかなか実現出来ないでいた。兵庫の隣、神戸が

開港されるのは、この時からおよそ四年半後の慶応三年（一八六七）十一月七日のことである。上陸した庸造と弥吉は、京都へと急いだ。癸亥丸が航海している間に、將軍家茂は三千人を率いて上洛し、朝廷を中心とする政治情勢は大きく変化しているはずだった。

（4）

話は少しさかのぼる。

文久三年春の京都。周布政之助は河原町にある長州藩屋敷にいた。間もなく上洛して来る將軍家茂をつかまえ天皇の前で攘夷実行を誓わせる。そのために長州藩は、周旋するつもりだ。こうした政治運動の指揮を執るのが、藩政府の頂点に立つ周布の役目である。

周布は、表向きは麻田公輔あさだこうすけと名を変えている。

梅屋敷で土佐藩老侯山内容堂をからかった周布を、土佐藩士たちは許さなかつた。

「周布の首級を差し出せ」

と、藩邸に押しかけて騒いだ。

そこで長州藩では周布を処分したことにして、麻田公輔という別人に仕立て、藩政に参加させ

続けた。それほど周布は、重要な人材だったのだ。

周布は長州藩の攘夷の在り方として、

「攘は排なり、排は開なり、攘夷しかして後、国を開くべし」と述べている。

攘夷は攘夷のために行うのではない、開国のために行うというのだ。一見矛盾しているようだが、周布の頭の中ではなんら矛盾していない。

つまり、日本を強引に開国させた歐米列強に対し、攘夷を断行して抵抗の意を示しておく。その上で対等な立場に立ち、あらためて開国をやり直す。

だから攘夷の究極の目的は、開国にあるのだ。

しかし、あらためて開国を行った時、日本が西洋事情に疎く、海軍力に乏しければ、またもや列強の侮りを受けてしまう。

そこで、ひと足先に優れた若者をイギリスに密航させ、新知識や技術を吸収させて、持ち帰らせようと周布は考えていた。

同じ攘夷でも、流行病にとりつかれたように京都あたりをうろつき、「異人が神州日ノ本の土を踏むと汚れる。攘夷だ！ 攘夷つ」

とわめき散らす単細胞とは、本質的に違う。ただし周布たちは、こうした単細胞も味方に引き入れ、利用し、京都じゅうを、

「攘夷、攘夷」

と騒がして、開国した幕府を追い詰めようと企んでいる。単細胞はちょっと煽り立てれば白刃を振りかざし、狂犬のごとく走り出す、周布<sup>すいふ</sup>にとつては大変便利な存在だ。だが、単細胞がこの周布ら首脳部の一枚舌を知つたら、憤慨し、たちまちテロの予先<sup>ほしやん</sup>を向けて来るに違いない。だから気づかれぬよう、周布はたまに子供じみた暴挙を働くことにしてい

る。

さすれば単細胞は、周布を仲間だと考へてくれるだろう。

(やれやれ、わしも疲れるわ)

縁側にどつと胡座をかき、手酌で酒を飲みながら、周布は新緑に向かい一つある庭の景色をぼんやりと眺めていた。

(5)

そこへ、志道聞多が訪ねて來た。聞多は江戸から京都へ戻つて以来、周布のもとに日参して

いる。

「生きた器械が近いうち二人、癸亥丸でやつて來ます。これで英國行きは、私も含め四人ということになります」

「待て聞多、桂小五郎は行かせられんぞ。殿が手放そうとせん」

周布は、実は桂小五郎にもイギリス密航の話を持ちかけていた。一度、列強の実力をその目で確かめたいと考える桂は、大いに乗り気になつた。

ところがである。

桂は前年七月五日、周布・中村九郎とともに藩を代表し、京都で朝廷や他藩を相手に交渉する外交官役を任せられた。さらには、藩主右筆も兼任することになった。

よつて、政局の中心が江戸から京都に移つたまゝ、桂の役目は以前にも増して重大になり、とてもイギリスなど行ける状況ではなくなつてしまつたのだ。

聞多は兄貴分である桂を頼りにしていただけに、衝撃を隠せない様子だった。桂が欠ければ、密航団のリーダーは年齢からいつても、聞多ということになる。

「ところで聞多、誰かまだ連れて行きたい者はおるか」

「はい」

「誰じゃ」

「松陰先生の門下生、伊藤春輔」

聞多は、イギリス公使館焼き打ちの夜、ノコギリを持参した伊藤の冷静さを、高く買つていた。

「考えておこう。それから、遠藤太一郎が弟の謹助を連れて行つて欲しいと頼んで来た。なんでも、本人が強く希望しているらしい」

遠藤家は八組士で、二百八十石。当主の太一郎は江戸留守居役を務める、なかなかの能吏である。その弟とあらば、周布も嫌とは言えないのだ。

「遠藤謹助ですか！」

聞多が、叫んだ。

謹助こそが壬戌丸の試運転で、あわや接触事故を起こしかけた張本人なのだ。蒸気の止め方が分からず、上官から怒鳴りつけられ、首をすくめて震えている謹助の姿が聞多の脳裏によみがえった。あの失敗で、自分の不甲斐なさを恥じたに違いない。

そんな謹助の一大決心をおもうと、聞多はなんだか愉快な気分になつて來た。

「謹助のような大して取り柄の無い小心者までが、勇気をふり絞ろうとしている。長州という藩

もまんざら捨てたものではないですなあ」

「聞多、お前言い過ぎだいや」

周布は、苦笑した。

これで、密航留学生は五人ということになる。

豪快な笑い声を立てて去る聞多の後ろ姿を、周布は眺めていた。

「感心な奴らだが、かわいそうに。とても生命がもつまい、あいつらは、わしと同じ臭いがする」

周布の目から、涙がぽろぼろこぼれ落ちていた。

(6)

長州藩の御用を務める江戸の豪商大黒屋榎本六兵衛は、目先の利く男だった。開港とともに横浜本町二丁目に進出し、伊豆倉の屋号で生糸や蚕種、日本陶器などを輸出し、たちまちのうちに飛ぶ鳥を落とすほどの勢いを持つ貿易商に成長した。

ジャーデン・マジソン商会横浜支店から、長州藩が壬戌丸を購入するにあたり、代価十一万ドル支払いのための洋銀を買い入れたのも、この伊豆倉である。

伊豆倉の番頭を務める佐藤貞次郎は、庸造や弥吉とともに癸亥丸で、上京させられている。

(はて、何用だらうか)

貞次郎を京に呼び寄せたのは、周布だった。

周布は、この若い番頭が壬戌丸購入で外国人相手に見せた手腕を、高く評価している。

ある日夕方、周布は祇園の一力茶屋に貞次郎を招いた。

ここは、「忠臣蔵」の大石内蔵助が討ち入り前、敵の目を欺くために遊びほけたという由緒ある茶屋だ。周布もまた幕末の大石よろしく、ここに入り浸つっている。

芸者に歌わせ、踊らせてひととおり遊ぶと、周布は人払いを命じた。そして貞次郎に酒をすすめながら周布は、話を切り出した。

「貴君にせひとも頼みたいことがある」

「はい、なんでございましょうか」

「長州はひとつ器械を求めていたとおもうておる」

ここまで聞いて貞次郎は、ははあ、さては武器輸入の相談だなど察した。

「で、何を……」

「その器械というのは、ほかでもない。人の器械、生きた器械じゃ」

「はあ？」

予想が外れ、貞次郎が怪訝な顔をした。

「回りくどい言い方はやめよう。世の中はいま、攘夷で騒がしい。もつとも騒がしとする張本人は、わが藩じや。これは一度、日本の武を諸外国に示す必要があるからである」

突然、周布は熱くなつて語り始めた。

「しかし貞次郎、攘夷の次には必ず各國交通の日が来る。いまの世界情勢でゆくと、それは自然の流れじや。日本だけが、逆らうわけにはいかぬ。その時になつて西洋の事情を熟知していなければ、またもや日本は侮られてしまう。だからわが藩から密かに英國に人材を派遣し、学ばせ、来るべき時に備えておきたいのだ」

貞次郎は、すべてを理解した。

「では、その密航の段取りを手前どもにせよと」

「そうだ、頼む」

潔く頭を下げる周布を前にすると、貞次郎は胸が熱くなつてきた。

(なんと、大胆な……)

貞次郎は一商人ではあるが、つねに日本の将来を憂いでいる。

為替レートを定めておかなかつたため、五十万両もの金が大量流出したり、生糸の輸出超過が深刻な問題となるなど、幕府の開国政策の失敗は、商人たちの生活をも直撃していた。

商人だからこそ、時世に無関心ではいられないのだ。

「わかりました。周布様の頼みとあらば断れませぬ」

貞次郎は、周布が自分を全面的に信頼してくれたのが嬉しかった。表で攘夷の急先鋒となり、裏で西洋の文明を取り入れようというビジョンの壮大さにも感銘を受けていた。

「助かった。事は急ぐ。ただし発覚すれば、お前もこれだな」

周布は右手で首を打つ真似をして、けらけらと笑つた。

貞次郎はもう逃げ出せないとおもつていた。

(7)

幕末、長州藩主の座にあつた毛利慶親(よしのり)（のち敬親(たかちか)）は家臣たちから「そうせい侯(こう)」とあだ名された。

藩の進路を決める御前会議のさい、慶親はでつぱりと肥満した体を微動だにせず、上座からじっと眺めているだけで、めつたに口を開かない。そのうち意見が出尽くし、大体決まりかけ

たころで家老のひとりが、

「殿、いかがいたしましようか」

と尋ねる。すると、何を聞いてもぶつきらぼうに、

「そうせい」

としか答えない。だから、「そうせい侯(こう)」なのである。

しかしこの慶親、実はなかなかの名君である。人材登用が大好きで、若い下級武士たちにも、次々と活躍の場を与えた。

自分が見込んだ中堅クラスの藩士を、首脳部に抜擢することも度々あつた。そのさい、周りからどんな雜音が耳に入つて来ようとも、自分の眼力を信じて、断固信念を貫いた。

そのように登用して仕事を任せた以上、慶親としては、あまり口を挟まないようにしている。

「そうせい」はいわば、自分の判断に対する自信の裏返しなのだ。

イギリスに密航留学生を送り込み、海軍を学ばせたいという計画も、すでに周布は密かに慶親に言上済みだ。慶親はいつもよりも深々と、

「うむ、そうせい」

と、頷いた。

そこで、周布は貞次郎に協力を誓わせるや、ただちに毛利登人などの藩首脳部を説き、了解を取り付けた。このあたりの根回しは、さすがに素早い。その上であらためて、京都滞在中の世子定広に言上し、許可を得た。

これで、万事整つた。

四月十八日には早くも、聞多・弥吉・庸造の三人に内命が下る。

三人は河原町にある藩邸の周布の部屋に呼ばれ、一枚の書き付けを手渡された。

それには、「外国へ渡航し、学校へ入り込み、修行」したいという希望をかなえるため、「三人とも五ヶ年の間の御暇」を出すので、「後年にいたり罷り帰り候はば、海軍一途をもつて御奉公つかまつり候よう、心掛け申すべし」と記されていた。

後から加わった春輔と謹助は手続き上、默認という形で渡航する。

さらに周布が周旋した甲斐あり、庸造の身分が陪臣から毛利家直属の藩士へと引き上げられた。

「庸造、お前は大きな事をやるのだ。だから大きな心を持って、大きな心をな」

〔周布様……〕

曰くからの身分に対する負い目を見透かされた庸造は、赤面していた。

「それからこれは、殿と若殿からじゃ」

周布は漆塗りの文箱から絹に包まれた巻紙を取り出し、上座に置いてうやうやしく拡げ始めた。

そこにはまず藩主慶親が、

〔量時慶力〕

続いて世子定広が、

〔思弁〕

と横書きで大書していた。時勢に適した力をしつかりと備えて来いという、藩主父子の激励する声が聞こえたようで、庸造も、聞多も、弥吉も、緊張した面持ちで眼前の書を見つめていた。

〔ご両殿様がお前たちを激励され、みずから筆を執られた。大切に英國に持参せよ〕

(若い者は、酔わせて働くに限る。されば、その才は倍になつて開花する)

周布は腹の中で、ニヤリと笑つた。

聞多・弥吉・庸造・春輔・謹輔の五人はそれぞれ京都を発ち、まず江戸の藩邸に集まることにした。

当然ながら、藩の金庫からは公然と渡航費用が出せない。

よって、藩主の手元金（私的な金）から六百両が下されることになった。これは藩の会計担当が、ひとり百両と見積もつたからだ。

密航手配は、すでに伊豆倉番頭の佐藤貞次郎が横浜で進めている。

貞次郎が話を持ちかけたのは、横浜に支店を構えるイギリスのジャーデン・マジソン商会だった。前年九月、長州藩が初めての蒸気船である千代丸を購入したのも、このジャーデン・マジソン商会だ。

開国とともに横浜に赴任して来た責任者のS・J・ガワーという男は、外庄に届した幕府の生命が短いことを薄々察している。

「この際、多少のリスクを背負うとはいえ、長州藩に恩を売つておくのは、我がジャーデン・マジソン商会としても悪くはない。密航させてまで西洋文明を吸収しようとする長州藩の情熱に、ひとつ賭けてみよう」

ガワーは、貞次郎にそう言つた。

そこで五月三日、ガワーは渡航についての打ち合わせを行つため、庸造を横浜に呼びつけた。庸造とガワーは知らぬ間柄ではない。以前にも庸造は藩の用事で、何度かガワーを訪ねたことがある。

ところが、応接室に通された庸造が、

「六百両で五人の渡航をお願いしたい」

と述べるや、ガワーは驚いた様子で、首を横に振つた。

「無理だ。一人分にも満たない」

「では、幾つかかるのか」

「私の概算では、船賃として一人七百ドル（約四百両）、それに一年の学費や生活費を合わせて、少なくとも一人千両は必要だ。一年目からは、言葉も分かるだろうから、何か仕事を見つけて給金を得ればいい。私も帰國したら出来る限りの協力はする。しかし、最初の年のひとり千両はなんとしても揃えてもらいたい」

「五千両か！」

あまりにも予想を上回る額を聞き、庸造は途方に暮れた。

庸造は重い足を引きずりながら藩邸に帰った。

ガワーが手配している蒸気船は、五月十二日

朝に横浜を発つとのことである。あと一週間ほどしかない。

六日になり、聞多と弥吉が江戸に到着した。庸造がこれまでのいきさつを説明するや、聞多は、

「ガワーに、足元を見られたのではないか」

と不機嫌な顔になり、

「ともかく明日、横浜に行き、ガワーに会ってみる」と言い出した。

聞多は京都を発つ際、國もとの志道家に離縁状を送りつけ、生家の井上姓に戻っている。万  
一の場合、養家に累が及ばないようとの配慮からだ。なのに、渡航費用が足りないから戻り  
ますでは、切腹ものなのだ。

聞多は旅の疲れも忘れて翌七日、弥吉や庸造を引き連れて横浜にガワーを訪ねた。

だが、答えは庸造が交渉した時と同じだった。

ガワーも長州藩を見込んだとはいえやはり商人だ。じようざんで物事を進めようとはしない。

「よし分かった。僕が責任をもち数日のうちに五千両調達する。ですからあなたも、我々の渡航

準備を進めて下さい。お願ひします」

聞多はそう言うと、いきなり自分の腰から大刀を鞘さやごと引き抜いた。

(斬られる……)

ガワーの顔から一瞬血の気が引いた。

「日本武士の魂はこのとおりです。金を持って来るまで、預かっておいていただきたい」

頭を下げた聞多は大刀を、ガワーに押し付けようとした。

ガワーは苦笑しながら、

「よくわかりましたから、その物騒な物を引っ込めて下さい。渡航の手続きは進めますから……」

と言った。聞多の強引さに負けた格好になつた。

ガワーのもとを辞した三人は、江戸への道を歩きだした。

「聞多さん、大丈夫なんですか、あねえなことを言うて。五千両ですよ、五千両」

弥吉が責めるような口調で問うた。

「うるさい、当てはある」

聞多はそれだけ言うと、弥吉と庸造を振り払うようにして、どんどん先へと歩いて行つた。

一万両という巨額の金が、江戸麻布の長州藩下屋敷に秘蔵されている。近々始まる攘夷戦に備えて、小銃一千挺をアメリカから購入するための蓄えだ。

地獄耳の聞多は、この一万両の存在を知っていた。

渡航費の話を聞いた瞬間、聞多の脳裏をかすめたのは、この大金の存在である。これを担保に、伊豆倉から五千両借りようというのだ。

番頭の貞次郎は、懇願する聞多を前に言った。

「わかりました井上様。主人を説得いたしましょう。しかし、どなたか保証人になつてもらわねばなりません」

「もつともじや。保証人なら一人、心当たりがおる。村田藏六殿じや」

「ああ、村田様ですか」

村田の異常に広い額を、貞次郎は思い浮かべて微笑んだ。

長州藩領・鋳錢司村（現在の山口市）の村医者の姿だった村田（のちの大村益次郎）は、大坂の適塾で蘭学を修めた後、宇和島藩や幕府に出仕し、第一線に立つて活躍していた。

しかし、長州藩の人材が他所へ奪われたと悔しがる桂小五郎や藩医青木周弼は、村田を長州

藩に招く運動を進める。

その結果、村田は万延元年（一八六〇）四月、一代限りの土分、年米一千五百石という条件で長州藩に召し抱えられた。村田が宇和島藩や幕府に籍を置いていた時分の、何十分の一といふひどい薄給だ。それでも村田は故郷から声をかけられたのが嬉しかったようで、長州藩士の列に加わった。

ところがその後、長州藩は攘夷運動の急先鋒となつたため、村田のような西洋通は表舞台に立てなくなつた。

そこで周布や桂らは、表では村田を冷遇しているかに見せかけ、ひそかに開国準備のため、働かせていた。外国人との交渉などは、すべてこの村田が担当している。機密費もたっぷり握っている。

長州藩の裏の顔を代表する村田が保証すれば、それは周布や桂が保証したも同然なのだ。

久しぶりに聞多は春輔を連れて品川宿に赴き、相模屋に登樓した。

「今夜はここで客人をもてなす。お前たちも、うんと派手に、賑やかにやつてくれ」

数人いた芸妓たちが一齊に、「きやあ」と歎声を上げた。これまで藩の公費を使い込み、さんざん遊んで来た聞多は、女たちに人気がある。

やがて、仏頂面を下げた村田蔵六がやつて來た。彼こそが、今夜の客人である。村田はめつたに感情を表に出さない、無愛想さわまりない男だ。

「なんの御用かな」

と言つたきり、村田は難しい表情で部屋じゅうを、じろじろと見まわしている。

騒いでいた芸妓たちも、一瞬きよとんとなり、この奇妙な来訪者を無言のまま見つめていた。

沈黙にたまりかねて春輔が、愛想笑いを浮かべながら、

「村田先生、今日はお暑うござりますなあ」

と、酒をすすめる。村田は杯を差し出し、

「夏は暑くて当たり前です」

と、撫然として答えた。

聞多は、思わず吹き出しそうになつたが、懸命にこらえ、こう言つた。

「そうです。村田先生は正しい」

村田を除き、その場にいた全員がどつと笑つた。

こうした妓楼に登ること自体、村田はあまり経験が無いらしい。それでも酒が体内をまわり始めると、芸妓の肩を抱き、何やら喋りながら楽しそうにしている。

無防備な村田が上機嫌になつたのを見計らい、聞多は芸妓たちに部屋から出るよう指示した。

「ところで村田先生、本日はお願ひがござります」

聞多と春輔は、村田の前にかしこまつて平伏した。村田は一瞬にして現実世界に引き戻され、(謀られた……)といつた顔をした。

「われわれ五人が、近々英國へ密航するのはご承知のことだと思います。ところが、大変な問題が起ころ困惑しております。なにとぞ村田先生の力をお貸しください」

聞多はこれまでの経緯を説明し、それから村田に五千両の保証人になつて欲しいと頼み込んだ。

「さすれば伊豆倉の貞次郎も、金を調達來ると申しております」

村田は目を閉じ、ひとつひとつ領きながら聞いていた。

「なにぶん、時間がございませぬので…」

続いて聞多は鬼瓦のような凄まじい形相になり、

「もし聞き入れられない場合は、ここで切腹して果てます！」

と叫び、いきなり着物の前を開き、胸と腹を突き出して見せた。

村田はこうした熱血漢は大嫌いだ。しかし、

「よく分かった。明日さつそく貞次郎に話してみる。任せておけ」

と、無表情のまま言つた。別に聞多の芝居に感じたわけではない。この合理主義者は冷静に

話を理解し、藩のため、最も適切な判断を下しているに過ぎないのだ。

(上手くいった…)

聞多は、ほつと胸を撫で下ろした。

聞多はさつそく春輔に目配せをした。明るい表情で春輔は、芸妓を呼びに走る。間もなく宴

会が再開した。

村田は茹で蛸のように真っ赤な顔をしながら、気に入った若い女を引き寄せた。そして、続

きの酒を飲み始めた。

それを見ていた春輔が、感心したようにつぶやいた。

「先生、なかなかお好きですねあ」

「君たちは、いつもこんな愉快なことをしているのか」

「いえ、ほんのたまに…」

「聞いておるぞ。放蕩書生どもめが。まあ、エゲレスに行つとる間は、我慢するのだな」

春輔は、そりやあるいはよと言いたくなつたが、急に多弁になつた村田の機嫌を損ねてはよろしくないので、「はい、はい」と、にこやかに返事をした。

翌日、村田と伊豆倉の話し合いで、五千両の調達はとんとん拍子に進んだ。一万両の担保があるのだ。保証さえしっかりしていれば、伊豆倉としても悪い話ではない。

「いや、僕が切腹すると腹を出したら、さすがの村田先生もびっくりしどつたぞ」

藩邸に帰つて来た聞多は、庸造・弥吉・謹助前に、身振り手振りを交えながら得意満面に話して聞かせた。

「さすがは聞多さん。凄い気迫ですねあ」

謹助は、ひたすら感心し、憧れるような面持ちで聞多を見つめている。

弥吉はこの類いの法螺話にはまったく興味がない様子だ。

庸造は郷里が近い関係で、村田を以前から知っている。

(まさか、村田先生がそんなこけおどしで動くか。また聞多さんのハッタリが始まったとは思つたが、せつかくの自慢話に水を差すのも悪いので、やめた。

それから五人は身支度を調べ、怪しまれぬよう別々に藩邸を出、横浜を目指した。

(1)

五人が横浜に集まつたのは五月十日である。出発は一日後の早朝に迫つていた。

十一日夕方、五人は横浜太田町の妓楼に、世話になつた村田藏六と佐藤貞次郎を招き、宴を開いた。

「これで当分、日本とはお別れだ」

「さあ、飲むぞ、飲むぞ」

今夜は芸妓を呼んでいない。機密の漏洩を恐れたからだ。密航者取り締まりを、幕府が強化しているとの噂だつた。

宴もたけなわになつたころ、

「おい、放蕩書生たち。エグレスで遊んで来たら承知せんぞ」

今夜も真っ赤な仮頂面をした村田が、聞多に絡み始めた。

「村田先生、ちいとお待ち下さい」

と言ふや、聞多は席をはずし、部屋から出て行つてしまつた。何かを企んでいるらしく、他

の四人もニヤニヤしながら聞多に続いた。

「なんじやあいつら」

「廁かわでしようか」

村田と貞次郎が酒を飲み続けていると、間もなく勢いよく襖が開いた。

「お、おぬしらその格好は……」

村田はそれだけ言つと、あとは腹をかかえ笑い転げた。

五人はガワーが用意した洋服に身を包んでいたのだ。ところが背広もズボンもだぶだぶ、大きすぎて似合つていない。ズボンなどは、片方に二本の足が一緒に入つてしまふかとおもうほどだ。

「我々の、このたびの決意を知つていただきため、村田先生にお目にかけたいものがござります」  
聞多がそう言つと、五人は次々と懷剣を抜いた。

（また切腹きりふごつこか！）

村田は一瞬うんざりした。が、どうも様子が違う。

五人は自分の頭上に乗る髪を、根元からばつざりと切り落とし始めたのだ。

それから聞多が五人の髪を集めて三万の上に置き、

「村田先生のお陰で、志を果たすことが出来そうです。なにか御礼がしたいのですが、我々には何も差し上げるものがございません。せめてこれを記念に、村田先生に進呈いたしどうござります」

と、神妙に言って差し出した。

「ウム……」

村田は唸うなつた。

武士の最も大切なものを捨て去ったのだ。さすがの村田も、ほろりと来た。

「わかった。この髪は、お前らが無事帰るまで、わしが形見として預かっておいてやる」

「お願いいいたします」

「だから、しつかりやつてこい。そして無事帰つて来いよ」

若者の真剣な眼差しを見た村田は、酒もまわつて上機嫌だった。

春輔が突然、大声で歌い始めた。

「ますらをのゝはじをしのびてゆくたびは／すめらみくにのためとこそそれ／」

西洋人のような格好をするのは、恥ずかしくてならない。それでも行くのは、自分たちの密

航留学が、必ずや日本の将来のためになると信じているからだ、という意味である。  
村田は手を叩きながら、喜んだ。

「春輔。下手くそな歌だが気持ちはよく伝わつてくる」

「えつ、褒めてもろうちよるんじやろうか」

「うむ。褒めちよる、褒めちよる。放蕩書生でも本気になれば、その口からこぼれる言葉には、人の心を打つもんじやなあ」

春輔は村田にそう言われると、照れ臭そうに微笑んで、ペコリとお辞儀をした。

五人の本音を言えば、恥ずかしいどころの話ではない。密航が発覚したら、たちまち死が待つてゐる。それを考へると、足が硬直してしまふほどだ。  
しかし五人は武士である。武士ゆえに、「恐い」とは絶対に口に出せない。せいぜい恥かしいと、茶化して見せるくらいなのだ。

(12)

その夜、伊豆倉の一室に籠もつた聞多は、行灯の下で一通の手紙を懸命になつてしたためていた。五人を代表し、藩政府首脳部の毛利登人・橋崎八十郎・周布政之助・桂小五郎にあてた、

決別の手紙である。

「鞠<sup>くま</sup>故<sup>むすめ</sup>主<sup>し</sup>奉<sup>うけ</sup>り候<sup>ま</sup>…」

ひととおりの挨拶を述べた後、聞多はこれまでの放蕩を恥じ、今度こそ眞面目に学ぶとの決意を記した。

「定めてこれ迄<sup>ま</sup>放蕩無頼生事ゆえ、またも誤り候はんかと御疑心もこれあり候はんと愧<sup>き</sup>耻<sup>ぢ</sup>奉<sup>うけ</sup>り候。もはや確乎として不動候間、万々御安心是祈<sup>いの</sup>候」

それからガワーと交渉のすべ、一万両を担保に渡航費を作った経緯を説明した。

「男子立志、万里の波濤を凌ぎ、事業を期し候者、四千か五千の金に窮<sup>きゆう</sup>し候て、ついに果す事を得ず、不本懐事と存じ奉り候ゆえ、種々愚考つかまつり候ところ、米利堅へ注文の砲の引き当てとして壹万両あまり江戸邸にこれ有り候様子、かねがね承わり及び候事ゆえ、この金を永く借用致し、ぜひ宿志を遂げ候はんと決心つかまつり、五千金の談約諾つかまつり候て相頼み申し候」

一万両を担保にしたのは、何としても心苦しかった。追伸でも、ひたすらこの件について謝まつた。

「一百、幾重<sup>いくえい</sup>も金の義は不正の廉<sup>かど</sup>、恐れ入り候えども、飲色<sup>おと</sup>杯に遣い候訳にてもこれ無く、これ

（これが今生の別れになるかも知れぬ）

と考<sup>か</sup>えると、書けども、書けども聞多の思いは尽きることがなかつた。

それから五人はゲルスウイックというジャーデン・マジソン商会の日本支配人宅に移つた。そしてガワーの案内で小船に乗り込み、沖に停泊するキロセツキ号という蒸氣船に近づいて行つた。

東の空が、うつすらと明るくなり始めていた。  
横浜の町が、遠ざかつてゆく。

「幕府の役人が船中に出張して来ました。しばらくの間、石炭庫に隠れて下さい」

ガワーは五人をキロセツキ号の石炭庫に閉じ込めると、帰つて行つた。灯り一つない闇の中で五人は息をひそめ、時が経つのをひたすら待つた。やがて船は、轟音を立てて港を出た。ものすごい振動が石炭庫にも伝わつて來た。

「もうよかろう」

聞多の一声で、五人は外に出た。甲板に立つと、いやといふほど照りつける夏の日差しがま

ぶしかつた。

井上聞多（二十九歳）

遠藤謹助（二十八歳）

山尾庸造（二十七歳）

伊藤春輔（二十三歳）

野村弥吉（二十一歳）

彼ら（年齢順、数え年）を乗せた船は一路、上海へと向かつた。

## 第四章

（1）

五人を乗せたキロセツキ号は、横浜を出てから五日目に上海に到着した。

この年は、清朝中国の元号で言うと「同治二年」である。

ちょうど二十年前、アヘン戦争でイギリスに敗れた中国は、南京条約を締結し、上海など五つの港を開かされた。そこにイギリスは領事を置き、貿易の主導権を握った。さらに上海には中国の法律が及ばない租界地が生まれ、植民地化が進んでいた。

上海港は、黄浦江に面している。大小さまざまな歐米列強の蒸気船や帆船で埋め尽くされた港内へと、キロセツキ号は進んだ。

その数は百隻以上はある。海賊に備え、普通の商船にも大砲が積まれている。

（わが藩は、こんな連中と砲火を交えようとしちよるのか）

唚然としながら庸造は、甲板からその光景を眺めていた。するとすぐ後ろで、聞多と春輔が何やら言い争っているのが聞こえて來た。

「春輔、僕は間違つとつた。こねえな船が一度に攻めかかって來たら、とても防御はできません。

これからは攘夷を捨てて、開国じや、開国

「日本を出てわざか数日で、おのれの攘夷の初志を変えるとは…。君は男子として恥かしいとは思わぬのか

「思わぬ！」

「何つ」

「ええか、僕らが攘夷を実行しようと思うたのは、わが國家を維持するためじや。しかし今、海外の実況を見た僕は、國家を維持するため、攘夷が不可能だと断言する」

「あきれた奴じや。久坂さんに聞かせたら、烈火のごとく怒るじゃろ?」

「やかましい。いま、僕は攘夷を抜きにして開國の方針を立てなければ、日本の将来はないと悟つた。その上で断然前論を翻すのは、國家に尽くす男の本分じや。何の恥じるところがあろうか」

こんな会話を聞きながら、庸造は内心聞多の説に強く賛成していた。春輔もついに言い返せなくなつたようで、黙りこくつてしまつた。

たとえ、千万の精神論をこねくり回してみたところで、眼前に広がるこの光景を見たら、攘夷が可能だとは誰も言えまいと、庸造は思った。

早速聞多は、周布政之助に手紙を書いた。ちょうど日本に向かう船便があるというので、それに託そうというのだ。

「長州は攘夷論をやるが、これは大いに間違いである。物は実際に就いて眼を開かぬと大変な違算が起ころ」

という主旨である。後日、手紙を受け取つて一読した周布は、

「聞多め、上海に至つて早くも從来の所信を一変したか」と苦笑したといふ。

さて、上海に上陸した五人は、ガワーの紹介状を持つて、ジャーデン・マジソン商会の上海支店を訪れた。支店長はケセウイッキという大柄な男だ。応接室に通され、ソファーに腰かけた五人に向かい、ケセウイッキは何やら英語で問い合わせて来た。

五人は前年、幕府が出版した手帳ほどの小さな英和辞書一冊を持っているだけで、英語が解せない。

弥吉だけは箱館で英語を学んだ経験はあるが、さりとて通訳が出来るほどの実力はなかった。それでも弥吉はケセウイッキが、どうも渡航の目的を尋ねているのだと理解する。そこで、

聞多の上着の端を引っぱり、耳元で囁いた。

「聞多さん、我々がなにを学びに行きたいのかを聞いとるようじや」

聞多は大きく頷き、

「ネビゲーション！」

と、自信たっぷりな態度で答えた。聞多がただ一つ覚えて来た英単語であった。

「ネビゲーション！」

ケセウイツキも、ようやく意思が通じたかと、明るい表情になつた。

もちろん聞多は、海軍を学ぶためと言つたつもりだつた。しかし、「ネイビー（海軍）」と

「ネ（ナ）ビゲーション（航海術）」を間違つたことに、気づいてはいなかつた。しかし、「ネイビー（海軍）」と「ネビゲーション」が留学目的であると理解したケセウイツキは、これからロンドンに帰る二隻の帆船に、五人を分乗させることにした。ケセウイツキは、水夫見習いをするのが一番理解が早いだろうと、親切にも両船長にネビゲーションの実地訓練を依頼した。

こうして聞多と春輔はペガサス号（三百トン）に、庸造・弥吉・謹助はホワイト・アッダード号（五百トン）に、それぞれ乗り込むことになつた。

## (2)

五人がひそかにロンドンに向けて旅立つたというのは、繰り返し言うようだが、長州藩の「裏」の顔である。

「表」の顔はと言えど、この時期の長州藩は日本で最も激しく外國勢力の排撃に燃えている、攘夷の総本山だ。

上洛した将軍家茂は、長州藩を中心とする攘夷派勢力から攻め立てられたあげく、

「五月十日をもつて攘夷実行の期限とする」

と、天皇の御前で誓約させられた。

もつとも、幕府が出した攘夷の命令は、外國が攻撃的態度に出た場合のみ、攘夷を行つても良いという条件付きである。

ところが長州藩はこの条件の部分を無視し、五月十日から攘夷を断行すると、藩内に布告した。

戦場に定められたのは、九州と本州の間に横たわる関門海峡で、長州側の下関（馬関）沿岸には砲台が築かれた。

このため、藩主一門の毛利能登（厚狭毛利）は下関の防御物奉行を命じられ、その指揮下に

は六百五十人もの軍勢が配備された。

さらに、久坂玄瑞や入江九一など、松陰門下生をリーダーとする数十人の過激な一団が京から下関に帰つて来る。この中には、土佐や久留米など、諸国の脱藩浪士たちもいた。

彼らは、青年公卿の中山忠光を擁していた。忠光はただ、

「一度、この手で攘夷を実行してみたい」

という一念で京を脱し、下関に姿を現したという程の熱烈な攘夷論者だ。

忠光一派は下関の光明寺に陣取つたので、光明寺党と呼ばれた。

光明寺党は、藩がイギリスから購入した壬戌丸の艦首に付いていた女神像を切り落とした。

そしてこれを本堂の階段下に置き、出入りの際に蹴飛ばしたりして、士気を高めた。

そうしているうちに、五月十日がやつて來た。

この日深夜、潮待ちのため関門海峡に停泊中だったアメリカ商船ベンブローグ号は、近寄つて来た長州藩軍艦庚申丸に、突然砲撃された。毛利能登の制止を無視し、庚申丸に乗り込んでいたのは、久坂ら光明寺党の面々である。

驚いたベンブローグ号は、周防灘に逃れた。浪士のひとりが歎声を上げた。

「さまあみろ、これが日本の武士の大和魂じゃ。思い知つたか」

これが、長州藩の攘夷第一弾となつた。

続いて彼らは二十三日にフランス艦ヤンシャン号を、二十六日にオランダ艦メジューサ号を、それぞれ下関の砲台から砲撃して氣炎を上げる。

ところが六月一日になり、アメリカ軍艦ワイオミング号が海峡に襲来。約一時間の戦闘の末、下関亀山の砲台は破壊され、癸亥丸は大破、庚申丸は撃沈、壬戌丸は大破撃沈されるといふ甚大な被害を受けてしまう。

さらに六月五日には、フランス軍艦セミラミスとタンクレードが、下関の前田砲台を艦砲射撃で容赦なく攻撃した。その上、三百数十人のフランス兵はボートを使って上陸し、砲台を破壊して、前田村の民家に火を放ち去つた。

もはや、装備の圧倒的な差は誰の目にも明らかだつた。

戦国さながらの甲冑に身を固めた藩士たちは、前田村に駆けつけようとしたが、軍艦から砲撃されるや、震え上がつて逃げ出した。

勇ましくも攘夷を断行した長州藩は、こうして攻めから守りへと、その方針転換を余儀なくされる。

数々の敗報に、藩主父子は激怒した。

藩主父子は、お気に入りの高杉晋作を御前に呼び出し、

「何か策はないか」

と、下関防御の立て直し策につき意見を求めた。

晋作は即座に、答えた。  
「願わくば、馬闘のことは臣にお任せ下さい。臣に一策あり。有志の士を募つて一隊を創立し、奇兵隊と名付けます」

奇兵隊とは、藩の正規軍に対するゲリラ軍だ。

戦いは正道だけでは、勝利できない。さりとて脇や背後から攻める奇道だけでも、勝利できない。

正と奇、両方を上手く使い分ける呼吸を知る者のみが、勝利を手にすることができるのだ。喜んだ藩主は、晋作に下関の防御を任せた。庶民をも動員した奇兵隊が結成されたのは、この時である。

(3)

長州藩が攘夷断行という暴走を始めたのは、五人が横浜を発つ二日前だ。

数日後には上海の英字新聞にも、攘夷断行が報じられた。しかし、英語が解せない五人は、故郷が陥っている苦境を知らない。

聞多と春輔を乗せたペガサス号は、五月下旬になり上海を発った。

続いて六月に入り、庸造・弥吉・謹助を乗せたホワイト・アッダー号が、上海を発った。

インド洋にいたるまでは、大小さまざまな島があり、風の方位も時々変わる。

そのたびに帆の方向を変更する必要があつたのだが、水夫頭は庸造・弥吉・謹助の三人に、

「あの帆綱を引っ張れ！」

「この帆綱を引っ張れ！」

と、容赦なく命令を飛ばした。

「僕たちは上客じやねえのか。なんで、こんなにこき使われるんじやろう」

「分からん。分からんが、あの水夫頭には、僕たち三人がかりでも太刀打ち出来んぞ」

確かに、赤ひげを生やした水夫頭は、屈強な体格で、まるで御伽噺に出てくる鬼のように見えた。

ぶつぶつ言いながら三人で作業を終えると今度は、身振り手振りを交えながら、

「ジャニー、次は甲板の掃除だ！」

と、怒鳴られる。ジャーニーとは、ジャパニーズを蔑視した呼び方だ。

ふて腐れた弥吉が無視していると、水夫頭は鞭で思いきり弥吉の尻を叩いた。

「ぎやあ」

弥吉は悲鳴を上げ、いまにも泣きそうである。

しかも、三人に与えられる食事もひどい。干からびたビスケットと、固い塩漬けの牛肉、茶

などはいたつて粗末なブリキ缶に入れられ、赤色の最下等の砂糖が混ぜられた。

水夫までが三人を軽蔑して、

「ジャーニー、ジャーニー」

とこき使う始末だ。

一体なぜこんな目に遭うのか。はじめのうちは分からなかつたが、ある日、弥吉がつぶやいた。

「ひょつとしたら…我々は、水夫見習いと思われているのではないか」

「なるほど、そうかも知れぬな。いや、そうに違いない」

庸造は、頷いた。どこで、どう間違つてしまつたのか。文句を言いに行きたいところだが、その言い方が分からぬのが悲しい。

謹助はこのところ体調を崩しており、ぐつたりと横になりながら一人の会話に耳を傾けていた。

船は入港税を節約するため、どこにも寄港することなく、ひたすらondonを目標として走り続けた。このため飲料水にも不自由し、甲板に水桶を並べて雨水を集めた。

インド洋を過ぎ、マダガスカルより喜望峰に向かうころ、特に風浪が激しくなつた。

小さな帆船は一片の木の葉のごとく、漂蕩した。

まるで、高い山を一気呵成に駆け登るように、巨大な浪に上る。そして、そこから下るには深淵に沈入するかのような錯覚に陥つた。三人にとり、それはあまりにも異常な体験であった。

喜望峰を大きく迂回した船が、フリア岬を過ぎると、海は大分穏やかになつた。さらに船がヨーロッパに近づくにつれ、大型帆船や蒸気船とそれ違つことが多くなつた。

「やはり船は性能だけではないな。西洋の連中は、船の姿形の美しさをも競い合うと聞いたことがある」

ある時、庸造は眼前を通る、真っ白な帆をいっぱいに張った船に見とれながら、そんなことを考えていた。

(4)

同じころ、ペガサス号の船上でも、聞多と春輔が水夫見習いとしてこき使われ、苦闘していた。

二人は暇を見つけては、携えて来た小さな英和辞典を取り出して、船員のしゃべる言葉の意味を理解しようとした。

そしてある時、自分たちの渡航目的は、ネビゲーションではなく、ネイビーであると気づいた。

早速、聞多と春輔は、

「ネビゲーション、ノー、ネイビー、ノー、ネビゲーション」

と水夫頭に文句を言つたが、

「ネビゲーション！」

と、言い返されるだけで、埒<sup>らち</sup>があかない。それ以上、何と説明していいのか分からず、退散するしかなかつた。

ある夜、二人は甲板上に伏せられた端艇（カッター）の上に腰掛け、しみじみと祖国の話をした。

星空<sup>ヒトツノシタ</sup>を見上げながら聞多が、

「我々の同志は攘夷<sup>じょうい</sup>を実行すると熱中しちよつたが、近ごろはどねえな形勢じゃろうか。あるいは外国船を砲撃してしまって、危急の状況に陥つとるのではないか」

と言つた。

その途端、張り詰めた緊張の糸がぶつりと切れたようで、春輔がおいおいと泣き始めた。聞多は一応、

「こらこら、泣くな」

と慰めたが、本当は自身が泣きたいくらいであった。

最も困難をきわめたのは、劣悪な食事のせいで、春輔が激しい下痢にかかった時だ。

小さな帆船だから、水夫用の便所など無い。船べりの横木に跨<sup>また</sup>がり用を足すのだが、風が強い時には波にさらわれる危険性が高い。

そんな時、聞多は春輔の身体を縄で縛つた。それから縄の端を、錨の上げ下げ用に立てた柱に結び付けて、からうじて安全を確保した。

強風の中、春輔は着物の裾をまくり、尻を出しながら、叫んだ。

「聞多、この恩は忘れぬぞ。僕が出世したら、必ず、必ず恩に報いるからな」

「分かつた、分かつた。いらぬことを考えず、早う済ませ」

「ますらをのゝはぢをしのびてゆくたびはゝすめらみくにのためとこそそれゝ」

春輔は出発前夜、村田蔵六に褒められた自慢の歌を口づさみながら、歯を食いしばって用を足した。

こうして、聞多と春輔を乗せた船は上海を出て四ヶ月と十一日後に、ようやくロンドンに到着した。文久三年九月二十三日、太陽暦では一八六三年一月四日午前八時のことである。

乗組員はみな上陸し、聞多と春輔は船中に取り残された。

船長のボアーズは、

「後からジャーデン・マジソン商会から迎えの者が来る。それまでしばらく船中で待つておれ」と、指示して船から出て行つた。

そこで二人は、船室で寝つ転がつて迎えを待つが、正午になつても誰も来る気配がない。朝食も食べていない一人は、やがて空腹に耐えられなくなってきた。

「おい、春輔。僕は船に残つてゐるから、君は食べ物を買って来てくれ」

「こんな空腹を我慢して歩くことは、僕にはできない。君が行つて、買って来てくれ」

そのうち、同船の一等士官がひとり、忘れ物を取りに、船に戻つて來た。

聞多は彼を呼び止め、身振り、手振りを交えて、

「食事のため上陸したいが、方向が分からぬから教えて欲しい」と、泣き出しそうな表情で懇願した。

聞多は大喜びで立ち上がり振返ると、春輔は大胆にもすでに熟睡していた。

(5)

食糧を手に入れるため、士官に従い、船を出た聞多は、眼前に広がる光景に思わず息を呑んだ。

港には蒸氣船や帆船が数限りなく停泊し、海面は立錐の余地もない。

市街には三層、五層から成る建物が並び、汽車は諸方に快走し、工場からは黒煙が昇る。丘の中腹には色とりどりの洋館が軒を並べる。人々の往来もまた、激しい。

それは聞多の想像を、遙かに上回る程の巨大文明だった。

「攘夷はやはり不可能だ」

あらためて、聞多は痛感した。

イギリスは、ビクトリア朝時代の最盛期である。

産業革命は頂点に達し、「鉄と石炭の時代」「鉄道の時代」と呼ばれ、人々の生活も急速に近代化されつつあった。

聞多は雜踏の中で迷つては大変と、手帳に道筋方向をメモしながら、士官の後ろからついて歩いた。メモするのに気をとられ、人にぶつかっては怒鳴られたりしながら、ようやく市街にある一軒の粗末な食堂にたどり着いた。

塩漬けの豚肉と乾パン、それに半熟卵という船員用の食事で、聞多はようやく空腹を満たした。そして、船で待つ春輔のため、同じものをもう一人前注文して包んでもらつた。

帰路はメモをもとに、一人で逆方向を歩いたが、あちらこちらで道に迷い、ついには税関の門内に入り込んでしまつた。

役人は浮浪者まがいの不法侵入者を見つけて怒鳴り散らしたが、聞多はただおろおろと、その場に立ち尽くすしかなかつた。

「ペガサス、ペガサス」

聞多は必死で船の名を言い、道に迷つてることを告げた。ようやく役人も理解したらしく、人を付けて聞多を、港に停泊するペガサス号まで送り届けてくれた。

「ペガサス、ペガサス」

聞多が帰つて来たのに気づいた春輔は、船室から飛び出して来て、媚びるような目をしながら尋ねた。

「食べ物はどうしました？」

「ほれ。少しは人の苦労も考えろ」

「うまい、うまい」

渡された食糧を、春輔はむさぼるようにして平らげていった。

「うまい、うまい」

よほど、腹が減つていたらしい。

午後二時ころになり、ようやくジャーデン・マジソン商会から迎えの者が一人やつて來た。聞多と春輔は大喜びで、その者に導かれて、まず汽車というものに乗つた。

「春輔、こ、これが蒸氣で走る機関車か」

「まるで疾風か、矢のような」

「この国では三十年も前から、機関車が走つてゐるらしい。やはり、攘夷は無理じやろうが」

「分かった、分かった。聞多の言うとおりじゃ」

今度は春輔も、あつさりと甲を脱いだ。

二人が連れて行かれたのは、アメリカン・スクエアと呼ばれる市街の一角だ。そこには数々

の王室の歴史を秘めたロンドン塔やロンドン・ブリッジといった著名な名所がある。

ホテルに入ると、ロビーには庸造・弥吉・謹助の三人が待ち構えていた。ホワイト・アッダ  
ー号で上海を発つた彼らは、数日前にロンドンに到着していたのだ。

五人は抱き合い、四ヶ月ぶりの再会を喜び合つた。五人共、生きて異国の土を踏んでいるの  
が、奇跡のように感じられて仕方がなかつた。

「ところで聞多さん」

弥吉が尋ねた。

「あんた、航海の目的を異人に何と説明したんじや」

「本当にすまぬ、ネビゲーションと言つてしまつた」

あとは、大笑いになつた。

ロンドンに到着したばかりの五人の世話をしたのは、ジャーデン・マジソン商会の支配人ヒ  
ューエン・マジソンだつた。彼は創業者の甥に当たる。

マジソンは五人の汚れきつた洋服を脱がせ、理髪、入浴させた後、身体の寸法を測らせた。  
採寸した洋服屋は、彼らがまだ十代前半の少年と思つたようだ、

「君たち、おとなしくて感心だね」

と、しきりと褒めてくれた。それほど、ヨーロッパの大都会の中では、彼らは小さく、幼く  
見えた。

三日後、新しい洋服がホテルに届けられた。

「ちょうどいや、ぴつたりじゃ。これなら恥ずかしゅうないわ」

「これで、大手を振つて街に繰り出すことが出来る」

五人は清々しい気分で、新しく始まる生活に胸を膨らませていた。

(6)

ジャーデン・マジソン商会の斡旋により、五人はプロヴォスト街のアレキサンダー・ウイリ  
アム・ウイリアムソン博士の家に、寄宿することになる。それは、プリムローズ・ヒル駅に近  
い、ごく小さな家だつた。

ウイリアムソン博士はユニバーシティ・カレッジ・オブ・ロンドンことUCLの著名な化  
学教授だ。

英國學士院会員であり、ロンドン化学協会の会長という要職に在つた、学界の長老的存在で  
ある。偏見の無い、國際的な視野の持ち主としても知られていた。

それになによりも、ウイリアムソン博士とその妻エマ・キャサリンは、学ぶことに対する情熱を持つ若者が大好きだった。だからねに、学生たちからも慕われていた。

「あの若者たちは、祖国の発展のため、命をかけて学ぼうとする尊い心の持ち主だ。イギリスの上流階級のマナーを教えよう」

東洋の見知らぬ国から、國禁を犯して渡つて来た若者に、ウイリアムソン博士は愛情深く接した。

五人に与えられた当面の課題は、英語を学び、英書を読めるようになることである。

ウイリアムソン博士とその妻は、日常の会話はもちろん、挨拶の仕方、フォーマルやナイフの使い方、靴の履き方など、ひとつひとつ丁寧に教えてくれた。

五人もまた、まるで乾いた砂が水を吸收するかのように、それらを着実に自分のものにしていった。

博士は驚きを禁じえない、という表情で語った。

「私は多くの国の学生たちを見て来ましたが、あなたたちほど、素直に異文化を理解する力を備えた学生を見たのは初めてです」

間もなく五人の英語力は、博士夫妻に質問しながら、辞書を片手に英字新聞を読み解くまで

に上達した。五人は特に日本関係の記事には注目し、それらが出ていると、むさぼるようにして読んだ。

ある日、イギリスが艦隊を鹿児島湾に進め、薩摩藩が開戦をおよんだという記事が出た。生麦事件の賠償問題が、こじれた結果であるという。

それを読んだ弥吉が、呆れ顔で言つた。

「われわれが日本を出発するころが、攘夷寒行の期限じゃつた。薩摩はついに実行したんじゃなかあ。無謀じやのう」

「しかし、わが藩は薩摩に対し、日頃から激しい対抗意識を抱いとるから…」

「ならば」

「うん。おそらく、薩摩に負けまいとして、馬闘で開戦したに違いない」

「無謀なつ！」

弥吉が、吐き捨てるように言つた。

ところが数日後、薩摩藩よりもひと足早く、長州藩が攘夷を実行したのだという記事が出た。最初に新聞を読み終えた間多の顔は、青ざめていた。

「五月十日以降、わが藩は数度にわたって外国船を砲撃したらしい」「思つていたとおりじゃ」

他の四人も、新聞をのぞき込んだ。そこには関門海峡で砲撃される外国船のイラスト付きの記事が出ていた。

「しかし各国の海陸軍精銳には、もとよりかなつものではない。一時の敗北は深く憂うるに足らないが、このような無算の暴戦を続けていたら、大変なことになる」「連敗の結果、多額の賠償金を要求されるか、あるいは土地を割譲させられるか、どちらかは免かれないのでしょう」

春輔が肩を落として言った。

五人は、攘夷が無謀であると、なんとか祖国に伝えたいとおもつた。しかし、これ程離れていてはどう仕様もないというのもまた、厳しい現実であった。

(7)

マジソンはウイリアムソン博士と相談のうえ、五人をUCSL（ユニバーシティ・カレッジ・オブ・ロンドン）に入れるよう、取り計らってくれた。

若者の世話を焼くのが好きなウイリアムソン博士の暮らしは、つねに経済的には貧しかった。そして博士宅は、五人が住むにはあまりにも手狭だった。

そこで、イギリスの生活に慣れたころを見計らつて、マジソンは間多と庸造を、ガワー通り103番地にあるクーパーという画家の家に下宿させた。ここは、彼らが通うことになったUCSLと、目と鼻の先に位置していた。

(負けてなるものか)

(侮られてなるものか)

そんな思いを胸に秘めながら、左右に石造りのアパートが並ぶガワー通りを、五人は毎日歩いた。すれ違う市民たちは、初めて見る日本人の姿を珍しそうに眺めていた。

UCSLは法文学部と医学部の一学部からなっていた。学生数は両学部合わせて四百五十人ほど。一八二〇年代に設立され、人種、宗教、政見、男女の別なく、すべての人に門戸を開くという、強い教育理念を掲げていた。

ひとまず五人は、法文学部の方に聴講生の資格で入学することができた。聴講したい科目を選び、その都度、授業料を納める仕組みである。

五人は朝夕、下宿でウイリアムソン夫妻から英語と算術を学んだ。そして昼間は学校の実験

室で、ウイリアムソン博士の授業を受けた。

さらに五人は、そうした学習の合間をぬつて、ロンドン市街を積極的に歩き回った。

ゴシック様式の壮麗な国会議事堂や、世界中の文化遺産を集めた大英博物館はもちろん、図書館、上下水道、病院、公園、銀行、郵便局、劇場など、文明世界はどこに行つても五人に驚きと感動を与えた。

そうした繁栄の一方で、五人は貧しい労働者の群れに出会うこともあった。彼らは見すぼらしい衣服に身を包み、疲れきった表情で、とぼとぼと家路をたどっていた。

産業革命という時代の大きな波が著しい貧富の格差を生んでいたのもまた事実であった。だが五人は、巨大文明を追いかけるのが精一杯で、こうした社会の仕組みに目を向ける余裕はとても無かつた。

### (8)

西暦一八六四年一月二二日、五人はウイリアムソン博士に連れられ、市街を流れるテムズ川の北側にある、イングランド銀行を訪ねた。イギリスではコイン（硬貨）はロイヤル・ミント（造幣局）で、紙幣はイングランド銀行で作られていた。そのいずれの技術もが、「世界一」と

の評判であった。

宮殿のような、石造りのいかめしい建物に入ると、ウイリアムソン博士は受付で五人のことを、「日本から留学して来ている、貴族の子弟たちだ。内部を見学させてもらいたい」と、来意を告げた。

「ダイミョーですね！」

受付にいた無愛想な男が、途端に嬉々とした表情になり、なにやら上役と相談し始めた。弥吉があわてて、隣にいた聞多に、

「おい、おい、僕らは殿様になつてしまふとるぞ」と囁くと、

「まあええ。どうせ、分かりやあせんじやろう」

聞多はいつものように、余裕たっぷりに構えていた。

それにしても「大名」と言えば、日本の名士の代名詞として、ロンドンでも通用するのが、聞多には面白く感じられた。

受付の男も、その上役も、初めて見る日本人に好奇の視線を容赦なく送り続けながら、一片

の紙きれを差し出した。

「では、ここにサインを…」

「それを見て、五人はびっくりした。一千ポンド札だつたからだ。大金である。

「これだけあれば、だいぶ暮らし向きが楽になるぞ」

「く、くれるんかのう」

五人の様子を、微笑みながら眺めていたウイリアムソン博士は、

「特別な来賓が来た時、記念に一千ポンド札に署名してもらう習慣があるのだ。君たちの名前も、永くイギリンド銀行に保管されるであろう」

と、説明してくれた。

「なんじや」

五人は少し落胆したが、それでも特別な来賓扱いをされて、まんざら悪い気もしなかつた。

それから五人は職員に案内され、造幣の工程を見学した。

巨大な車輪の付いた機械が何台も並び、轟音を立てながら動いていた。そして、次々と真新しい紙幣が刷り上がっていた。

庸造は、以前ロシアのニコライエフスクで見た工場の光景を思い出していた。機械工業がこ

の文明を築き上げたのだと、あらためて感じた。

その隣に立つ謹助は、五人の中でも最も熱心であった。何かに憑かれたように、紙幣が印刷される過程を目で追っていた。

「出来上がったばかりの紙幣とは、なんとも美しいもんじやなあ」

謹助は、インクの臭いがする新札の束を、慈しむような目で眺めていた。その印刷の精巧さに心奪われた様子であつた。

「わが国の木版で刷る藩札との差はどうじや。こんな技術を早く取り入れて、新しい経済の制度を定めねばのう」

春輔も謹助の言葉に、しきりと頷いていた。

「この技術を持つて帰りたい。何とかせねばのう」

いつもは目立たない、おとなしい謹助が、出来上がったばかりの紙幣を見ながら、異常なほど興奮していた。

(9)

五人の中では多少英語が話せた弥吉は、ひとりで市街に出ることがあった。ロンドンに着い

て以来、弥吉が最も興味を示したのは、鉄道である。

イギリスの鉄道は西暦一八二五年九月二十七日、ストックトン・アンド・ダーリントン鉄道の開通式に始まる。この日、蒸気機関車を一目見ようという人達一万人もが、各地から詰め掛け、沿線一帯を埋め尽くしたという。それでも炭鉱や運河の付属物としての鉄道は存在したが、それは人や馬がけん引するトロッコのようなものだった。

さらに一八三〇年には、工業都市であるマンチエスターと、原料入荷と製品出荷の港であるリヴァプールが公営鉄道で結ばれる。産業革命の波に乗ったこの鉄道は、予想を遥かに上回る収益を生んだ。これにより鉄道企業家たちによる、各地の鉄道建設に拍車がかかった。

だが、鉄道はロンドン都心部には、なかなか乗り入れては来なかつた。多額の投資を必要とするため、投資家たちは誰も手を出さなかつたのである。

地方からロンドンに通じる鉄道は、すべて都心から離れた場所までしか通じていなかつた。たとえば、一八三八年に設けられたグレイト・ウェスタン鉄道のペディントン駅は、都心から六キロメートル以上離れていた。よつて人々はそこから歩いたり、馬車に乗り換えたりして目的地まで向かわねばならなかつたのだ。

こうした問題を解決するため、都心部の地下に鉄道を走らせる案が実行に移される。

それが実現したのが、長州藩の五人がロンドンに到着した一八六三年の一月十日だ。この日、市街ビショップス・ロードとファリドンを結ぶ約六キロメートルの地下鉄が開通したのだ。

この、世界最初の公共地下鉄が画期的だつたのは、すべての列車に三等車を連結したことだ。当時は労働者階級のための三等車連結を嫌う鉄道会社が多かつた。このため、創設当初から地下鉄は人気が高く、十五分おきといつ過密ダイヤを組んでも、乗客をさばき切れないのであつた。

弥吉はこの日も三等車の切符を買い、何度目かの地下鉄に乗つていた。地下鉄に揺られながら、これから自分が何をするべきかを考えるのが、弥吉は好きだつた。

（いくらすぐれた軍隊をもつっていても、それを適当な時に、適当な場所へと移動出来ねば、十分な効果を挙げることは出来ない。わが国の交通事情は、ひどいものだ。なんとかしなければ……）ちなみに、そのころの地下鉄は蒸気運転だつた。トンネルの所々には空への開放部分が造られており、そこで懸命に蒸気圧を上げ、それ以外は火を焚かずに、ひたすら黙々と走るのである。

(10)

授業を終えて帰ろうとしていた庸造は、UCLの正門を出たところで、後ろから弥吉に声をかけられた。弥吉は歩きながら、サンドウイッチを頬ばり言つた。

「山尾さん、僕には分かってきたぞ」

「何がじや」

「僕はこれまで、武力が乏しいゆえに、日本は列強の侮りを受けたとばかり思つていた」

「うむ。松陰先生も、高杉さんや久坂さんも、皆、そのように言うとつたのう。ともかく武力を

強化することじやと」

「しかし、どうやら、そうじやないようですねあ」

「うむ……」

庸造は、おそらく弥吉も自分と同じことを考えてゐるに違ひないと思つた。

「日本には軍事力以前に、文明が無いんじや。だから列強は侮つてかかつたんじや。貨幣もろくに作れん、鉄道も無い、そんな国がいくら軍事力だけを強化しても、列強は対等な国だとは絶対に認めないじやろう」

「弥吉！ 寒は僕も同じことを考ふとつた。この国を見とつたら、武力だけで対抗しても、どねえ

にもならん」ということが、よく分かる」

「そりですか！」

「弥吉は嬉しそうに、庸造を見た。庸造が初めて見る、弥吉の素直な笑顔だった。

その夜、弥吉と庸造は他の三人に、みずから考えを示して、意見を求めた。

腕組みをして、じつと弥吉の話を聞いていた聞多が言つた。

「我々は藩から、エグレスで海軍の技術を学べと命ぜられた。しかし、弥吉や庸造の言うとおり

じや。皆が皆、兵学に進むのは適当ではないと思つ」

この一言で、それまで沈黙していた春輔と謹助の表情が、ぱつと明るくなつた。

「僕たちが生きた器械になつて持ち帰らねばならないのは、この文明じや」

「そりや、文明を持ち帰つて、わが国に広めよう。それが眞の忠義というものではないか」

五人の心のどこかにあつた、藩命を果たしていないといふ負い目が、この夜、一気に吹つ飛んでいった。

(11)

攘夷期限の文久三年五月十日以来、関門海峡を封鎖され、貿易の不利益を被つた欧米列強は、

長州藩を攻撃する準備を進めていた。

『タイムズ』紙上に、

「四つの強国が、一、二の日本の大名を徵罰する最後の協議を行つてゐる」

という、衝擊的な見出しで始まる記事が掲載されたのは、西暦一八六三年十一月二十一日のことである。

大名とはもちろん、長州藩毛利家のことだ。そして四つの国とは、イギリス・アメリカ・フランス・オランダのことである。

ここに来て、聞多の心配は頂点に達する。

聞多は他の四人に、

「僕たちが、外国でいくら研鑽を積んだところで、祖国が滅んでしまつたら、身につけた技術を活用させる場所が無いとはおもわんか。しかも、四カ国が束になり、襲いかかつて来るといふのだぞ」

と、激しい口調で訴えた。

「何が言いたいんじや、聞多さん」

弥吉がやや冷たく問う。

「僕は、この巨大な西洋文明を知らず、戦いを挑み続けるわが藩を説得し、無謀な攘夷を止めさせん。そうしなければ、わが藩は焦土と化して滅びるに違ひない」

「しかし、どうやって知らせるのか」

「直ちに留学を切り上げ、帰国するしかあるまい」

五人の誰もが、心に引っ掛かっていた問題だつた。

「いや、それは違う」

弥吉は、強い口調でそう言いながら、頭を振つた。

「何が違うんじや。我々だけが異国の地で生き延びても、殿に対して申し訳が立たんと思わんのか」

弥吉に食つてかかったのは、春輔だった。

「我々が何の技術も身につけず、このまま帰国したら、それこそ激励して送り出してくれた殿の期待を裏切るものではないか」

弥吉も、一步も引き下がらうとしない。いまにも殴り合いのケンカが始まリそうな、険悪な空気が漂つた。

確かに、どちらの言い分にも理があつた。

言い争ったところで無意味だと感じた聞多が、きつぱりと言った。

「よし、分かった。僕と共に帰国し、藩政府を説得してくれるのは誰だ。一人でいい」

「僕が行こう」

春輔が、名乗りを上げた。

「三人は、ロンドンに残るのだな」

庸造が頷いた。

弥吉も、謹助も頷いた。

「では、僕は春輔と共に帰国する。明朝、マジソンに船便の手配を頼むつもりじゃ。君たちは僕らの分までしつかり学んで、将来に備えて欲しい。頼む！」

そう言うと、聞多は三人に向かって頭を下げた。

「しかと引き受けた。君たちの説得が成功することを祈つちよる」

庸造は思わず、聞多の手を握りしめた。

聞多は微笑みながら、庸造の手を握り返した。

庸造は聞多から、留学の話を持ちかけられた夜のことを思い出していた。

（生きた器械になれんかったのう。無念じやろうのう）

何とも言えない複雑な思いが庸造の胸を横切った。

「もし万が一の事態になつたら、我々五人がロンドンで学んどつた事実は、抹消されてしまうに違ひない。それはあまりにも残念じや。いまから五人で証<sup>あかし</sup>を残すため、フォトグラフを写しに行かんか」

聞多が提案した。

「よし！ひとつ奮発するか」

写真撮影は高価なため、ロンドンに着いて以来、誰も、一枚も撮っていない。

五人はガワー通りにあるスタジオに足を運んだ。神経質<sup>あわび</sup>そうな、瘦せた初老の<sup>あおじ</sup>主<sup>おも</sup>がいるスタジオだ。

初めての体験に緊張し、戸惑う五人に、主は、

「君はここに座つて」

「君はここで立つて、ポケットに手を突っ込んで」

と、無表情のまま細かい指示を出した。こうして一枚の写真が撮影された。

後日、手札大で五枚焼いてもらって、それぞれが大切に持つことになった。

そして聞多と春輔は出来上つたばかりの写真を胸に、ロンドンを発つて行つた。

## 第五章

(1)

聞多と春輔がロンドンを去つてから一カ月が過ぎた。

相変わらず新聞は、長州藩の外国船砲撃を報じ、この藩がいかに無謀で野蛮であるかを宣伝し続けている。それが、庸造・弥吉・謹助には悔しくてならない。

いつもは好意的に近寄つて来るロンドン大学の学生たちも、三人が「長州」の出身であると知るや、何か言いたげな、複雑な表情を見せるようになつた。

西暦一八六四年六月のある日のこと。三人はウイリアムソン博士に、

「君たちにぜひとも会いたい、という私の知人がいる。彼は当局にも顔がきくから、一度会つてみてはどうか」

と、勧められた。

「だつ、大丈夫でしょうか」

謹助が尋ねた。

幕府からすれば三人はお尋ね者だ。面識の無い者にあらためて会うとなれば、警戒心が強ま

る。そこで、春輔が西洋の知識を身につけたロンドンへ向かうとしたのである。そこで、春輔が西洋の知識を身につけたロンドンへ向かうとしたのである。そこで、春輔が西洋の知識を身につけたロンドンへ向かうとしたのである。

「どうぞお入りなさい。おまんこでござりません」

「おまんこでござりません」

るの無理もない。

「大丈夫さ」

ウイリアムソン博士が言うので、三人はその申し出を受けることにした。

数日後、三人が住むガワー通りのアパートに、ひとりのイギリス人紳士が訪ねて来た。レジナルド・ラッセルという。彼は自己紹介の中で、三年ほど日本の居留地に滞在したことがあると言つた。

そして、陰悪になつてゐる長州藩とイギリスの関係を改善するため、その現状について話を聞かせて欲しいとも言つた。

「自分たちは応用科学と、自國に役立つ技術と、ヨーロッパの言葉を学ぶため、ここにいるので

す」

年長の庸造が、ロンドンに滞在する目的を説明した。すると、

「では、長州候がアメリカ・オランダ・フランスの船を砲撃したのはなぜですか」

と、すばり一番の問題点を突いて來た。そんな開明的な主君がなぜ、外国船を砲撃するのだと、ラッセルは首をかしげてみせた。

「それは……」

庸造は一瞬ごもつたが、この際、すべてを話して、イギリス側に理解者を作つておくのも悪くないとthoughtた。

庸造が弥吉と謹助に目で同意を求めるといふと、一人とも頷いた。

「我々の主君は日本の繁榮を願つて、西洋列強の船を砲撃するという非常手段に出たのです」

「繁榮を願つて？」

言つてゐることが矛盾していると思つたのか、ラッセルは首を傾げた。

「眞の目的は、不正な大君タケイ（將軍）ガバメント政府（幕府）を打ち負かし、日本に平和と秩序を取り戻すことです」

「大君政府は不正なのですか」

「ええ、日本の正当な主催者はミカドなのです。ミカドが大君に奪われた権力を取り戻せたら、日本は息を吹き返すことが出来ると思ひます。そのため有力大名たちの多くは、大君と西洋列強の間が不和になるよう、願つてゐるのです」

「つまり、そうなると大君の力が弱まり、その間にミカドが復權出来るわけですね」

「そのとおりです。だから西洋の諸国も、これからはミカドを眞の皇帝と認め、条約などもすべてミカドと直接結んでいただきたいのです」

「大君政府は、貿易の利益もすべて独占しているのですが、本当ですか」

「本當です。ミカドと直接条約が結ばれれば、貿易の利益は日本のあらゆる階級、あらゆる人々に行き渡ると想います」

「では、どうすれば我々はミカドと条約が結べるのでしょうか」

「そう尋ねられると、またもや庸造は言葉に詰まってしまった。すると、それまで黙つて聞いていた弥吉が、横から助け舟を出してくれた。

「我々の一存では答えられませんが、西洋諸国の公使が、直接京都にミカドを訪ね、話し合つてもらうよりほかは、手段が無いと思われます」

「よく分かりました。開明的な長州侯が西洋諸国の船を砲撃するのは、単なるパフォーマンスだと考へて良いのですね」

「そのとおりです」

ラッセルは、すべてを理解したようで満足げにはほ笑んでみせた。

「あなたの国の封建制が改正され、自由な貿易体制が敷かれる日が訪れるのを、私は心から祈っています」

「そう言つて席を立つたラッセルと、二人は固い握手を交わして別れた。

たつた一人とはいえイギリス人に、自分たちの故郷が決して野蛮な国ではないと理解させただけでも、庸造は何やら肩の荷が下りたような気がしていた。

数日後、ラッセルは三人から聴取した話を文書にまとめ、イギリス外務省に提出した。

文書は当局の関係者たちの間で、熱心に読まれた。そして、長州藩暴走の真意は、少しずつ、イギリス側にも理解されるようになつていった。

## (2)

西暦一八六五年六月二日、水曜日の未明、イギリス・サウサンプトン港に、蒸気船デビル号が錨を下ろした。

船には、薩摩藩がひそかに送り込んだ視察員四名と留学生十五名が乗つていた。  
視察員は、新納刑部・松木弘安・五代才助・堀壯十郎。

留学生は、町田民部・畠山丈之助・村橋直衛・名越平馬・市来勘十郎・中村宗見・田中静洲・東郷愛之進・鮫島誠蔵・吉田巳一・森金之丞・町田申四郎・町田清藏・磯永彥輔・高見弥一。

一行はその日の夜、鉄道でロンドンに入り、ケンジントン公園に面したホテルに投宿した。

翌日早朝から、彼らは現地の英国人教師らと、今後の学習スケジュールを立てたりした。その結果、二、三ヶ月の間、勉学に都合のいいアパートを借りて、まずは語学を身につけようとすることになった。そして翌日には、ペースウォーター街の一画にあるフラットに新しい宿舎を得て、引き移った。

明日から授業が始まるという、六月二十六日、日曜日の午後のこと。  
一行の世話をしていた英国人ホームとグラバーが、薩摩人にとってただならぬ話を持ち込んで来た。

「昨日、ここからの帰途、三人の日本人に出会いました」

「えっ？ 日本人が」

「我々の他に、このロンドンに日本人がいるのか？」

「一行は一様に信じられない、といった顔をした。

「そんな馬鹿な」

と、吐き捨てるように言う者もいた。

彼らは自分たち薩摩人こそが、イギリスで学ぶ一番最初の日本人になると考へ、この危険な旅を続けて来たのだ。一番目ならば、彼らをここまで支え続けて来た誇りと功名心が、打ち砕かれてしまった。

かれててしまう。

だが、そんな幼稚な意地は、ホームには理解出来なかつたようだ。さらに驚かせてやろうと、楽しそうに話を続けた。

「ところが、実は今日も同じ三人に会つたのです。つい先ほど、ここに来る途中で」

「日本の、どこの者でごわすか」

「確か、長州とか」

長州と聞いて、薩摩の留学生たちの間に、一瞬緊張がみなぎつた。

五代が、乗り出すよにして言つた。

「ぜひ、その長州の留学生と話しがしてみたい。なんとか、会えませんか」

「分かりました。今度会つたら、話してみましよう」

一週間後の日曜日、一行が希望した面談は実現することになった。午後六時ころ、長州藩留学生の三人が、薩摩藩留学生の宿舎を訪ねて來たのだ。

(3)

三人は、恐る恐る扉を開けて部屋の中の様子をうかがつた。するとそこには、十九人の薩

摩藩の若者が勢揃いをしていた。

それぞれ自己紹介をした後、庸造が薩摩人たちに説明を始めた。

「我々五人は文久三年の五月、横浜からまず上海へ渡りました。それからさらに外国船に乗り、四ヶ月半かけて、このロンドンにたどり着いた次第です」

それから、ウイリアムソン博士の世話を受けたこと、UCLで学んでいることなどを、話した。

はじめはライバル意識を剥き出しにしていた薩摩人だったが、やがて興味深そうに庸造たちの話に耳を傾けるようになつていた。

「五人と言わると、まだ他にも」

「実は昨年、井上聞多と伊藤春輔の二人が帰国いたしました」

「そこで、謹助が待ちきれないといった様子で、

「わが故郷、長州のことをご存じではありませんか、なんでもいいのですが」と、尋ねた。

長州の情報を得るのが、この日、三人が薩摩人に会つた最大の目的なのだ。

「その件に関してですが、率直に申しますと貴藩とわが藩とはいま、犬猿の仲でごわす」

五代といふ、薩摩のリーダー格らしい男が残念そくに言った。

「どうということです」

五代の話によれば、五人が日本を離れてからの長州藩を中心とする政治情勢は、次のようなものだつた。

文久三年（一八六三）の前半、長州藩は朝廷の勢力を背景とし、攘夷を掲げて幕府を追い詰めていった。

ところが、その年の八月十八日、朝廷内の反長州勢力と薩摩・会津藩が結びつき、政変を起こして、暴走する長州藩を京から追放してしまつ。

そこで、長州藩は失地回復を企んで軍勢を引き連れて京に上る。ところが元治元年七月十九日、薩摩・会津の軍勢と御所付近で武力衝突してしまい、ついには敗走した。

さらに同年八月には、イギリス・アメリカ・フランス・オランダからなる四カ国連合艦隊十七隻が下関に襲来する。またもや長州藩は敗れ、連合国側と講和を結んで、攘夷の旗印を下ろすことになった。

ここに至り長州藩主父子は官位を剥奪され、「朝敵」の烙印まで押されたという。

「なんと、わが長州が朝敵か…」

この事実には三人とも、衝撃を隠せなかつた。勤王だ、尊王だと、天皇のために尽くして來たはずなのに、朝敵になるとは皮肉以外の何物でもない。

それに、帰國した聞多と春輔の説得は失敗に終わつたようだつた。長州藩は單細胞の過激派に引きずり回されたあげく、列強相手に開戦に及んでいるのだ。

「しかし、よくぞ徹底的に潰されなかつたものだな」

庸造が言うと、弥吉も、

「ああ、本来ならば、いまごろわが藩は、列強の植民地になつていても、おかしくはないところだぞ」

「そう言えば、面白いことがあります」

五代が思い出したように、再び話を始めた。

「長州が列強と戦つた後のことでござわす。私は、あるイギリスの外交官と話しをする機会がござい申した。すると彼は、自分たちは長州を打ち負かしたが、実は長州が好きになつた、尊敬する念すら起つたと、申しておりました」

「どういう意味ですか」

「幕府はある意味で、列強にとつて都合のいい政権でござわす。理不尽な条約を押し付けても、調印したのですから。しかし、そうした弱腰の態度が、かえつて列強の信用を失い、愛想を尽かされたのでしよう。それに比べて、理不尽に対しては死に物狂いで抵抗した長州の勇気に、世界じゅうが注目し、感動したのですぞ！すごいことでござす」

励ますように五代は言うと、豪快に笑つてみせた。その場の雰囲気が、一瞬にして明るくなつた。

（そとか、大きな犠牲を払つての戦いが、かえつて列強と長州を接近させたのか。まんざら無駄ではなかつたのか）

そう考へると、三人はにわかに救われた気分になつた。

「西洋人たちは、損得だけで物事を割り切る奴らだとおもつていました。しかし勝敗を越えて奮闘する者には、敬意を払うものなのでござわすなあ」

薩摩の若者の一人が、感心したようつぶやいた。  
この日、夜十一時ころまで、両藩の若者たちは、アパートの一室で自分たちの故郷のこと、あるいは日本の行く末について、熱く語り合つた。

「自分たち以外の日本人と話すのは、実に一年ぶりじゃなあ。やっぱり、日本人はええのう」

アパートを出、ロンドンの夜空を仰ぎながら弥吉が、感慨深そつに呟いた。

「それにしても薩摩人の言葉は、半分くらいしか分からんのう」

庸造が言うと、弥吉が声を立てて笑った。

謹助はなにやら思い詰めたような表情をして、ぽつりぽつりと夜道を歩いていた。

#### (4)

それから長州の三人と薩摩人たちは、肩を寄せ合うようにしてロンドンの地で生活した。遠く離れた日本では、長州と薩摩がお互いのプライドのため角突き合させ、憎しみ、いがみ合っているなど、嘘のようであつた。

ある日、庸造は薩摩人たちを市街の各所に案内した。

最初に立ち寄ったのは、兵器博物館だ。そこには、中国やポルトガル、トルコなどと戦い、勝利したイギリスが分捕つて来た大砲や銃剣など、戦利品の数々が所狭しと並べられていた。さる「力の強い国が、弱い国を打ち負かし、従わせてゆくのじやなあ」

薩摩人たちは、あらためて国際社会の厳しい現実を目の当たりにしたようだつた。

造船所、病院、諸官庁、連れて行く先々で薩摩の留学生たちは目を丸くして、感嘆の声を上げた。

げた。

イングランド銀行では、やはり一千ポンド札に署名を求められた。

意味が分からず、戸惑う薩摩人たちを見た庸造は、

（自分たちの二年前を見るよつだ）

と微笑ましくおもつた。

結局十九人では多すぎる所以、視察員のうちの三人が代表して紙幣に署名をした。

またある時、長州と薩摩の留学生たちは、ウイリアムソン博士に連れられ、ロンドンから北へ約七十キロメートル離れた郊外にあるベッドフォード市の鉄工場を訪れた。

そこでは、農業用の機械が造られていた。

人馬による農耕しか知らぬ彼らは、刈り取り機を見て、驚きの声を上げた。さらに、使い方を教わり自分で操作をして、感動のあまりため息をついた。

その姿は、まるで子供のように無邪気で、周囲のイギリス人たちは目を細めながら、眺めていた。

「想像していた以上に、巨大な文明でござります。確かに、大和魂だけで太刀打ち出来る相手ではござん」

帰りの汽車の中で薩摩の最年少、十三歳の磯永がつぶやいた。

「だからこそ日本も、一日も早く文明国にならにゃあいけん。こねいな鉄道ひとつ無い国は、いつまでたつても侮られるだけじゃ」

弥吉が言った。

その言ひ方が、いかにも先輩風を吹かせて偉ぶっていたので、傍らで見ていた庸造はおかしくてならなかつた。

(5)

薩摩の留学生がロンドンに来て間もなく、謹助の様子が目に見えておかしくなつた。

元来、精神的にも肉体的にも、強い方ではなかつた謹助は、心の病に陥つてしまつたのだ。

勉学も手につかなくなり、ついには寝込むようになつた。

長州藩の近況を知つたせいで、それまで抑えていた故郷への思いが、一気に吹き出したらしい。

ある日の夕方、アパートの一室で突然卒倒した謹助は、そのまま市街の小さな病院にかがみ込まれた。

「どうじや、気分は」

「謹助を見舞つた庸造と弥吉は、やさしく慰めようとした。

「わしゃあ、弱くて、駄目な男じや…」

ベットに横たわつた謹助は、うつろな目で天井を眺めながらつぶやいた。謹助の頬はすっかり落ちて、痛々しかつた。

「そねえなことがあるかい。君はよくやつとるぞ。しつかりせえや、長州男兒じやろう」

弥吉は、なんとか励まそとしだが、謹助は頭を振つた。

「実は僕はエゲレスに来てからも、ずっと長州を探しとつた。あの山は長州の山に似ちよる、この川は長州の川に似ちよる。エゲレスの中でもいつもこんな調子で、長州の風景ばかりを探しとつたんじや…」

そう言つと、謹助の目から涙がひと筋こぼれ落ちた。

「結構じやないか。僕だつて、そんなことはしょっちゅう考えちよる。だから…」

弥吉がさらに励まそとするのを、それまで黙つていた庸造が遮つた。

庸造には、謹助がもう限界であると分かつていて。

「ええぞ、もう頑張らんでええぞ。君は十分やつた。見事君命を果たした」

謹助が、じつと庸造の目を見つめた。

「帰国せえや。そして藩の奴らに、このエグレスで見聞したことを教えちやるんじや。それも大切な役目じや。わが藩が時流に取り残されぬためにも、遠藤謹助は帰国せねばならぬのじや」

庸造は、謹助の肩をぽんと叩いて、ほほ笑んだ。

「きっと、それが君の使命なんじやな」

弥吉も頷いた。

謹助はひと言、

「すまんのう」

とつぶやいて、瞼を閉じた。

間もなく謹助は、マジソン商会が手配した船便で日本へと帰つて行つた。

港まで見送りに行つた庸造は、隣で手を振る弥吉を見ながら、

（故国を出て三年か。五人が一人になつてしまつたのう）

とおもうと、寂しさが胸をよぎつた。

(6)

それから数日後、庸造は新納と五代に呼び出され、彼らが泊まるケンジントン・ホテルに一人で出向いた。

部屋では五代と新納が、ソファーに腰をおろして庸造が来るのを待つていた。

「山尾さん、あなたはグラスゴーに行きたいと言つていましたね」

五代が尋ねた。

庸造はぎょっとした。そう言えば先日の汽車の中で薩摩人たちと語りあつたさい、そんな話をした気がする。

「はあ」

庸造は、とほけたような返事をした。

イギリス北部、スコットランド地方のグラスゴーは、産業革命が起つた世界一の造船と工業の町として知られる。地下からは鉄や石炭といった原料が豊富に掘り出され、製品はクライド川の水運を利用して、世界じゅうに輸出されていた。

スコットランド人のワットは、グラスゴー大学の芝生の上で寝転びながら、蒸気機関の改良

という歴史的大発明を思いついたという。そんな空気が、グラスゴーには満ち溢れていた。

日本に工業を持ち帰りたいと志す庸造が、グラスゴーを目指したのは当然である。だが、存亡危急の危機に立たされた長州藩からの仕送りは途絶え、庸造はグラスゴーへの汽車賃すら捻り出出来ない有り様だ。

しかし、まさかここで薩摩人に自分の藩の窮乏を明かし、泣きつくわけにはいかない。それは、たとえ死んでも言えない、庸造はおもつた。

ところが五代も、新納も、それ以上何も尋ねようとはしなかつた。

「なにかのお役に立てるならと思いまして」

と言い、そつと包みを差し出した。

「山尾さん。われわれが少しずつ手持ちの金を出し合いました。全部で十六ポンドあります。使  
うて下さい」

「いえ、それはいただけません」

庸造は、即座に拒否した。十六ポンドといえば、半年は楽に生活出来るほどの大金である。

「僕は長州から送り込まれた留学生です。あなた方から御恩を受けても、薩摩の方へは何ら報い  
ることが出来ません」

「山尾さん。これからは長州も、薩摩もありもはん。それは、われわれよりもこのエグレース国に  
長く住んどられる、おはんが一番良く知つとるはずではござはんか。われわれは同じ日本人で  
ござわす。日本人ならば、日本のために尽くせば良いとは思ひもはんか」

「しかし…」

庸造が口ごもつていると、新納がさらに説き伏せるように言った。

「おはんを、いま、もしグラスゴーに行かせなかつたら、それは、薩摩とか長州とかの問題では  
ありもはん。日本にとつて大きな損失でござわす。決して一時の情に流されて言うとるわけでは  
ございもはん。どうか、生きた器械になるといふ志を遂げて下さい」

「日本のためですか」

庸造は、感激のあまり震えが止まらなくなつた。思えば十年ほど前まで、あの萩の三角州の  
底で、陪臣だ、他所者だと冷たく蔑まれていたのだ。  
庸造はしばらく黙つて、考へこんだ。

(生きた器械になるための総仕上げとして、どうしてもグラスゴーに行きたい、行かねばなら  
い)

という気持ちが、あらためて心の底から激しく沸き起つて来る。もし、ここで断つたら、

一度とその機会は訪れないかも知れない。

(それは絶対に嫌だ)

そう思つと、心の中で迷いがふつ切れてゆく。庸造は、薩摩人たちが目の前に差し出してくれた機会を、遠慮せずにつかみ取る決意をした。

「皆さんのご厚意を無駄にせぬよう、懸命に学び、そして日本に工業を持ち帰つてみせます。次は日本で…新しい日本でお目にかかりましょう」

「山尾さん、その心意気でごわす。再会の日が楽しみですなあ」

五代も、新納も嬉しそうだつた。

(7)

その年の秋、庸造を乗せた汽車は、グラスゴーに向けて田園風景の中を走つていた。ロンドンからは、五五〇キロメートルの行程である。

グラスゴーの駅に降り立つた庸造が向かつたのは、市内を流れるクライド川流域の造船所街だつた。

グラスゴーの空は、工場が吐き出す煙で覆われていた。一年に一萬トン分の船が造られ、そ

の建造量は全世界の一割を占めているという。

庸造を迎えてくれたのは、ロベルト・アンド・サンズ会社が經營するネイピア造船所だ。マジソン商会が事前に手配し、便宜をはかつてくれていたのである。

一八六〇年に創業されたネイピア造船所には、徒弟制度があつた。

ここで見習い工として数年働けば、技術だけではなく、工場の帳簿の付け方といった具体的な運営方法まで教えてくれる。だからヨーロッパ各地はもとより、中国からも、造船所で働きながら技術を学ぼうと、多くの若者たちが集まつて来ていた。

庸造はマジソンの紹介で、造船所近くの貿易商ブラウン宅に下宿することになった。ブラウンは、密航者をひとり預かつて欲しいと頼まれ、最初は躊躇した。

しかし、マジソンの、

「これから日本をリードするのは、弱体化した大君政府（幕府）の役人ではなく、庸造のような情熱を持つ若者たちだ。ひとつ賭けてみてはいかがか」

との誘いに、乗つてみようという気になつた。日本の情勢を調べ、四カ国連合艦隊に堂々と立ち向かつた長州藩の勢いを知つた時、商人としての勘が働いたのだ。

「あなたの故郷は、世界を相手に戦つた。すごいですね。そして、密航してこのグラスゴーまで

造船業を学びに来る、あなたの情熱にも敬意を表します。出来るだけのお世話をいたしましょう

初対面のブラウンにそう言われ、庸造は胸が熱くなるのを覚えた。自分の故国を、これ程誇り高く感じたのは初めてのことであった。

(8)

庸造は、朝起きるとまず造船所に行く。そして一日中、見習い工として工具を使い、船を造る作業に加わった。

骨は鉄外板、甲板は木材を使うという木鉄交造船の時代である。

造船はまず、船型を決めるという基本設計から始まつた。そして、機器類の配置図、装置図、系統図、構造図などといった詳細部分の図面が作られてゆく。

次に、船殻構造用の鋼材や、配管材用の管材などが必要な形に加工される。

加工された板に骨を付けたり、反転させて他の部材を取り付けたりして、ブロックを造り上げてゆく。

さらに組み上げられたブロックを接合し、船の形が仕上がってゆく。

それぞれが見事なまでに分業化され、効率よく船は完成するのである。庸造は連日その過程を懸命になつて追つた。

そして庸造は夕方仕事が終わると、下宿に近いアンダーソンズ・カレッジに通い、学んだ。造船所での作業を深く理解するには、科学の原理を学ばねばならぬと考えたのだ。

この学校は、グラスゴー大学教授（物理学）アンダーソンズの基金により、一七九六年に創立された。

「頭と手をもつて」

教師たちは、昼間の労働を終えて通つてくる若者たちに、何度もそくりかえした。それがこの学校の教育方針だった。

この地にあるグラスゴー大学は、一八四一年から世界に先駆けて、大学の教育課程に「工学」を取り入れたという伝統を持つ。大学での工学教育と、造船所などでの実務を直結させるシステムが、グラスゴーには確立されていた。

それは、ジェントルマン的教育を重視するあまり、大陸諸国に比べて科学技術という実学の教育水準が低いとされたイギリスにおいて、画期的とも言えた。

(9)

当初、庸造を驚かせたのは、巨大な造船所内で何百人という職人が一日じゅう打ち続ける、ハンマーの大音響だった。まるで百雷が一度に鳴り響き、耳の奥まで痺れるような、凄まじいものであつた。

そのうち庸造は、ひと倍早く、正確に、金属鉄をハンマーで打ち込み、金属板を接続してゆく初老の男に注目するようになる。その技術は神業で、いくら眺めていても飽きることはなかつた。

「金属鉄を打ち込んだ数で、給金が決まるんだ。だからあの男は、ずいぶん稼いでいるはずだぜ」最近、仲良くなつた中国から来ている見習い工が、庸造に囁くように言った。

ある日の休憩時間、庸造は初老の男と、もうひとりの職人の、不思議な手の指の動きに気づいた。一人はとても楽しそうに、時おり笑みなど浮かべながら、一生懸命指を動かしていた。

「あれは、何をしているのですか」

庸造は、中国の見習い工に尋ねた。

「ああ、彼らは耳が聞こえないので、あのように指で文字を書き、相手と会話しているのだよ」「指で文字を？」

「造船所で永年働いている職人は皆、この音で耳をやられてしまうんだ。だから、指を使い自分の意志を相手に伝える術を身につけるのだな」

「ほう」

庸造は、ますます感心しながら、指で会話する男の姿を眺めていた。

（わが国では、耳が聞こえなかったり、目が見えなかったりする者を、わざと家の奥に閉じ込められた風潮がある。それはきっと、間違っているのだ）

庸造はまたひとつ、眼前に新しい世界が開けるのを感じていた。

「ぜひ、私にも、指の、会話を、教えて、ください」

庸造は男に近づき、ゆっくりと、丁寧にそう言つた。

男は庸造の唇の動きから、何を言つてゐるかを察したようだつた。そして、にこりと笑つて領いた。

見知らぬ東洋人が、自分に興味を示してくれたことを、男は心底から喜んでいる様子だつた。

(10)

庸造がグラスゴーに来て二年近く経つたころ、一通の手紙が届いた。ロンドンで学ぶ弥吉か

らだった。

五年の留学期限が迫つており、藩からの帰国命令が届いたのだという。

「天は人の運命を、志とは異なる方向へと向けたがる。事は意のとくならず。修業半途にして帰朝せねばならぬとは」

留学の延長を望んでいた弥吉は、それが叶えられず、ふて腐れているようだつた。

「弥吉らしいのう。やけ酒でも飲んだるんじゃろうのう」

庸造は、酔つて周囲に議論を吹つかけてまわる「ノムラン」の姿が目に浮かぶようで、懐かしく感じていた。

また手紙には、弥吉が見聞した長州藩の近況が記されていた。

それは、次のようなものだつた。

攘夷に終止符を打つた長州藩は、次なる目的である幕府に抗する準備に取りかかつた。そのため、対立していた薩摩藩とひそかに提携し、銃や軍艦をイギリスから輸入した。

これに対し幕府は、勅許を得、西日本の諸藩を動員して、長州藩に攻めかかつた。

ところが長州藩では、武士から庶民までもが一丸となつて奮闘し、四境から攻め寄せた征長軍を撃退してしまう。

長州藩に敗れた將軍慶喜<sup>よしのぶ</sup>はひとまず「大政奉還」を行い、その後で合法的に新政権の盟主となつて、徳川の危機を乗り切ろうとした。ところが時を同じくして、「討幕の密勅」が薩摩・長州藩に下つた。

さらに、「王政復古」の大号令が発せられる。これにより、一百数十年にわたり日本を統治し続けた徳川幕府は、名実ともに消滅した。

そして天皇を頂点とする、新しい日本が誕生した。

朝敵の汚名を拭われた長州藩は、薩摩藩と肩を並べ、新政権の中心に座つた。

弥吉の手紙を読み進むうち、庸造は心の中に、鮮やかな光が差し込んでくるのを感じていた。(日本という国の形を、ようやく日本人が決める時が来たのだ。この僕が必要とされる日が、やつて来たに違いない) そう思うと、いても立つてもいられなくなつた。

数日後、庸造は帰国挨拶をするため、造船所長の部屋を訪れた。

「長い間、本当に世話をなりました」

「おめでとう。これからは、この国で学んだことを、君の国で存分に役立ててください」

大柄な所長は、庸造の手を力強く握つて激励した。深々とお辞儀をして去ろうとする庸造の

背中に、所長は唄いかけた。

「旧友よ、再会し、思い出話をしながら、酒を酌み交わそ？」

スコットランド民謡の「オールド・ロング・サイン（シンス）」だ。この国では、親しい者との宴の後に、再会を誓つて唄う歌である。

それから造船所の構内を歩くと、行き交う人達が次々と庸造の門出を祝福してくれた。

庸造に指の会話を教えてくれた男も目にうつすらと涙を浮かべ、肩を叩きながら、

「若者よ、しつかりやれ」

と励ましてくれた。

「お元気で」

こみ上げてくるものが大きすぎて、庸造はそんな返事をするのが精一杯だった。この国で学んで、本当に良かったとおもつた。

駅に向かう庸造の足どりは軽かつた。

思えば一島村を出てから萩、萩から江戸、江戸からロシア、ロシアから箱館、そしてイギリスと、無我夢中になつて長い旅を続けて来たような気がする。

「ますらをのゝはじをしのびてゆくたびはゝすめらみくにのためとこそしひ」

春輔がいつか詠じていた歌が、自然と庸造の口をつく。これから汽車でロンドンに出、さらに四ヶ月もの船旅を続けなければならぬ。

にもかかわらず庸造の魂は早くも日本へと飛び立ち、故郷の山河を駆け巡つていた。

## エピローグ

(1)

井上聞多は伊藤春輔を伴い帰国し、ロンドンでの見聞をもとに、攘夷の不可を藩首脳部に説いてしまわった。

ところが、彼らにとり頼みの綱であつた周布政之助も、高杉晋作も、失脚して一線から消えていた。心の底では醒めていたはずの藩は、いつのまにか闇雲に攘夷を唱えるだけの单細胞に引きずり回されており、聞多の熱弁に耳を貸す者はいない。それどころか、

「奴らは異国を見たくらいで、大和魂を捨てた腰抜けだ！」

「堺国奴の井上」と伊藤を斬れつ」

と、白刃を振りかざした攘夷派浪士たちから、追いまわされる始末である。呆れた聞多は春輔に向かい、「もう、行き着くところまで行き着けばええ。実際戦つて、西洋文明を知るしかこの藩を覚醒させる道はないじゃろ？」「

と、吐き捨てるように言った。

こうして長州藩は元治元年八月、関門海峡に攻め寄せた英米仏蘭四カ国から成る連合艦隊との間に砲火を交え、案の定敗れた。

ここに来て藩は、攘夷の無謀を悟り、自分たちの暴走に気づく。そして聞多と春輔を起用し、晋作らと共に戦後処理を任せ、奔走させた。

交渉は三回行われた。聞多らは藩が今後攘夷の方針を捨て、海峡の通航安全を保証することで連合艦隊側を納得させ、講和を締結する。

このころの長州藩は、まさに内憂外患の危機に立っていた。外国艦が去るや、今度は勅命を奉じた征長軍が、朝敵となつた長州藩に迫つたのである。

この征長軍に対する方針をめぐり藩論は分裂した。聞多は武備恭順一表では恭順を装いながら、長州藩の正義を訴え、裏では実力を蓄える——を唱えたが、九月二十五日夜、帰宅途上、山口湯田で反対派の刺客三人に襲撃され、瀕死の重傷を負う。

山口の自宅に担ぎこまれた虫の息の聞多を見た時、兄は（助からぬ）と感じた。だが、母が懇願して、遊撃軍参謀で洋医の所都太郎が呼ばれる。

所は麻醉無しで、豈針を使い五十余針も縫うという荒っぽい外科手術を施こした。聞多はあまりにも激しい痛みのため、何度も気絶した。

それでも、聞多はすさまじいまでの生命力の持ち主だった。奇跡的に蘇生し、その後も討幕運動の中心人物として活躍し、維新を迎えるのである。

明治元年（慶應四年）一月、参与として新政府に出仕。こうして元勲「井上馨」が誕生した。

新政府は、歐米列強に対し開國の方針を示す。

ところが、明治元年一月十五日、泉州堺（現在の大坂府堺市）を警護していた土佐藩士が、上陸して来たフランス兵十一名を殺害するという不幸な事件が起こる。

政府は、強行なフランス側の要求を受け入れ、土佐藩士十一名を切腹させた。

これを知った井上馨は憤慨し、政府の要人たちに食つてかかつた。得意の熱弁をふるつて、こう言つた。

「フランス側の要求は、はなはだ当を得ないものです。それを認め、土佐藩士を切腹させ、賠償金の支払いや土佐藩主の謝罪、開港場への土佐藩士の立ち入り禁止まで決めたことは、いかがなものでしょうか。そこぶる外国側を恐怖しただけのことです。」

『やむを得ずば一戦！』

という覚悟がなければ、とても外国を御す道は立ちません。かつて、幕府が外国に接した時の態度も、恐怖が先に立ち、外国側に振り回され、ついには滅びる結果となつたのです。新政

にあつては、その轍を踏まないようなご処置が肝要かと存じます」

当時、聞多こと馨は留学経験を買われ、外国事務局判事を命ぜられたばかりだつた。それに、意気込みも凄まじいものがあつた。だが、生まれたばかりの政府に列強の圧力を突つ張ねるほどの実力はなく、馨はじたんだを踏んで悔しがるしかなかつた。

馨がめざしたのは、欧米列強と肩を並べることが出来る近代日本の建設である。そのためには幕末のころ、幕府が諸外国との間に締結した不平等条約を、一刻も早く改正させねばならぬと考えていた。

明治十八年、内閣制度がスタートすると、馨は初代の外務大臣となつた。総理大臣は幕末以来、生死を共にした春輔こと伊藤博文である。

馨は日本のあらゆる風俗をヨーロッパ化して、欧米列強を安心させようとした。

このため、極端な欧化政策を進めてゆく。その象徴が東京の鹿鳴館という迎賓館だつた。日本で初めての洋風集会所であり、外務省が公費十四万五千円を各省庁からかき集め、全力を投じて建設した。

馨も、博文も、ここで連日連夜、ダンスパーティーを催せば、欧米列強は日本を文明国と認め、難航していた不平等条約は、平等条約に近づくと信じていた。

政府高官とその夫人たちは慣れない洋服に身を包み、馬車に乗つてガス灯に照らされた銀座のレンガ街を、鹿鳴館に集まつて來た。だが、欧米人たちから、日本女性の洋装は嘲笑の的になるだけだつた。外国の新聞紙には、猿がドレスを着て踊る風刺画が載つたくらいだ。

それでも馨は、裁判権の回復をめざして戦い、明治十九年、正式に条約改正会議を開催するところまで漕ぎ着ける。

ところが、外国人裁判官の日本法廷への採用を認めるという譲歩案が、激しい批判を受けることになつた。

最初に反対したのは、井上がフランスから呼んで來た法律顧問ボアソナードだ。

「法権回復を言うなら、法の執行人が外国人だというのは、主権が失われるこことを意味する」

それが反対の理由だつた。政府内でも猛反発する者たちがいて、またもや馨は、「壳國奴」

と罵られることになつた。

こうして明治二十年七月、馨は会議の延期を発表し、条約改正は事実上、頓挫した。鹿鳴館は時代は終わりを告げ、馨は外務大臣を辞職する。

だが、その志は後任者たちに受け継がれた。明治二十七年七月、陸奥宗光外務大臣は法権回

復・内地開放・税率一部引き上げを内容とする日英通商航海条約の調印に成功。二十九年までに各国とも同様の条約を締結して、三十一年に新条約が発効した。

のち、この条約の期限が切れる前に、小村寿太郎外務大臣のもとで各条約国と改正交渉が進められ、四十四年一月、関税自主権回復の日米新通商航海条約が締結された。以後各国とも同様の条約が締結され、幕末以来、日本の悲願だった条約改正が実現する。

駿河が静岡県興津の別荘で没したのは、その数年後、大正四年（一九一五）九月四日のことである。享年八十一。

(2)

ロンドンから帰国した春輔は、松下村塾の先輩にあたる高杉晋作に可愛がられた。

「春は音読みにすると俊だから、俊輔にせよ」

と言われたので、さっそく改名したりした。

征長軍に恭順謝罪した藩政府を打倒すべく、晋作は元治元年十二月、下関でわずか八十名を率いて挙兵する。その際、俊輔は力士隊を率いて晋作らに呼応し、藩政府軍を打ち破った。

だが、晋作は四境戦争（第二次幕長戦争）で幕府征長軍を撃退した直後の慶応三年四月十三

日、二十九歳の若さで病没する。

その後、俊輔は俊介と改名した。

時代は急激に動き、大政奉還、王政復古と統いて幕府は消滅し、天皇を頂点とする新しい日本が誕生した。

しかし俊介には、新政府からのお呼びの声はかからなかつた。

（しょせんは高杉さんの腰巾着程度にしか思われていなかつたのだろう）

諦めた俊介は、アメリカに渡って、さらに学びたいとおもつた。命懸けでロンドンに留学したにもかかわらず、何も身につけられなかつたのが口惜しくてならなかつた。今度こそ生きた器械になる志を果たしたかったのだ。

そこで、俊介は下関から船に乗り、ひとまず開港されたばかりの神戸に向かつた。神戸到着は、明治元年（慶応四年）一月十二日のことである。

ところがその前日、神戸では大変な事件が起つていて、西国街道を進んでいた岡山藩の行列が、外国人とトラブルを起こし、数名の負傷者を出したのだ。いわゆる「神戸事件」である。

外国人居留地という治外法権の特殊地域で起つた事件だけに、問題は深刻だつた。フラン

ス・イギリス・アメリカの各軍隊は神戸を占領し、港に停泊していた諸藩の軍艦数隻は拿捕されてしまった。

事情を知った俊介は、旧知の英國公使ハリー・パークスを訪ねた。

だがパークスは、

「日本の諸侯が口にする開国論は、信用出来ぬ」

と憤慨し、俊介の話に耳を傾けようとしない。

その真意を、俊介は知っていた。パークスは事件を契機に強気に出で、今後新政府が列強に頭が上がらぬような関係を、はつきりと築いておきたいのだ。

悪いことに、新政府はまだ列強に対し、対外政策につき一切言明していない。それどころか新政府が樹立したことすら、列強側には公式発表していないのだ。パークスはその非礼をも指摘した。

そこで俊介は、大阪に外国事務取調掛の公卿東久世通禧ひがしくぜゆきを訪ねた。そして、

「まず、幕府に代わり新政権が誕生した事を諸外国に向けて宣言し、それから事件解決に臨むのが順序ではないでしょうか」と、提案した。

俊介に言われるまでもなく、新政府首脳たちは、開國の方針を示さねばならぬのは百も承知だ。ところが薩摩・長州出身の彼らは、つい先頃まで攘夷を唱え、開國した幕府を攻撃して、排他的な攘夷論は、朝廷を中心にもだ根深く存在していた。

ところが神戸の事件により、新政府は決断を迫られた。

「開国するのか、それとも攘夷を続けるのか」

列強に対して、態度をはつきり示さねばならなくなつたのだ。

東久世は賢明な人だつた。ただちに俊介の意見を採用し、朝廷に具申した。そして、俊介を外國事務掛に登用するよう手配した。こうして俊介は、新政府入りを果たしたのである。つくづく運の強い男であった。

十五日、勅使となつた東久世に従い、俊介は神戸の運上所に赴く。ここでフランス・イギリス・イタリア・プロシア・オランダ・アメリカの各公使に国書を交付した。列強に対し、「王政復古」を初めて宣言し、開國の方針を明らかにしたのである。

一方、列強も新政府を新しい日本の代表と認めた。その上で新政府が岡山藩を処分すること

で、列強側は納得する。結局、発砲を指揮した滝善三郎が切腹して、事件は決着を見たのだった。

「伊藤君、君はぜひこの神戸に留まりなさい。異国人を相手にする仕事は、異国で生活した経験のある者でなければ勤まらない」

そう勧めたのは、薩摩藩の五代才助である。このころ五代はもっぱら大阪にあって、新政府の外交のために活躍していた。

そう言われると、俊介はまんざら悪い気はしなかつた。中途半端に終わつたと悔いていた留学経験が、いまの日本に役立つのだと考えると嬉しくなつた。

そして、その年の五月二十三日、神戸を擁する兵庫県が誕生するや、俊介は初代知事に任命された。

二十八歳の若い知事は、やがて断髪してザンギリ頭となつた。背広を着て、蝶ネクタイを結んで、馬にまたがり県庁に通つたため、市民からは「坊主奉行」とあだ名された。

だが、俊介は翌二年四月、神戸を去ることになる。

天皇を頂点とする近代国家建設を考える俊介は、全国の大名が政治や軍事の権限を天皇に奉<sup>ほう</sup>還せよと、新政府に説いた。いわゆる版籍奉還だが、それが保守派の反発を招いたのだ。

### 〔伊藤を殺す〕

と息巻く連中が、俊介を付け狙つた。

神戸を去つた俊介は東京へ出て、間もなく太政少輔と民部少輔を兼ねる。

名も博文とした。以前、晋作から論語の「博く約するに文を以てす」にちなみ「博文と改名せよ」と勧められたのを思い出したからだ。

以後も政治家として頭角をあらわした博文は、明治十八年十一月、内閣制度がスタートするや初代内閣総理大臣となつた。

また、憲法起草にも尽力し、天皇制国家の建設に功献した。さらに日露戦争後は韓国統監となり、韓国を保護国化してゆく。

明治四十二年十月二十六日、満州視察中、ハルビン駅頭で韓国人青年安重根により暗殺された。享年六十九。

(3)

聞多・春輔に続き帰国した遠藤謹助が、その留学経験を遺憾なく發揮した最初は、慶應二年十二月二十七日、軍艦四隻を率いて周防三田尻（現在の防府市）に来たイギリス公使代理の提

督キングと、藩主毛利敬親らの会見の席だ。

謹助は間多と共に通訳を命ぜられて立ち会い、その役目を無事果たした。この会見は、四力

国連合艦隊下関砲撃事件後、接近を始めた長州藩とイギリスの辯をより強固なものにした。

維新となるや謹助は、新政府に召され神戸の運上所（税関の前身）に司長として勤務した。そのころ、謹助は同じ長州藩出身の病院御用掛森竜玄と共に、神戸に病院を設立するため奔走する。謹助は、明治元年五月一日付の『内外新聞』に、その資金募集を呼びかける記事を出した。

「病院は人命を保助し、人種を畜培し、貧民の病て医業を得ざる者を救助する道なれば、国家に欠べからざる要務なり」

で始まる一文は、ロンドンの福祉行政を目の当たりにした謹助の見識に裏打ちされたものだつた。こうして、神戸の地に病院が誕生した。

翌二年三月、運上所を辞した謹助は大蔵省に入り、三年十一月、大阪の造幣寮に着任した。造幣寮の創業式が行われたのは翌四年一月十五日で、当時はお雇い外国人八名を含む二百二十名の職員がいた。造幣頭は佐賀藩出身の馬渡俊邁、謹助はその次の造幣権頭という地位を与えられた。

謹助は、ロンドンですぐれた造幣技術を目の当たりにして感嘆し、さらに神戸の運上所で連日外国貨幣を取り扱った経験を持つ。それだけに、一日も早く日本人だけの手で貨幣を造りたいと、強く願つた。

誕生したばかりの造幣寮で、その技術を指導したのは、キンドルというイギリス人だつた。かつての香港造幣局長である。

ところがキンドルの態度は横暴で、日本人相手にいばり散らした。まるで造幣頭が、一人いるかのようだつた。

ある時、挨拶が気に食わぬと、職人を責め立てるキンドルを見て、謹助は堪忍袋の緒が切れた。謹助が抗議すると、キンドルは一枚の紙切れをテーブルの上に叩きつけた。

「オリエンタル、バンク！」

それは、契約書だつた。キンドルは造幣寮直接の雇用ではなく、新政府と契約したイギリスの銀行オリエンタルバンクに、技術監督として雇われていたのだ。

オリエンタルバンクはアジアを中心に絶大な勢力をもち、東洋銀行とも呼ばれていた。誕生したばかりの新政府を財政的に補佐し恩を売つたため、造幣事業などの近代工業創設や外債募集など、日本の基幹事業に深くかかわることになった。

謹助は明治六年六月、造幣権頭となつたが、翌七年七月には辞職し、大蔵省に移つた。キンドルとの対立がエスカレートして、体調を崩したのが、大きな原因だつた。

「このままでは、いつまで経つても日本人だけの手で貨幣が作れる日は来ない」

大蔵大丞となつた謹助はその年八月、造幣寮の問題点を列記し、大改革を訴える建言書を大蔵卿大隈重信に提出する。謹助は解決のため、

「東洋銀行条約を廢する事」

「寮中使役の外国人を政府直雇とする事」

「外国首長免職の事」

「外国人員を減する事」

「諸局長に工業の任を担当せしむる事」

それは日本の技術力も勘案した上のものだつたので説得力を持ち、政府内でも大きな反響を呼ぶ。

その結果、明治八年一月、オリエンタルバンクとの契約は解消され、雇用契約が切れたのを理由にキンドルも排斥された。こうして造幣寮は、自主権を回復してゆく。

謹助は明治十四年十一月から二十六年六月まで、造幣局長を勤める。そのころは、造幣寮から造幣局へと名称が変わつていた。すでに日本人の造幣技術は完成に近づきつつあり、二十二年一月には、最後の外国人だつたマクラガンが解雇された。ちょうどそのころ、造幣局構内には創設当初に植えた桜の若木があり、見ごろになるほど成長していた。それは品種が多いだけでなく、珍しい里桜が集められていることでも知られていた。

局長となつた謹助は、

「局員だけの花見では、もつたいない。皆で楽しもうではないか」

と、桜満開の数日間だけ、構内を一般に開放しようと決めた。こうして明治十六年四月から、通り抜けが始まった。

「お祭り好きの長州人の血が騒ぐのう。花見じや、花見じや」

日ごろは寡黙な謹助が、花見の時期になると上機嫌になつて騒ぐのを見て、職員たちは不思議な顔をしていた。

謹助は造幣局を退任して三ヵ月後の九月十三日、神戸の熊内町に建設中だつた屋敷で病死した。享年五十八。

謹助が残した通り抜けは、いまも関西の春を代表する風物詩として知られ、多い年では一週間に百万人の花見客があるという。

#### (4)

五人のうち、最後までイギリスに残り学んだ野村弥吉と山尾庸造が五年の留学期間を終えて帰国したのは、明治元年十一月のことである。

すでに幕府は倒れ、新政府が誕生していた。二人はしばらく横浜で骨休めをした後、木戸孝允に招かれて東京に出た。政府の参議となり、新しい日本のリーダーとして辣腕を振るう木戸とは、かつての桂小五郎、その人である。

桜屋という酒楼で二人は木戸に再会した。

「生きた器械になつて、帰国いたしました」

庸造が言うと、

「よう帰つて来てくれたのう。あのころ私は洋行の志を果たせず、悔し涙を飲んだものだ。しかし、私の分まで頑張つて来てくれたようじゃな。感謝しちよる」

木戸はその労をねぎらいながら、酒を勧めてくれた。弥吉は嬉しそうに飲み始めたが、飲め

ない庸造は蕎麦をすすつていた。

「ところで、わが藩では君たちを国もとに呼び戻し、あくまで藩士として長州で働くかせようと考えちよる。しかし、私は反対じや。君たちが身につけた西洋の文明は、あくまで日本のために役立てられねばならんとおもう。時機を見て、藩の分からず屋どもを説得してみる。そのうち東京に呼び寄せるから、そのつもりでいて欲しい」

庸造も弥吉も、木戸が「日本」という視点で物事を考えてくれるのが、嬉しかつた。さすがは早くから剣術修行の名目で江戸へ出、諸藩の若者と交流した木戸であると、感心していた。その晩、二人は時が経つのを忘れて木戸と語り明かした。

なお、野村弥吉は帰国後、井上勝と名乗るようになる。井上は彼の生家だった。密航により累が及ぶのを恐れた養家の野村家は、弥吉を離縁していたのだ。

弥吉こと勝はロンドンで、鉄道と鉱山こそが近代日本に不可欠であると信じ、学んで来た。その甲斐あって、東京の中央政府に招かれた勝は明治四年八月、工部省の鉄道頭てつどうのかみに任せられた。上司である工部大丞は庸造こと山尾庸三である。

すでに明治二年十一月、政府首脳の会談により、イギリスの指導を仰ぎ鉄道建設を行うとの決定が成されていた。これには軍事最優先を唱える薩摩閥をはじめとする多くの反対もあつた

が、鉄道工事は進められ、明治五年五月七日には呑川・横浜間の仮営業が始まった。一日二往復、所要時間は三十五分。運賃は上等一円五十銭、中等一円、下等五十銭である。

五月二十七日には汐留停留所が新橋停留所と改称され、やがて品川・新橋間の工事も完成。新橋・横浜間の開通式が、天皇臨幸のもと九月十一日に盛大に挙行された。

庸三と勝は、鳥帽子、直垂姿で英國式二階建の新橋停留所前に立ち、天皇の馬車を迎えた。

まず、勝が天皇に鉄道図一巻を奉呈した。それから天皇は、勝と庸三に先導されてプラットホームに進み、汽車に乗り込んだ。汽車は午前十時ちょうどに、横浜に向かい動き始めた。

「帰国からわずか四年で、この日を迎えるとは、夢のようじゃ」

庸三は素直に感動していたが、勝の心中には、どこか晴れないものがあった。というのも、このたびの鉄道工事は、エドモンド・モエルをはじめとする六十人を越す外国人技師の手により成されたものだったからだ。

その後も外国人技師主導のもと、神戸・大阪間に、さらに大阪・京都間にと鉄道が敷かれてゆく。

「鉄道とは国家の動脈である。その動脈を作るのに、いつまでも外国人の手に頼つてはいられない」

勝は、一日も早く日本人だけの手で鉄道を建設したいと切望した。そのため明治十年五月十四日、工技養成所を大阪停留所（大阪駅）二階に設け、高級技術者の養成を始める。

試験に合格した十余名は、建築技師セルヴィトンや建設士ホルサム、それに鉄道権助飯田俊徳から、数学、測量、製図、力学、土木一般、機会学大要、鉄道運輸大要などの授業を受けた。

厳しく冷え込んだある冬の夜、勝は、何げなく教室を覗き驚いた。教室の窓はわざと開け放たれ、ストーブも焚かれぬまま授業が行われていたのである。昼間働いている若者たちは、睡魔と戦いながら必死で学んでいたのだ。

（頼もししい奴らだ）

勝は以前の自分を見るようで、思わず目を細めた。

ちなみにこの年一月十一日、官制が改革され、鉄道寮は廃止されて工部省に鉄道局が置かれていた。これにより勝は工部少輔に任せられ、鉄道局長の地位を得ていた。

明治十年冬、勝が奔走した結果、政府は起業公債の三百万円を鉄道資金にすると決定。これにより、京都・大津間の線路工事が着工をみた。

京都・大津間は距離にして十数キロメートルしかない。しかし途中には加茂川・山科川に架橋が必要で、さらに逢坂山<sup>おとづかやま</sup>という難所が横たわっていた。

「京都・大津間の設計は外国人技師に依頼するが、工事はすべて日本人の手により行う」

勝の決意に、政府内からも多くの反対意見が出された。

「まだ時期尚早だ。途中で投げ出して、恥をかくだけではないか」

「日本人の技師といつても、たしかに一年ほど学んだだけではないか。そんな小僧どもに、何が出来るのだ」

しかし勝は、節を曲げようとはしなかつた。あの若者たちを信じたいとおもつた。

勝は工事を四区に分けた。

総監督は工技養成所教官で、長州出身の飯田俊徳。<sup>としのり</sup> 飯田はオランダに渡り、土木工学を学んだ人物である。そして京都・深草間は武者満歌、深草・山科間は千島九一と長谷川謹介、山科・逢坂山間は国沢能長と島田延武、逢坂山・大津間は佐武正章に、それぞれ担当させたのである。

特に難航したのが、逢坂山のトンネル工事だ。

東側からは明治十一年十月に、西側からは十一月に、掘削が始まった。地質が軟弱なため、掘つた後はすぐに杭を打ち、レンガで固めた。勝もみずから技師長として、脚絆履きで現場に立ち、工事の指揮を執つた。

数々の苦難を乗り越えた末、全長六百六十五メートルからなる逢坂山トンネルが完成したのは、明治十三年六月のことである。

「維新から十余年で、日本人の手で鉄道工事を完成させたのだ。日本人も、ここまでやれるのだ」

完成した逢坂山トンネルを前に、勝は顔を涙でべしやべしやにしながら、つぶやいた。実は、留学中に他界した父勝行に話しかけているつもりだった。時代がやつと、父に追いついたのだ

とおもつた。

そして勝がというよりも、日本人が歐米列強に對して抱き続けていた強いコンプレックスが、逢坂山トンネル完成により吹き飛んでいった。これを境に、鉄道関係の外国人技師たちの数は次第に減り、数年後には二、三人の顧問を数えるだけになつた。

その後も勝は、鉄道に関わりながら年齢を重ねた。そしてある日、親しい者に対し、こう言った。

「わが生涯は鉄道をもつて始まり、すでに鉄道をもつて老いたら、まさに鉄道をもつて死すべきのみ」

そして、勝はその言葉とおりの終焉を迎えることになる。

明治四十三年、鉄道院顧問だった勝は、鉄道院長後藤新平の依頼を受け、ヨーロッパに鉄道

視察の旅に出た。さらなる日本の鉄道改良に、勝はあくまで貪欲だった。

だが、すでに勝は六十八歳。周囲の者たちは健康上の理由から反対したが、勝の決意は固かつた。

五月八日、東京を出立した勝は、長崎に向かった。そこから海路大連へ渡り、シベリア鉄道に揺られて各地を視察しながら、ついにヨーロッパ入りを果たす。

ロンドンに到着した勝はある日、プロヴォスト街のウイリアムソン博士夫人のもとを訪ねた。博士はすでに亡くなっていたが、半世紀前、勝ら五人が最初に下宿した家は昔のままだった。勝は玄関の戸をノックした。

「どうだ…」

現れたのは、すっかり腰が曲がったウイリアムソン夫人だった。夫人は勝を見るなり一瞬息を止め、目を丸くして驚きながら、

「弥吉！ 弥吉なのね。夢ではないかしら

と、勝の手をとり、少女のように歓声を挙げた。

「ただいま帰りました」

それから勝は紅茶をご馳走になりながら、夫人と昔話に花を咲かせた。

「年をとると…涙が出て、いけませんな」

夫人は五人の帰国後の活躍を、実に良く知っていた。

「新聞で読んだり、ロンドンに来る日本人に尋ねたりしたの。あなたたちをお世話出来たことが、私たち夫婦の最大の誇りだとおもっていますよ」

そう言わると勝の目から、大粒の涙がこぼれた。

「年をとると…涙が出て、いけませんな」

勝は二十一歳の自分に戻ったような気分になつていた。やがて、庸造が、聞多が、春輔が、謹助が、扉の向こうから現れるのではないかという錯覚を覚えた。

それから勝は、イギリスおよび大陸の諸鉄道を視察して回り、再びロンドンに戻つて來た。ウイリアムソン夫人にもう一度会い、土産を渡すつもりだった。

ところが、ロンドン駅のプラットホームに降り立つた勝は、激しい胸の痛みを覚えた。やはり老体に鞭打ちながら、無理を続けたのが災いしたようだつた。

その場にしゃがみこんだ勝は、市街のヘンリッタ病院に運び込まれた。そして八月一日、静かに息を引き取つた。六十八歳だつた。

翌日、ロンドンのゴルタース・ダリイキンにおいて、随行員、ウイリアムソン夫人らの手で、勝の仮葬儀がしめやかに執り行われた。特にウイリアムソン夫人の嘆きは大きく、参列した者

は皆、目頭を熱くした。それから勝の遺骨は隨行員に抱えられ、日本に帰国した。

〔まさに鉄道をもつて死すべきのみ〕

その言どおりとなつた勝の人生は、後継者たちを奮起させるに十分だつた。

勝の墓は、生前本人が希望した、東京品川の東海寺墓地に築かれた。そこは、東海道線が見下ろせる高台だつた。さらに大正三年には鉄道関係者の手により、勝の銅像が東京駅前に建立された。

## (5)

庸造は維新後、東京に出る時、庸三と名を変えた。山尾家の三男という、自分の生まれた場所に対するこだわりを、持ち続けたいとおもつたからだ。

庸三は、日本が歐米列強と肩を並べるために、近代工業を起こさねばならぬと確信していた。だが、当時は工業に対する人々の知識も浅く、理解も乏しかつた。

〔たゞいま、日本に工業が無くて、人を作ればその人が工業を見出すだろう〕

と、明治四年四月、庸三は伊藤博文と共に工部学校の設立を建議した。

「山尾が、大工や左官の学校を創れと言つてゐるらしい」

との噂が政府内に流れたほど、新しい日本は幼かつた。

それが実現したのは、明治六年十月のことだ。工部省工学寮（のちの工部大学校・東京大学工学部）の誕生である。基礎教育・専門教育・実地研究に各二年、計六年制教育の学校だ。専門教育は土木・機械・電信・造家・実地化学・鎔鑄・鉱山に分かれていた。

充実した教育内容は、教師としてイギリスから招いた二十五歳の都檢兼工博士ヘンリー・ダイナーの提案を採用した結果だつた。

ダイナーはグラスゴー大学の出身で、庸三と意氣投合した。そして、新進気鋭の工学者であるダイナーは、庸三が考えたよりも遥かに本格的な工学教育を、日本で始めたのである。

さらに、庸三が太政官に提出した意見書がもとにになり、明治十一年九月、京都に盲聾学校が開設された。グラスゴーの造船所で働いていた、耳が不自由な職人のことを庸造は忘れてはいなかつた。

明治十三年一月、庸三は工部卿となつたが、十八年十二月、工部省は廃止され、工部大学校は文部省の管轄となつた。以後、庸三は参事院議官、参事院副議長、宮中顧問官、法制局長官などを歴任し、三十一年一月、六十一歳の時、すべての要職を辞した。

すでに近代工業は、日本に根を下ろしていた。

庸三は風月を友として、悠々自適の日々を送る。特に庸三が愛したのは、金魚だった。のんびりと泳ぐ金魚を眺めていると、時間が経つのを忘れた。

時は流れて大正五年、八十歳になつた庸三は突然、

「故郷がひと目見たい」

と言い出した。

こうして、その年の夏、三男の三郎夫妻ら十名ほどの親族を引き連れた庸三は、久しぶりに二島村に帰ることになった。

庸三を乗せた人力車が二島村に入ると、村じゅうの老若男女が「子爵山尾庸三閣下」を歓迎してくれた。三つ年下の弟市太郎が住む山尾家の屋敷の前は、黒山の人ばかりとなつていた。

(ありがとう、ありがとう)

知つてゐる顔はほとんど無かつたが、人力車の上から庸三は、故郷の人たちに丁寧にお辞儀をした。

次の日の夕方、庸三は一人で近くの海岸に立つていた。眼前には、おだやかな瀬戸内海周防灘が広がつてゐる。それは七十年前、小郡の寺子屋に通つた少年の時分に見ていた光景と、まつたく変わらないものだつた。

かつて、繁沢石見から別れざわに、「一島を頼むぞ」と言われたのを、思い出してゐた。繁沢は庸三がイギリスから帰国した時、すでにこの世人ではなかつたが、庸三は一日たりともその恩を忘れたことはなかつた。

庸三は砂浜を一步、また一步と、踏み締めながら歩いた。砂はまだ、昼間吸つた熱気を残していた。

その瞬間、庸三はすべてを悟つた。

(そうじや、自分はこの風景を守りたいため、今まで旅を続けて來たのだ)

庸三は満足気に砂浜に腰を下ろし、飽きることなくいつまでも海を眺めていた。

庸三が没したのは翌、大正六年十一月二十一日のこと。八十一歳だつた。

※本書は史実をもとに描いたフィクションです。

#### 【主要参考文献】

- 『井上伯伝』中原邦平 明治4年 中原邦平  
『子爵井上勝小傳』村井正利 大正4年 井上子爵銅像建設同志会  
『伊藤博文傳』春畠公追頌会 昭和15年 統正社  
『鉄道の父井上勝』三崎重雄 昭和17年 三省堂  
『薩摩藩英国留学生』犬塚孝明 昭和49年 中央公論社  
『近代造幣事始め』湯本憲一 昭和62年 駿河台出版社  
『図説・イギリスの歴史』指昭 博 平成12年 河出書房新社  
『高杉晋作』一坂太郎 平成14年 文芸春秋社  
『山尾庸三傳』兼清正徳 平成15年 山尾庸三顕彰会  
『長州藩留学生物語』一坂太郎 平成15年3月～16年12月  
西日本新聞（山口県版）連載  
『シャーロック・ホームズの鉄道学』松下了平 平成16年 JTB  
『密航留学生「長州ファイブ」を追って』宮地ゆう  
平成17年 萩ものがたり

## 島のさざなみ

—島嶼でトマホーク—

著者：中原邦平



本著は史実をもとに描いたフィクションです。

【主要参考文献】

- 『井上勝代』中原邦平、朝活4年、中華丸子  
『子爵井上勝代』村方正義、大風文庫、井上子爵傳記編成会  
『伊藤博文傳』春秋公道研究、柳原信重、筑摩社  
『明治の父井上勝代』一坂翠庵、筑摩印書、三省堂  
『薩摩藩主鍋島家史』大槻泰明、鶴形神寧、中央公論社  
『近代汽船事始』森本寛一、新和田学、鹿児島出版社  
『説説・イギリスの歴史』堀昭一、平成12年、河出書房新社  
『高杉晋作』一坂太郎、平成14年、岩波新社  
『山鹿宿三傳』柳原正雄、平成15年、白帝社、吉川弘文館  
『長州藩留学生物語』一坂太郎、宇治社

ショーロッタ、ホーリーの最高傑作  
Y970  
イチ

ますらをたちの旅  
- 長州ファイブ物語 -

2006年10月8日 第1刷発行

著者 一坂 太郎

発行者 野村 興兒

発行所 有限責任中間法人 萩ものがたり

〒758-8555 山口県萩市大字江向510番地

TEL 0838-25-3233 FAX 0838-26-5458

<http://www.city.hagi.yamaguchi.jp/portal/story/index.html>

E-mail [story@city.hagi.yamaguchi.jp](mailto:story@city.hagi.yamaguchi.jp)

印刷 (有)マシヤマ印刷

山口県萩市椿3732-7

萬葉集

萩市立萩図書館



110708971

定価 1,300円（税込）